

(表紙)

北郷文書附錄

原題御文書令臨附錄

二

(中表紙)

「御文書令臨附錄 二」

〇二〇一 島津光久袖判条書写

(島津光久
花押)

一 從當家其方家ニ相分、代々不背太守為忠節之家由、有
其聞得、弥以不相替様心懸可為肝要事、

一家中廣他國へ相界之間、旅人之往還、別而念遣可為肝
要事、

一 雖不新、弓馬・学文之心懸可為專要事、

一 乍勿論、北郷家連續之上者、家老諸士下々ニ至迄、家
之作法不乱様ニ可被致思慮、何篇我佩無之様可被相心
得事、

一 伊集院左京・弟子丸六郎兵衛事、普代ニ而雖無之、其
方若き故、此節庄内へ召移之間、役人共萬事致相談、

仕置等可入念之旨、幾度茂可被申候事、

一 右兩人存寄之儀者、可致諫言之旨申付置之条、被聞入、
宜様相談可為專要事、

一 知行方并金銀米錢之儀、彼兩人承、曳付出之勘定、殘
物等之沙汰仕候様ニ可被申渡事、

一 年貢諸事収納方代官へ任置、役人共大形ニ而者笑止之
間、借金等無之様ニ心入題目ニ可被申付事、

一 任分限、武具之外、不入美麗物・数寄為奢普請、可為
無用事、

右條々、可被相守其旨者也、

寛文九年四月九日

嶋津外記殿

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」二二八七号文書ト同文ナリ)

○二〇二 島津久通・島津忠広連署条書写

條々

一北郷家之儀者、代々對 太守様忠節之筋目之故、向後
弥不相替様ニ与被 思召上、為連續外記殿庄内へ被遣
置候、因茲各兩人諸事為抑被遣候間、存寄之儀共無用
捨幾度茂可被申上候、尤家中之差引可為肝要事、

一知行方并金銀米錢出入、大形ニ無之様ニ被 思召上候
間、右取拂之引付、各兩人より被出可然候付、取納方
之儀、代官へ任置、役人者大形ニ有之由其間得候、向
後者各題目可被入念事、

一家中諸士到于下々迄、無作法無之様ニ可被申付、若氣
任之族於有之者、評定所へ可被申出事、

右條々、堅可被相守、外記殿へハ以 御袖判被仰渡之、
役人方へ茂以條書申渡候之間、可被得其意者也、

寛文九年酉四月九日

(島津忠広
市正判)

(島津久通
圖書判)

弟子丸六郎兵衛殿

伊集院左京殿

○二〇三 島津久通・島津忠広連署条書写

條々

一北郷家之儀者、代々對 太守様忠節之筋目候故、為相續
中納言様御代ニ者、式部太輔殿庄内江被召移候、因茲
向後弥不相易様ニ与被 思召上、為連續外記殿被遣置
候条、各致其意、得御奉公可為肝要事、

一今度伊集院左京・弟子丸六郎兵衛庄内へ被召移、萬事
致相談候様ニ与被仰出候間、諸事相役同前ニ可有相談、
若役人於致我儘者可及沙汰事、

一知行方并金銀米錢出入、大形ニ無之様ニ与被 思召上、
諸事取拂、右兩人引付出可然旨被 仰出之間、可得差
圖事、

一取納方之儀、代官ニ任置、役人ハ太抵ニ有之由其聞得候条、自今以後各題目可被入念事、

一家中諸士到下々迄、無作法無之様ニ可被申付候、若氣

任之族於有之者、評定所江可被申出事、

右條々、堅可相守、聊緩疎有間鋪者也、

寛文九年酉四月九日

市正判

圖書判

嶋津外記殿

役人中

○二〇四 島津久英書状写

新春之御慶、猶更不可有休期候、先以 少將様愈御機嫌

能、貴様御無事可為御越年与奉存候、御當地別条無御座、

拙者儀も無異相勤候、随而者為年始之御祝儀、御太刀・

馬代被下忝存候、御礼旁為可申入如斯候、猶期永日之時

候、恐惶謹言、

嶋津飛彈守

(寛文年間)
正月五日

久英判

嶋津外記様
人々御中

○二〇五 島津光久仰出書写

仰出

嶋津外記跡目、嶋津權十郎江被 仰付候之間可申渡之、

庄内之儀、一節ニ而茂難被明置在所之故如此候、尤後見

之人以御目合被 仰付、仕置をも可被相改之間、内々其

心得可被仕候、次北郷家之儀、代々忠節之家ニ候處、至

此節血筋可致断絶儀不御本意候間、後日以御見合血筋被

立儀茂可有之、此段茂可被承置之、委細之儀者御受之後

可被 仰渡旨 上意候、以上、

寛文十一年亥二月九日

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」二三六六号文書ト同文ナリ)

○二〇六 島津光久仰出書写

仰出

今度庄内跡職嶋津權十郎殿へ被 仰渡候、後見之儀、嶋

津帶刀へ被 仰付候間可申渡之、庄内之儀、近代不慮之仕合ニ而家難續ニ付、数年仕置無之、萬事祖母被致下知、仕置緩之儀而已有之、或領内致衰微、或若キ者共をも不取立、弥無人ニ而役儀勤者も無之、手つかへ之由其間得候、早竟女儀之仕置ニ付、役人共致大方之故如此仕合と、不届ニ被

思召上候、依之此節被相改被

仰渡事ニ候、殊ニ帶刀儀へ少由緒も在之間、番代相勤候と存、自身ニ曳請仕置相改申付之可為專要、若此旨を大方ニ存、物每致用捨、仕置等此中ニ不相替旨被 聞召上候ハ、帶刀越度ニ可被 思召上之間、此等之趣慥ニ可承置之通可申渡由 上意候、以上、

亥二月十二日

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一三三八号文書ト同文ナリ)

○二〇七 島津家老中衆口上覚写

御老中何茂より菱刈孫兵衛江被仰渡御口上之覚

今度都之城跡目嶋津権十郎殿へ被仰渡、双方共御請被為

申相濟候、右跡職ニ付而、萬事 太守様以 御思慮之上、被 仰出事御座候処ニ、色々以内證権十郎殿方より被為申由候、御當國ニ而者一之分限ニ候、ケ様成跡目之儀、御子様方餘多被成御座候處、取分ケ権十郎殿江被仰付儀、御冥加至極ニ候、此上ハ別而難有被思召、如何様ニも御詫次第可被成事ニ御座候処ニ、御若輩ニ付、いたらざるもの共、何のかのと申を被聞入被仰候儀、御分別違之様有之、成合不申儀与出合申候、孫兵衛事数年被相付居候御存分茂洲底可被存候、御一身之御分別ニ而者有之間鋪候条、孫兵衛前より万端 御掟次第被成候様ニ能々可被申含候、乍此上何かと被仰候者、御氣任ニ可罷成事笑止ニ候、先比御兩人之御仕合ハ、常々身弱御座候而之儀候、依之此節ハ万事從 太守様被成御改、長久ニ与被仰付儀ニ候、何かと口能かましく候而ハ不可然候、殊ニ嶋津帶刀殿へ後見被仰付候間、何様之儀も可被 任差圖旨具ニ可相達候、孫兵衛別而入念肝要之砌ニ候間、大方ニ被存間敷由被 仰渡候、此等之旨慥ニ可被承置候、已上、

寛文十一年亥二月廿四日

取次
喜入次兵衛

同
高崎惣右衛門

〇二〇八 某達書写

覚

嶋津筑後殿事、病氣有之、数年登 城を茂不仕候、同氏
権十郎事、最早成人候之間、月次之御禮日登 城可仕候、
於其儀者、當時者筑後殿為名代独禮可被 仰付候、尤以
後家督仕候節茂不相替独禮可被 仰付候、嶋津老岐殿・
嶋津頼母殿・阿多淡路殿者権十郎伯父之儀候得者、取持
不仕候而不叶儀ニ候間、右三人御禮相濟候以後、権十郎
儀者御禮可申上候、北郷家之儀分限ニ有之、且又日州他
領之境目領知仕来、境目番所をも被預置儀候故、独禮被
仰付之候、右式付而家之御取持相替儀ニ者無之候、家筋
之儀者、分限無足之無差別從古来領知仕来候、一所之地
茂今更無之人ニ而茂、不相替年始之御座配等ニ罷出候様
ニ被 仰付来候儀、

御家之御作法ニ候得者、年始之御座配等者、北郷家筋目
之通不被 仰付候而不叶儀ニ候、分限之威を以、當時小
身之家を越候儀者不罷成事候条、年始之儀者、御座配賦
付之通、御太刀進上可仕候、此旨可申渡由御意候間、被
奉得其意、明朔日より可被致登 城候、以上、

申
十一月廿九日

〇二〇九 市来次郎左衛門書状写

御國中乘輿御免之御願、達

貴聞、願之通御免之旨被 仰出候間、承知可被成由、將

監殿御差圖ニ候、以上、

十一月廿九日

追而申上候、明日御礼可有御座与奉存候、以上、

『上書』

嶋津筑後殿

市来次郎左衛門

〇二一〇 北郷久嘉書状写

舊臘廿日之貴札忝拜見仕候、少々御風氣ニ被成御座之由、御輕御事之由ニ御座候条、愈御快然可被爲成と珍重ニ奉存候、然者北郷家御度流、龍岡名字ニ被相改度旨御願被成候處ニ、島津内記殿より町田八右衛門殿を以、御願之通被仰渡候間、私家中江罷居候御度流之者とも、龍岡名字乗候様ニ被仰下趣、奉得其意候、依之北郷順右衛門・北郷才右衛門江申渡候處、難有仕合奉存候旨御禮申上候、此等之御請、且又私より茂御禮為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

北郷武右衛門

北郷才右衛門

右之者共へ、今度被相改候名字被下置度奉存候、北郷吉兵衛事者、御家より御直別之事ニ候間、嫡子迄者代々北郷名字ニ而被差置度奉存候、此段先頃筑後殿江御直ニ茂申上置候處、先刻入御念被仰聞趣致承知候付而如斯御座候条、宜御申頼存候、以上、

北郷(久嘉)作左衛門

十月朔日

渋谷次郎左衛門様

北郷作左衛門

正月八日

久嘉判

筑後様

参尊報

〇二一一 島津久當達書写

〇二一一 北郷久嘉願書写

北郷順右衛門

北郷家五代之家嫡讚岐守持久之四男辰久より三代之家督北郷次郎兵衛久利、其子次郎五郎久旨家督仕罷居候處、男子無之、今以後嗣無之候、北郷武右衛門事へ、北郷家七代之家嫡讚岐守忠相一流之者ニ而候間、當分役人をも申付置候、右武右衛門事、次郎五郎久旨後嗣ニ申付度由、

嫡家嶋津筑後へも申談候由にて、北郷作左衛門より申出、願之通武右衛門事久旨後嗣ニ可被申付候、此旨作左衛門へ可申渡候、以上、

十二月五日

(島津久苅)
将監

〇二二三 北郷久嘉書状写

一筆啓上仕候、弥以御勇健可被成御座、珍重御儀奉存候、然者北郷次郎五郎後嗣之儀ニ付、先頃得御差圖奉願候処ニ、今日願之筋ニ被仰付候旨、別紙之通被仰渡、難有仕合奉存候、此等之御礼、右之首尾為可申上如此御座候、委細之儀者渋谷次郎左衛門江申達候、恐惶謹言、

北郷作左衛門

十二月六日

久嘉判

筑後様
参人々御中

〇二二四 島津日新忠良教戒条々写

日新様より

義久様江御教訓之條々

善もあく悪も善なりなせハなる

こゝろよ心はちよおそれよ

一 不動愛染の衆生愛顧の形容を能く可有見執事、

一 聊尔(爾)の子細被糺詰者、各の護身之符、ついには良棄たるへき事、

一 閑々候者、當日者憐愍之様に候といふ共、翌日者身を

一 亡す禍殃の種たるへき事、

一 為國家には身をおします、あやまちを改、腹立なきに

一 いかり忿怒をこらへ、聖人の言葉を恐れ、理法に被任

一 心底候者、則天道神慮も佛法も他所にあるへからざる

一 事、

一 内には鰥寡孤獨のあはれミを密行し、上としては唯臨

一 別儀なき者か、假初にも人をそこなひ、やふらしの持

一 戒を逼塞候て、外には五常を匡、辻々に禁籠張着をも

一 構うるへく候、是誠の慈悲たるへく候事、

右五ヶ條、諫言に似るといへとも、真平老老之至と

可有寬免候、

永祿四年十月吉日

日新

義久
参

(本文書ハ「旧記雜錄後編」二一九〇号文書トホボ同文ナリ)

〇二一五 常徳寺大年東堂崇延外二名連署証

文写

故左衛門尉一雲入道時久公在世之日、召源左衛門入道宗永而、預被仰含意趣者、吾家之門葉連續之次第、既及三代不載于系圖、懈怠之至也、汝乞憑常徳寺大年東堂記焉云、此御遺言於戲于今不忘、敝命難默止、常徳寺宗永善財坊等与家老一族僉議而、遂熟談札明、子葉孫枝本末以常徳寺録焉、敢欲備後代之龜鑑而已、雖然恐有焉、馬芊羊之誤言詞訛謬年代齟齬歟、伏乞俟後君子正焉、仍為後日證文如件、

慶長元年龍集丙申林鐘吉辰

北郷源左衛門尉宗永入道

久親

善財坊

祐忠

大年東堂

崇延判

〇二一六 島津義久・義弘・忠恒連署掟書写

掟

- 一 諸侍何篇申付儀、於相應之儀者、不可難淡、若及異儀者、可有其沙汰事、
- 一 武具無油断可誘事、付百斛(付脱カ)二具足一領充可致用意(事脱)、小給人の事者、雖為右之内之名人々可馳走事、
- 一 出陳之時、廿五石取之衆者、可為自賄事、付二拾五石之内之衆も、門屋敷持者自夫たるへき事、
- 一 殿役於不相勤者、門一ツニ付領主の知行老石可被召上事、付百姓無之門屋敷たりとも、領主前より殿役可仕事、
- 一 諸侍番普請符等、若懈怠於有之者、可為曲事事、自然三度ニ及ハ、可没収所領事、
- 一 上下によらず喧嘩可為停止、縦無理非道をしかくるものあり共、其場を致堪忍可遂言上候、若私にて於事破

者、不及理非之沙汰、双方可加成敗事、

一諸外城衆中、地頭(諸事脱カ)の下知不可相背、別而於戰場、地頭

之手をはなれ、他の手に付いかやうの高名仕候とも、

不可為忠節、曲事之段可申付、若又地頭無理之儀あら

は可致披露事、付出陳之時、小給人衆者、從在所持具

自身持へき事、

一於戰場無御免衆、乘馬可為停止事、付便道之類、其外

手重き道具不可持事、

一百姓耕作、卯刻ニ出、戌刻ニ可帰事、付女共作に出へ

き事、

一倅者百姓(目下脱カ)ニよらず、走たらん時、互ニ不可致許容事、

一諸士召つかふもの、不依男女、日夜片時徒ニ居間敷事、

一就用段召寄人、不寄遠近、不移時日、打立之儀、或供

或使飛脚ニ至迄、差當たる日限不可相違事、

一縁者親類を促、一揆いたす事あらは、本人の事者不及

是非、同心の者共ニ可成敗事、

一常之振舞二汁二菜、塩・山榊ハ可為此外事、付私之大

酒可為停止事、

一毎度出物之儀、日限に過、無沙汰之者あり、如此類、

後日其科可有糺明事、

右之條々、若違犯之輩於有之者、於侍者(必脱カ)可沒收所領、

於凡下者堅可加成敗者也、

慶長六年八月七日

忠恒

義弘

義久

(本文書ハ「旧記雑録後編三」一五三四号文書トホボ同文ナリ)

〇二一七 武家諸法度写

武家諸法度

一文武弓馬ノ之道專ラ可レ相嗜ム事、

左文右武(志アリ)ヘ古ヘノ之道也、不レ可レ不レハル兼テ備ハラフ矣、弓

馬ハ是レ武家ノ之要枢也、号レテ兵ヲ爲ス凶器ト、不レテ得レ

已ユムニ用レフ之ヲ、治不レト忘レ乱マ、何ソ不レテ励メテ修鍊

乎、

一可レ制ニ群飲佚遊ニ事、

令條所載、嚴制殊重、耽好色、業博奕、是亡國之基也、

一背法度之輩、不可隱置於國々一事、

法は是礼節之本ナリ也、以法破理、以理不破法、背法之類、其科不輕矣、

一國々大名・小名并諸給人、各々相拘、士卒有叛逆殺害スル人者、速可追出ス事、

夫レ挾サム野心之者、為ニ覆レ國家之利器、絶レ人民之鋒一劍也、豈足允容スルニ乎、

一自今以後、國人之外不可交置他國者一事、

凡ソ因國其ノ風是異ナリ、或以自國之密事告他國、或ハ以他國之密事告自國、佞媚之萌也、

一諸國ノ居城雖トモ為レト修補必ス可言上ス、況ヤ新儀ノ之構營堅令ル停止事、

城過ハ百雉ニ國ノ之害ナリ也、峻墨浚隄大亂ノ本ナリ也、

一於隣國ニ企テ新儀、結テ徒黨者、在レハ之者、早テ可致言上事、

人皆有黨、亦少ナシ達者、是以或ハ不順君父、乍違ニ于隣里、不守旧制、何シテ新儀乎、

一私不可縮婚姻事、

夫レ婚合ト云ハ、陰陽和同之道也、不可容易ニ、睽曰、匪、寇ニ婚媾ヤ、志將レ通、寇則失レ時、天ニ曰、男女以レ正、婚姻以レ時、國無レ鯨民也、以レ縁成スハ、黨是姦謀ノ本也、

一諸大名參觀作法之事、

續日本紀制ニ曰、不レ預レ公事、恣ニ不レ得レ集、己レ族マ、京裡廿騎以上不レ得レ集、行ト云々、然ラ、則不レ可引ニ率、多勢マ、百萬斛以下廿萬斛以上不レ可過ニ十騎マ、十萬斛以下、可為ニ其相應、蓋公役之時者、可隨ニ其分限ニ矣、

一衣装之品不可混雜事、

君臣上下可為レ各別、白綾・白小袖・紫袴・紫裏・練・無紋小袖、無御免衆猥、不可有着用、近代郎從諸卒、綾羅錦繡等、之飾服非レ古法、甚制レ焉、一雜人恣ニ不レ乘ル興事、

古来依^レ其^ノ人^ニ、無^レテ御免乗家有^レ之^レ、御免以後乗家

有^レ之[、]然^レ、近來及^ニ家郎諸卒^ニ乘^レ興^ミ、誠^ニ濫吹^ノ

之^ノ至也、於^テ向後者、國大名以下一門之歴々^ハ者、不^レ

及^レ御免^ニ可^レ乘^ル、其^ノ外昵近^ノ之衆并^ニ醫陰^ノ兩道、或^ハ

六十以上^ノ之人、或^ハ病人等、御免以後可^レ乘^ル、家郎

從卒恣^ニ令^ル乘^ル者^ノ、其^ノ主人可^レ為^レ越度也、但^シ公

家門跡并^ニ諸出世^ノ之衆^ハ者非^ニ制^ノ之限^一、

一諸國^ノ諸士可^レ被^レ用^レ儉約^ノ事、

富^ル者^ハ、弥々^ク誇^リ、貪^ル者^ハ、恥^フ不^ルコトト^モ及[、]俗^ノ之凋弊

無^レ甚^シ於^テ此^一、所^ナリ令^ル嚴^シク制^セ也、

一國主可^レ撰^テ政務^ノ之器用^ノ事、

凡^ソ治國^ノ道、在^リ得^ル人^ヲ、明^カニ察^スレハ功過^ヲ、賞罰必^ス

當^ル、國^ニ有^レ善人[、]則^チ其^ノ國弥々^ク殷^{ナリ}、國^ニ無^レ善人[、]

則^チ其^ノ國必^ス亡[、]是^レ先哲^ノ之明誠^也、

右可^レ相^ニ守^ル此^ノ旨^者也、

(元和元年)
慶長廿年乙卯七月日

○二一八 武家諸法度写

武家諸法度

一文武・弓馬之道專可相嗜度、

左文右武古之法也、不可不兼備矣、弓馬是武家之要樞

也、號兵為凶器、不得已而用之、治不忘乱、何不勵修

鍊乎、

一大名・小名在江戶交替所相定也、每歲夏四月中可致參

勤、從者之員數近來甚多、且國郡之費、且人民之勞也、

向後以其相應可減少之、但上洛之節者、任教令、公

役者可随分限事、

一新儀之城郭構營堅禁止之、居城^ニ隄壘石壁以下敗壞之

時、達奉行所可受其旨也、櫓・塀・門等之分者、如先

規可修補事、

一於江戶并何國、縱令何篇之事雖有之、在國之輩者守其

所、可相下知事、

一雖於何所而行刑罰、役者之外不可出向、但可任檢使之

左右事、

一企新儀、結徒黨、成誓約之儀制禁之事、

一諸國主并領主等不致私之諍論、平日須加謹慎也、若有可及遲滯之儀者、達奉行所可受其旨事、

一國主・城主・老万石以上并近習之物頭者、私不可結婚
姻事、

一音信・贈答・嫁娶儀式、或饗應、或家宅營作等、當時甚至花麗、自今以後可為簡略、其外万事可用儉約事、

一衣裳之料不可混亂、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上聽之、紫袷・紫裏・練・無紋之小袖、猥不可着之、至于諸家中郎從諸卒、綾羅錦綉之飾服非古法、令禁制事、

一乘輿者、一門之歷々・國主・城主・一万石以上并國大名之息・城主暨侍從以上之嫡子、或年五十以上、或醫

陰之両道・病人免之、(其外脱カ)禁濫吹、但免許之輩者各別也、至于諸家中者、於其國撰其人可載之、公家・門跡・諸

出世之衆者制外之事、

一本主之障有之者不可相拘、若有叛逆殺害人之告者可返之、(背カ)向輩之族者或返之、或可追出之事、

一陪臣質人所獻之者、(追放罪刑時者)追放罪刑時者可伺上意、若於當座有難遁義而斬戮之者、其子細可言上事、

一知行所務清廉沙汰之、不致非法、國郡不可令衰弊事、

一道路驛馬舟梁等無斷絶、不可令致往還之停滯事、

一私之関所新法之津留制禁事、

一五百石已上之船停止之事、

一諸國散在寺社領、自古至今所附來者、向後不可取放事、

一萬事如江戸之法度、於國々所々可遵行之事、

右條々、准當家先制之旨、今度潤色而定之訖、堅可相守者也、

寛永十二年六月廿一日

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」八三五号文書トホボ同文ナリ)

〇二一九 乘馬衆へ被仰出条々写

乘馬衆へ被 仰出條々

一御供之時召列候者共、馬場ニひろかり候ハぬ様ニ可申付事、

一道悪候とて、或あしき所を飛越、或よけなといたす儀可為停止事、

一何方ニても御乗物被立候者、人の通候所にふさかり候

ハぬやうニあり〜敷、他方の衆など被見候様ニ可心得事、

右條々、致油断間敷之由、所被 仰出如件、

一大名衆へ御出の時、うちへ呼入候共、無御下知候者、座敷へ入ましき事、

〇三二〇 陸御供衆法度之条々々
陸御供衆御法度之條々

一何方にても何そ見物可有之時、不被 仰付衆見物仕儀、堅可為停止事、

一御供之時、馬場にひろかり候ハぬ様ニ、御乗物の廻にすはミ候て可参事、

一路次に馬・牛などに行あひ候時ハ、詞にて脇へよけさせ、或たゞきのけ、或つきのけなといたすましき事、

一道悪候とて、或あしき所を飛越、よけなといたし候事、堅可為停止事、

一大名衆へ御行あひ被成候時者、傍へよけ、無油断様ニ可心懸事、

一何方にても御乗物被立候ハ、御供衆人の通候所にふさかり候ハぬ様ニあり〜敷、他方之衆など被見候様ニ、よく〜可心懸事、

一上様御鷹にあひ候時ハ、早々致下馬、懸勲之躰可為尤事、

一大名衆へ路次にて御行あひ候時ハ、傍へよけ可罷通事、

一路次にて御乗物近邊にて下馬之衆候者、早々馬より下可致礼候、左様之時空見にて馬乗ながら通候儀可為慮

一よその衆へ不行當様ニ何時も可相嗜候、就中路次にて乗物、又ハ馬・牛などに行あひ候時、詞にて脇へよけさせへき事、

外候間、能々可相心得事、

一両口とらせ候儀、あるましき事ながら、弥可為停止事、

一又小者共色々たハふれ事共候ハぬやうニ、小者奉行衆

一他所より使など見懸候者、早々馬より下、御乗物ちかく可参事、

よく〜入念可申付候、五度も三度も申聞、其趣不請付者うちしはり可仕候、左様之時為主人對小奉行りく

つお申者、早々可致披露事、

一惣別行儀餽相ニ無之様ニ可相嗜事、

一大名衆へ御出之時、若内へよひ被入候共、無下知候者

座敷へ入ましき事、

一何方ニても何ぞ見物可有之時、不被 仰付衆、見物か

たく可為停止事、

一供屋ニて、或うたをうたひ、高物語、或足拍子を取人、

ミあひなといたす儀可為停止事、

右條々、堅可相守、若緩於有之者、稠可有其科者也、

寛永十二年七月四日

〇三二一 島津久慶外三名連署達書写

覚

一士衆之女房・女子并下女誓⑩紙入間敷候「此間キレテ不見」、

人数改帳ニハ堅固ニ可被糺付事、

一男子十歳より十五歳迄ハ誓紙ニゆびかた計仕、十六歳

より上ハ血判たるへく候、⑩此「此間キレテ不見」歳より下ハ

判入ましく候事、

一他所之衆中、何之前へも居住仕候ハ、きりしたん宗

ニて無之由、本所之地頭・噯⑩衆之「キレテ不見」引付手札可被出候、

地頭・噯衆之引付於不被出者、其所之任人ニ可罷成候、

きりしたんニて無之候と書物を取置、手札可被出候事、

一他所へ居候人之被官、きりしたんニて無之候由、人之

引付ニて何かし之被官と札ニ書付、手札可被出候、證

文於無之者、向後ハ其所之任人ニ罷成、本主人之手を

可離由書物とり置、手札可被出候事、

一浮世人ハ其村々ニ相付、浮世人と札ニ書付、手札可被

出事、付町ニ居候浮世人ハ、部當より書物をとリ、町

之浮世人と札ニ書付可被出候事、

一日本國中ハ一同ニきりしたん宗改御座候間、隠所有間

敷候、陸路之才覚不罷成候て、船ニ取乗こゝかしこの

津浦へ可相懸候間、旅船入来候ハ、早々其船之船

頭・水手陸路へおろし置、何方之人ニて候と糺付、書

物をとリ置、鹿兒嶋へ可被申越候事、

一唐人奉行新納加賀守殿・頭娃長左衛門尉殿ニて候間、

唐人帳右兩人へ可有首尾候事、

一 改衆へ、其所中之送夫・馬草・薪・野菜等、其所より可被出候、改衆高百斛より下之衆へ、まかなひ夫人
充從其所可被給候事、

一 改衆無狼藉様ニ可被相嗜候、泊々之宿賃入間敷候事、
右條々、堅固ニ可被相改者也、

寛永十二年十一月朔日

(三原重胤)
左衛門 佐印

(鎌田正統)
出雲守

(山田有栄)
民部少輔

(島津久慶)
弾正大弼印

〇三三二 島津久慶外三名連署達書写
覚

一 八月廿八日、江戸於御城被 仰出候貴理師且宗御法度
之儀、 権現様 相國様御代より稠御法度ニ而候、雖
然于今國々へきりしたん宗隠居候由、被及聞召候間、
弥以諸國右宗改之儀、可入念由被 仰出候事、

一 於江戸諸大名衆御談合にて、霜月朔日より十二月中旬

比迄、諸國一同ニ可有改之通相定り候故、當國も右日
限ニ改申付候事、

一 従長崎伴天連走候間、旅人改可入念事、

一 當國男女當歳より百歳迄、老人も不残帳ニ付留被改、

貴理師且宗ニ而無之、於慥成者手札可被遣事、

一 五人与ニかゝり状を申付可被取置候勿論、噯衆・肝煎
よりもかゝり状可被取事、

一 旅人、其外不審成ものには手札不渡候而、次第ニ可被
遂穿撃事、

一 数年居付之旅人ニハ、書物をさせ、其上入念沙汰候而、
無口能候ハ、手札可被渡事、

一 先年ころひ候貴理師且、諸所へ可有之候間、其内ニ不
審成ものをまつとらへ、強問候て同類を申出候者、歴

々凡下之者ニ至迄、其ものゝ家に走籠、家之内、入物
之底、床の下、又屋敷中之すゞはしゞまで細ニ

可被改事、付右訴人ニ者金銀を可被下事、

一 寺社之衆僧手札不取候者、御分國中往還難成候条、手
札可被出事、

一盲目・行脚・道心者・せいらい村・しゆく等迄入念可被改候、不紛ものに於いてハ手札可被遣事、

一手札面々ニ被相渡候而以後、其所之若き衆ニ被申付、

札不持ものハ不依誰人可被擲捕候、併楚忽ニ狼藉成儀無之様ニ可有分別事、付焼印判之手札取不申内者、先

其所之地頭・改衆前より紙札ニ印判を被押書、後日焼印判ニ可取替事、

一納方之米・出物之米下し、其外不依公私用所のものハ、
喫衆・改衆より、以書物可致通融様ニ可被申渡事、

一改之儀者人数之指出を取、其帳面に引合、無紛通被糺付可有沙汰事、

一其所にて貴理師且宗はてれん・いるまん・同宿小僧并宗を廣め候者・いまた宗旨を替さるもの於有之ハ、地頭・喫衆、其在郷之庄屋・五人與ニ至迄遂穿穿鑿、依科之輕重可其有沙汰事、

一貴理師且唐人にまされ候間、居付之唐人入念可被改候、唐人帳早々可被指出候、唐人之名者たとへは二官三官と書候計にてハ紛候間、然与不知候間、其氏ほんの名

を可書出事、

右條々、天下之御法度ニ而候間、能々相守可被改候、若他國へ訴人共御座候而、當國之内何方へきりしたん居候由申出、天下之以御檢者さかし被出候ハ、國家之一大事不過之候間、留心肝、明鏡ニ可有沙汰者也、
寛永十二年十一月朔日

(三原重胤)
左衛門佐判

(山田有榮)
民部少輔

(鎌田正統)
出雲守

(島津久慶)
弾正大弼

〇二三三 島津光久条書写

被 仰出候條々

一今度帰國以前、於 御城 公方様御直ニ被 仰聞候趣者、國中不耆、萬花麗之儀無之様ニ可申付之旨、御詫候之間、各可得其意事、

一國中諸沙汰之儀、 黃門様御時ニ不相替様可申付事、
一諸士諸事氣任之儀於有之者、曲事之段稱可申付事、

一きりしたん宗之儀、當家代々禁制候處、近年者天下之

御法度稱被 仰出候ニ付、弥令其沙汰候間、此宗跡之

儀、片時も〔不違カ〕置不可有緩事、

一於江戸被 仰出御法度之趣、不相背様ニ連々心懸可入念事、

一自然於天下御弓箭共於有之者、別而可致御奉公候間、

諸士連々武具・馬鞍等之嗜、軍役可相勤心懸可為肝要

事、

一酒女之儀、能々可相嗜事、

一黃門様被 仰置候儀、不相違可申付候、自然其旨相背

之輩於有之者、少も無用捨其科可申付候間、能々可承

置候事、

一諸士知行ニ相懸出物、未進無之様ニ可相調儀肝要候、

然者連々不入儀ニ費米錢、花麗かましき儀一切令停止、

出物・軍役等可相勤心懸不可致油断事、

〔江戸御朱書之内〕

○一刀之尺式、尺八寸より上、脇さしの尺一尺八寸より上、

同朱さや大かくつはの事、

○一下々のもの下ひけ・つりひけ并ひたい大なて付・大

そりさけの事、

○一小者共袖へり上下の帯絹之事、

○一結徒黨、致荷擔、或妨をなし、或落書・張文・轉突〔傳〕・

不行儀之好色、其外ニ不似合事業不可仕事、

○一大身小身共に自分用所之外買置、商買利潤のかまへ

いたすへからざる事、

○一陸若黨衣類、さや・ちりめん・平嶋・羽二重・絹・

紬・布・木綿之外停止之事、付弓鉄炮之者、絹・紬・

布・木綿之外不可着之、小者中間衣類萬可用事、

○一物頭諸役人萬事ニ付而不可致依怙、并諸役者其外之品

々常ニ致吟味、不可油断事、

○一上意之趣、縦如何様之もの申渡といふ共、不可違背

事、

右條々、無緩疎可相守者也、

寛永十六年七月朔日

〔本文書へ旧記雜錄後編六三〇号文書トホボ同文ナリ〕

〇二二四 島津光久達書写

覚

一 當家二十代餘無恙相續不輕儀候、中興 日新様 伯圍様 龍伯様 惟新様 黃門様之御時、右御連枝之衆、對 御家無疎意、度々粉骨之条々、定而可被聞及候、就中於當代者、連枝之衆餘多有之事候間、行末頼母數存候、縦國中轉變之時節雖有之、不混于他不可過、御家長久之賢慮候之事、

一 去々年於江戸繼目相濟之刻、家郎之衆迄ニ 公方様御直ニ久敷家ニ而候なと、難有 上意共承、誠希代之面目不過之候、然者自然於天下被仰付人数儀も有之者、抽忠勤度内存候条、軍役之儀を題目染心肝、萬事分限相應ニ花麗無之様、可被用儉約之事、

一 被忘置儒学・弓馬、其外道々敷嗜方、或任氣佚遊之樂、或夜行等みたり成行儀令停止畢、并預置一所候衆不節用、地頭所之見廻可有遠慮候事、

一 登城之時、異様ニ無之様ニ慇懃可被相動候、將又先祖之忌日寺へ参拜之時者、長袴着用候て、いかにも可被

畏敬之事、

一 相背國家之法禁輩於有之者、雖為各可及沙汰候、付世間者插私意、以計策、或密事を告、自他犯人之意、或可結朋黨躰ニもてなし、懇切ニ取寄族も可有之候、一旦者鼻負之様ニ可被思候、其志向後者還而可為讎候状、若又兄弟衆之間ニ如何様之和議茂可有之刻者、此等之次第速可有言上之事、

一 老中衆へも無談合、或企諍論、或任短慮事を破、且復輕内之者殺害等鹿相ニ被致沙汰間敷候、何事茂 黃門様以來被付置候衆へ可有内談之事、

一 横目を申付置候間、諸事不可有油断之事、
以上

寛永十七年正月廿四日

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」一〇三号文書ト同文ナリ)

〇二二五 島津光久達書写

覚

一 從老中到諸士奉公方可申付時、於相應之儀ハ聊不可致

難波事、

一 遮而無用所ニ夜行付、辻うた可為停止事、

一 諸役人毎日令登城、無懈怠各職事堅固ニ可致沙汰事、

一 一番不參之輩ハ、從老中衆稠可被致沙汰由申付置候間、

油断有間敷事、付朔日・十五日・廿八日・節供々々ニ

者可致出仕事、

一 きりしたん宗旨聞付候ハ、追付言上可申事、

一 喧嘩口論可為停止候、縦いか様成儀を相手仕かけ候共

致堪忍、其場可仕披露候、私ニ事をやふり候ハ、可為

曲事事、

一 雖不新分、於方引於類所中之騒動に成事を相企ものあ

らは、其科可申付事、

一 留守中諸事、不依大身小身、背法度於致邪儀ハ、横目

を付置候間、聞付次第曲事之段可申付事、

一 若きもの共、徒之雜談迄にて有くらす由、其聞得候、

留守中奉公之すぎくニ、学文・弓馬之道專ニ可相嗜

事、

右之條々、無緩可相守者也、

寛永十七年正月廿八日

〇二二六 島津光久達書写

覚

一 當分御名跡無御座之儀候間、御家中置目之儀鹿兒嶋ニ

被聞召上、何篇可被仰付之由候、就夫口事篇彼是之儀

ニ付、氣任成儀共御座候ハ共、此中者用捨已耳ニ御座

候、左様ニ候得ハ、公儀之成合ニ相背事ニ候間、向後

者少も無用捨鹿兒嶋ハ可申上候、此旨堅申届候、各可

有其心得候事、

一 諸出物之事、毎年稠被仰付候、當年事、就中堅被仰付

候間、無緩可有心懸候、付御蔵入之田地に諸給人作式

共候て、納方不相調衆御座候、殊ニ新地歴々衆左様之

由令心得、御借銀返済方ニ付、万事稠被 仰付候時節、

ケ様之事不成合儀候間、一途可及沙汰候事、

一 又之士、可為木綿衣裳之由被仰渡候間、當所士衆其心

得專候、但所にてハ士之帯ハ絹御赦免、鹿兒嶋ハ可被

罷出時者、帯までもめんたるへく候、又之者、町在郷

男女ともに衣裳襟帯下のをひ等まで、きぬの類何も御
法度候、從鹿兒嶋堅被仰付御法度之儀ニ候、若相背、
きぬの類着用之者、則可剝取候事、

可申上候、以上、
寛永廿二年正月三日

評定所印

一 正月之為祝儀進物之事、親兄弟ニ者可有之候、其外者
一切可為停止候、并正月よりあひの事可為御法度候、

一 異國船見得來候ハ、不移時刻可申上之由、弥浦江
被仰渡候、就其常々次飛脚者達候間、吳國船之左右可
申來時者、所次ニ侍衆可被次渡候、如何にもかんちう
成早道かけの衆を撰、連々拾人も拾五人も被申付置、
次飛脚之状可參時者、慥ニ時付之下ニ其所より必判被
押候而、可被次渡候、雖為少時遅々之所者、噁衆之可
為越度事、

三月三日・端午・八朔、其外節々之祝物、右可為同前
候事、

一 吳國船着岸之浦へ者、爰許より即刻可被相越檢使御儀
定從江戸被 仰下、早被 仰付置候間、夜白不嫌可被
罷越候、御傳馬遲出中途滞在候ハ、其所之役人・町
別當・庄屋へ深々鋪曲事之段可被仰付之由候間、今度
之儀者別而其心得被仕、早々可被申付置候事、
一 其所々暫時之延引も、御國之御越度ニ成儀ニ候、是者

一 右條、何も鹿兒嶋任仰付申渡候、無緩可被相守候、折
々御法度之儀申渡候得共、區々に候間、自今以後若相
背人御座候ハ、如右無用捨可申達候由、堅申届置候事、
寛永廿年

霜月十五日

為越度事、

〇二二七 評定所達書寫

覺

從前々如被 仰出、毎月五日、同廿一日・二日・三日御
禁断日にて候間、殺生仕間敷候、たとひ鉄炮之立物并弓
矢持出事も可為停止候、若相背者あらは堅留置、此方へ

一 其所々暫時之延引も、御國之御越度ニ成儀ニ候、是者

天下事ニ候間、尋常之儀之様ニ大方ニ被存ましく候、
衆中之儀者不申及此時之御舉土ニ候、不依町在郷之者
ニ遅々候輩へ者、曲事之段可被仰付候、内々各可被承
置候事、

正保二年三月十二日

穎娃左馬頭印
(久政)

川上因幡守印
(久國)

嶋津彈正大弼印
(久應)

都之城

喫衆中

殿役奉行

(本文書ハ「旧記雜錄追録」九号文書ト同文ナリ)

〇三二九 島津久頼外二名連署達書写

覚 御条書写

一向之嶋 一佐多鹿倉數ハ山奉行
より可被相定候 一谷山右同

一春山右同 一伊作右同 一完之嶋いから右同

右六ヶ所者、定可為御立鹿倉候間、其旨堅可被申付候、

右外、諸外城山之儀者、其所之地頭衆中・領主狩惣自
由ニ可被仕候、運上之儀者、猪者片平、鹿者皮計たる
へく候間、入念を張立、上納可仕候、猪者遠所者其所
にて賣調、山奉行以差圖、代物可致首尾事、

一熊・羚羊取候へ、其儘山奉行へ可致上納事、但褒美
之銀者物奉行より可出事、

一出水・羽月・山野・大口・吉田・馬関田・加久藤・飯

野・須木・野尻・綾・高岡・倉岡・穆佐・山之口・梶

山・勝岡・梅北・志布志

右十九ヶ所へ、境目方角之鹿倉、宍之運上有之間敷候、

雖為同所、内場之狩倉者可致運上事、

一諸外城行司、為狩代百姓を召仕、其外何色にて取候

儀、堅可為停止事、

一公儀之御狩、年中ニ三度ツ、其所之衆中計にて可被

申付事、付御狩前ニ一切山を留置、可致御狩事、

一壺所衆山完請銀、自今以後者有之間敷事、

竹木定之事

一寺社中之木、其寺社修理之時者、如此中相應ニ山奉行

へ被申断可被為伐事、

一 雜木ハ、其所之喫衆・竹木奉行前より、土以下自由達候様ニ可被伐候、或并木・屋敷廻之木、用水井手料ニ立置候山、或神木、寺社中廟所、御城山、浦濱之松原等之木伐候儀者、稠可為停止事、

一 其所々薪・塩木并雜木取候山無之所者、隣外城之山へ入候へて不叶儀候間、其心得を以、障ニ無之様ニ互ニ可被申付事、

一 竹ハ鹿兒嶋御普請用ニ此中立置候、船着津出能所者替儀有之間敷候、其外之諸所之喫衆・領主・竹木奉行、以校量可被為伐事、

一 楠・杉・檜・榎・桐

右者、不依大小、山奉行以手形可被伐候、代銀之儀者、此中三分ニ可被申付候、他國商賣之時者代銀可相重事、但物直成時ニより甲乙有之儀候間、前ニ相定候直成、至當時各別相違可有之時者、直成高下吟味を以御為可然様ニ可被相改事、

一 松ハ、本之口沓尋廻より上之木ハ、山奉行以手形可被

為伐候、代銀之儀者此中之三分ニ可被申付候、其下之木ハ屋材木自船作ニ者、不依誰人、其所之喫衆・行司前より、無代銀望候人へ可被引渡候、領主有之所ハ、領主へ以相談可被伐候、但商賣用ニ可申請木者、不依大少、代銀可被申付事、被立置候而可然松山可有之所ハ、地頭・喫見合を以可被立置事、

一 御城山之外ニ松餘り茂候へ者、出水無之由其聞得候、若左様成所有之候て、田地之障ニ罷成候ハ、其所之喫・竹木奉行・郡奉行、以相談可被為伐候、其外田畠之障ニ罷成候木ハ可為同前候、勿論沓尋廻りより上之木ハ、山奉行以手形伐調、其所之商賣次第賣調、山奉行へ可致首尾事、

一 伏木者、何木にても其所之喫衆・竹木奉行・行司・領主前より申請候人へ可被遣候、但楷木ニ可罷成程之木者、山奉行手形可申請候、代銀之儀者、海邊遠近有之儀候間、其所之任相應ニ可被申付事、

一 桑・深・榎・柿・梨・梅・桃・椿、其外柑類之木伐候儀、かたく可為停止事、

一 船楫木・屋材木ハ不及申、其外之雜木・松節・竹等、

為商賣他國江出候刻者、手形可被申付事、但甌嶋・出

水・高岡・志布志之儀者、右之色々望之人雖有之候、

鹿兒嶋遠方之故、通手形申請候儀難成ニ付不致商賣由

候条、喫衆より通手形可被出事、

一 樟腦山之儀者、如此中御用木迦ニ而可被為燒事、運上

之儀も如此中可被申付事、

一 檜木樽物師・木地引こぶし取、如此中運上可被申付事、

一 諸嶋之儀も御國可為同前事、

一 自今以後者御分國中之山へ、他國之杣取可有御入候間、

可致其心得候、杣取入候て可然山者、山奉行見合以相

談可被引渡事、

右條々被相定、正保三年十二月十七日ニ以条書被仰出

候内、今度少々相直候、細々被見届、諸所へ慥ニ可被

申渡候、依所、或御用木等猥ニ伐取、或御赦免之竹木

を私ニ留置、其所之士以下不達、自由致迷惑之由、其

聞得候、自今以後弥守御条書之旨、相違無之様ニ堅可

被申付候、若相背者於有之者、稠可有其沙汰者也、

慶安三年二月十七日

山奉行

仁礼藤左衛門殿

奈良原五後介殿

野村外記殿

右之旨、弥可被相守者也、

山奉行所印

慶安三年丁六月十七日
郡之城
行司衆中

竹木見舞衆中

喫衆中

〇二三〇 与頭可致覚悟条々々

与頭可致覚悟条々々

一 與中へ野心不忠之者可有之時者、早々可被致言上候、

(鎌田政有)
鎌源左衛門判

(北郷久如)
北佐渡判

(島津久頼)
嶋筑前判

若與頭油断ニ而於不被申上者、與頭并談合衆可為同意之心底之事、

一天下國家相定大禁之外、當御代ニ被 仰出諸御法度并每度被 仰出候条目、謹而可被相守之、右之内若不慮

ニ相背輩者、或科番・科普請、或科物・寺領等之儀、以沙汰之上可被申付、勿論背大禁輩者可被處敵科事、

一吉利支旦宗・一向宗於有之者、致糺明言上可被申事、

一與中へ喧嘩并口事篇出合候者、早速寄合、致談合可被相濟事、

付口事決断之後、經日月、出後之證文などを捧、訴詔

申出人雖有之、一旦衆儀決断ニ而為相濟儀、被請付間敷事、

一口事篇并訴詔之儀、老中・与力にて内證令停止候、常式之用段者可為各別事、

一御奉公方被 仰付候刻、構虚病、或致難澁之族者、以談合可被致言上候、外城へ可被召移事、

一與中於緩者、與頭・談合衆可為越度事、

(本文書へ「旧記雜錄通録」一四八〇号文書ノ前半トホボ同文ナリ)

〇三三一 与衆へ可被申渡条々写

與之衆へ可被申渡條々

一与與之衆、與頭之下相知背間敷候、尤御奉公方致難澁輩於有之者、致其沙汰、相應之科可申付事、

一御出陳、或在江戸、或狩等可被仰付時、吳儀被申間敷事、一連判ニ而何篇申出輩、 御家御代々堅被禁止儀不新候

へ共、猶以不相替御政道之旨、諸士下々ニ到迄可相心得事、

一喧嘩口論并口事篇出合候者、與頭へ早々可申出、聊致遅々間敷事、

一諸士御改易、其外罪科人搦捕御誅伐之刻、非御差凶人其場へ被參間敷候、付蒙御勘氣候衆、見舞音信可為停止事、

一火事上方角ニ可有之刻者、下方之諸士御城へ可被罷出、又下方へ可有之時者、上方之衆 御城へ可被罷出、無

據親類之所へ火事出来候者、可為各別事、

一訴詔其外申分之儀、與頭へ相付可致披露、若不用其旨人於有之者、可有其沙汰事、

承應貳年九月三日

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」四八〇号文書ノ後半ト同文ナリ)

〇二二三 宗体奉行所達書写

覚

一 御當家御代々一向宗御制禁之儀、乍存右宗旨執着之者
本尊致格護、外面者彼宗旨にあらざる作法にて、内心
者欲轉宗旨之族多々有之由、依無其隱、此度被入御念
御改被仰付候事、

一 右宗旨之者、誠不知御國恩、不顧被處死罪・流刑、
密々ニ引彼黨類、背御國政罪科太深重也、因茲近年稱
敷雖被仰付候、此度者御心持有之故、被差置先例、御
慈悲之御仕置候間、難有可奉存候、若不守其旨族者、
可為各別事、

一 如斯難有不悛御政道本尊持之者、偽を以申掠輩於有之
者、當座ニ搦捕、其趣早々可遂披露事、

一 乍重言、一向宗御禁止之儀、當 太守様新被 仰出儀
ニ而も無之、御先祖以來御制禁於于今緩疎候者、御

氏神之御尤難御遁被 思召上、御神慮題目之御法度候
事、

一 就所々御改、横目衆兩人・宗旨之者兩三人案内者とし
て差越候間、於公領者噉衆可被罷出、又給地之在所者、
領主役人之者罷出、入念本尊・仏具・書物以下ニ到迄
取集可差上事、

一本尊持者不及申、惣様宗旨之族者、其所於祈願所起請
文可申付勿論、誓紙并前書之案書越候間、具可被為讀
聞事、

一 此度宗旨相替證據ニ者、何れ之寺ニ付、何宗ニ罷成由、
書物可取置、且又其寺之檀那帳ニ可書載事、
付彼族右相替候宗旨不致真仰、一向宗ニ於立反者、無
宥赦從住持可被令披露、萬一脇より相知候ハ、住持可
為越度事、

明曆二年申二月十二日

宗体奉行所印

〇二三三 藩郡所達書寫

覚

一 鹿兒嶋持之門付之仕明地者、今度引并ニ相加定致三斗五舛、可然地を可被入候、少ニ而茂悪地者可相除候事、
一 門付之仕明地并無作地、今度三斗五舛代ニ并之地ニ而候ハ、可被入候、少ニ而も悪地にて候ハ、可被相除候、
左候而仕明地無作地、此中手形被申置候地、持留帳与被仕立可然候、
一 常作少も不怠様ニ被仰渡候、若作人無之所者、今度我々ニ可承候、左様ニ無之候而代成相定候時分、領主方へ被仰出候ハ、稠沙汰可仕由被仰出候間、其御心得可有之候、若殿役作ニ成候ハ、此節承可相濟候、
一 諸百姓身ヲ賣候を、此中者領主よりノ證文ニ而札被相除候、今度引并之面付ニ合候百姓被相除間敷候、此節より百姓出入之儀者、郡座より可承よし被仰出候、諸所へ御廻文追而可相廻候事、
一 諸百姓子とも、出家・山伏、或祝子などへ罷成候儀、稠御法度ニ而候、若不罷成候而不叶者ハ、鹿兒嶋郡奉

行免證文可出候事、

一 諸百姓男・女子・下人并名子老人も此節引并之帳面ニ被相除候ハ、稠其沙汰可仕由被仰出候間、其心得可有候、

一 ならし相濟候而より、百姓面付之札帳ニ而相改可申候、其時分若被除候もの候ハ、喫衆・郡見廻衆可為越度候よし被仰出候事、

一 此節并帳ニ人内之者、或ハ山伏坊主ニ成候と申被相除候者候ハ、此節可承候、能々面付可被入念候事、

一 棕栢・櫨・桑・楮・漆其外、依其所ニ可然御用木候ハ、前々以苗或者さし木可仕立候、其植所ハ我々可見合事、但用木老人ニ付十本ツ、人役可為候、左候而植得分ハ十本ニ付五本ツ、可被下由候事、

一 領主より百姓ヲ無理ニ被召仕候衆有之由候間、左様成百姓有之候ハ、此節我々へ可申出由、喫衆より諸々百姓へ可被仰付候事、付今度引并ニ付、不入切錢・切米百姓より仕間敷事、

明曆三年丁酉二月十七日

郡所

〇二三四 島津久通外六名連署達書写

覚

一御分國中諸士召仕下々、自今以後、不依男女永代ニ買候儀令停止、向後可為年季雇候、若相背者於有之者、賣手・買手双方科物可申付候、但前々より永代ニ買候者ハ可致賣買事、

一御藏入・給地、寺社家・町濱之者、男女共ニ向後身躰行迫候者者十年季、或五年季、或三年一季之奉公ニ可出候、乍勿論百姓者田地之障ニ不罷成過、其所之噉・庄屋證文ニ而、鹿兒嶋郡座へ申断、其上を以可致落着、浦濱之儀者、船奉行より右同断之可為支配事、

十年季男一人

一雇銀三百目

一扶持米六斗但年中分

十年季女老人

一雇銀貳百目

一衣裳扶持

五年季男老人

一雇銀貳百目

一扶持米六斗但年中分

五年季女老人

一雇銀百廿目

一衣裳扶持

三年季男老人

一雇銀百廿目

一扶持米六斗但年中分

一年季男一人

一雇銀七拾目

一扶持米右同

十五ヶ月江戸雇男一人

一雇銀百廿目

一衣裳扶持其家中并

一右雇者年廿歳より四拾才迄

右定之可為雇銀候、廿才より下、四拾歳より上之者ハ、定銀之内相對次第ニ可致減少、付定之上ニ内談ニ而増銀を出於相抱者、双方共ニ可為科物事、

一年季之内、或煩、或暇出有之者、年季明候ても、其日
数者可致奉公事、

一年季不明内熟談ニ而於相迦者、定置雇銀割を以可致差
引、若氣任ニ相迦者者、本銀返済可申付事、

一年季明候て又々可相抱与於致契約者、重而證文相改可
召仕事、

一年季之内於致欠落ハ、口入前より不足之應月数、賃銀
可相返事、

一雇之内公私之法様相背致氣任輩者、急度曲事可申付候
事、

右条々、堅固ニ可相守、若違背之輩者、稠可及沙汰者也、

寛文二年寅十月廿八日

(鎌田政有) 源左衛門印
(町田久則) 勘解由印
(新納久詮) 右衛門印
(島津久茂) 中務印
(鎌田政直) 藏人印
(島津久頼) 筑前印

(島津久通) 圖書印

都之城

役人中

〇二三五 島津久通外五名連署達書写

御參勤之御上下并御分國中方々御行之刻、諸所之地頭よ
り御供衆不残振舞候儀無用ニ被仕、宿元へ支度ニ罷帰、
障無之御當用之人迄 御着之刻、亭主より振舞可出候由、
従前々被相定候之處ニ、此比惣而御供衆へ料理有之候、
向後御當用之人計、御着之時一度可振舞者也、

寛文二年寅正月十七日

(鎌田政有) 源左衛門印
(町田久則) 勘解由印
(新納久詮) 右衛門印
(伊勢貞昭) 兵部印
(鎌田政直) 藏人印
(島津久通) 圖書印

〇二三六 島津久通外六名連署達書写

覚

一 去秋之地震ニ付、田島并古溝致破損、大粧成普請候故、為惣奉行川上將監差越候間、萬事随下知可相勤候、若此節賦付之人数ニ而不足候ハ、惣奉行差図次第、夫丸諸所より可出事、

一 地震之諸所者、衆中・寺社家門前・岡町・中宿迄、不殘罷出候様ニ堅可申付事、

一 諸所より相立候百姓殿役仕召列、普請見廻候衆へ人数差出、首尾可仕候、普請ニ立候人数未明より罷出、晩者夜入迄可相勤候、尤殿役遣、右普請相濟迄者普請場へ可相詰事、

一 普請場間数并夫丸可入所、以見合其外城人数へ可割付候、若堀溝難成所於有之者、早速可申越候、郡奉行差越可被致相談候、付今度普請人数賦付之儀ハ、鹿兒嶋殿役座より可被申渡候条、可被得其意事、

一 破損之諸所、毎年所役ニ仕候普請者、此節加勢夫申請間敷候、地震ニ付破損之普請迄を加勢夫ニ而可相調事、

右條々、堅可被相守者也、

寛文三年卯正月廿一日

(鎌田政有)
源左衛門印

(町田久則)
勘解由印

(新納久詮)
右衛門印

(島津久茂)
中務印

(鎌田政直)
藏人印

(島津久頼)
筑前印

(島津久通)
圖書印

〇二三七 藩御物座達書写

覚

一 當年度々之大風・洪水ニ付而、檢使差越、物成相應ニ雖相定之候、田島不熟之故、諸百姓及困窮之由、其間得候、依之例年申付處之役米并六合米差免之付、来夏麦石無納ニ申付候間、来春耕作方少茂無油断様ニ堅可申付候事、

一 公儀方付、諸士不如意之時分、如此心付有之候事、さ

きく百姓相續候様ニとの儀ニ候、寔以不殘御患難有奉存、或衣類之用意、或正月之儀式、或講祭礼、其外寄合かましき一切相止之、米穀之費無之様ニかたく可申付候事、

一 如斯相守儉約之上、及餓死者これあらは、於其所相糺、早速田地奉行所へ可申出之、尤右之制戒相背、及餓やからハ及沙汰ましき事、

右條々、慥ニ承達、所中士・百姓へ具ニ可申聞、若緩之儀於有之者、噉・横目・郡見廻・庄屋迄、稠敷可及沙汰者也、

寛文九年酉十二月三日

御物座印

(表紙)

北郷文書附録

原題御文書令臨附録

三止

(中表紙)

「御文書令臨附録 三止」

〇二三八 評定所達書写

覚

一 欠落者搦捕、鹿兒嶋へ所次ニ差上候刻、搦捕候在所ハ宰領繩取并搦者之飯米、或主人親兄弟、或宿主五人組

之者より後日ニ可出之事、

一 継渡之外城より鹿兒嶋迄者、右擲者之飯米右同斷、率領繩取之者ハ所役ニ可申付之事、

一 廻文不相届候共、あやしき者見逢候者致會議、不審於有之者擲捕、所次ニ鹿兒嶋町奉行所へ可送届之、若致見逃儀脇よりあらはるゝにおゐてハ、噯・横目にいたり稠可及沙汰事、

右條々、堅固相守候様ニ可被申付置者也、

寛文十一年正月廿五日

評定所印

〇二三九 島津久元外二名連署達書写

覚

一 御奉公ニ付改番所罷通人、此中者無手形雖差通候、向後評定所手形ニ而可指通之条可致其心得、為見合判形遣置之候、勿論私用ニ付罷通人ハ、如此中可為町奉行手形事、

一大身之衆其外手鑓を為持候人者、無手形ニ可通之事、

一家中者之儀ハ、縦手鑓雖為持候、町奉行手形ニ而可通

之、若手形不持来候者、曾而通間敷事、

右之旨、堅固ニ相守候様、番之者へ慥ニ可申渡者也、

寛文十一年亥六月廿四日

(肝付久憲)
彈正印

(町田忠代)
勘解由印

(島津久元)
帶刀 印

都之城

役人中

〇二四〇 島津忠広・町田忠代連署達書写

覚

廻國之順礼行脚躰之者、今程御領内江入来候儀、令停止之候間、其元番所江入来候者、早速御領内可追拂旨、堅固ニ可被申渡候、若緩之儀於有之者、稠可及沙汰之条可被得其意者也、

寛文十二年子三月廿一日

(町田忠代)
勘解由印

(島津忠広)
市正印

都之城

役人中

一 隠田并田島荒候事、

一 殿役遺依鼻貞新疎有之事、付山川浦濱之役銀申付様親疎有之事、

一 毎年被仰付候諸植木、大方ニ仕候所之事、

一 井手溝其外道橋之普請、無沙汰ニ有之所之事、

一 御法度之物他國江出候者、并他國へ致物詣者之事、

一 他國人江致縁與儀付、他國人与懇切仕、密々銀子之取替仕者之事、

一 諸士并百姓已下、不依男女、相應之職事不仕、或身まハリヲかさり、或結構成衣裳ヲ着し、不似合所作仕者之事、

一 地頭より非分之儀申付、所之者痛ニ罷成事、付地頭之仕置善惡之事、

一 御道具之者・御中間・御小者・百姓・町人等之子ヲ士之養子ニ仕候事、

一 重科ニ相究候者、所之役人共鼻貞ニ而披露延引之事、付道理ヲ持なから罪ニ沈候者之事、

一 私之遺恨ニ而人ヲ可禿と企候者之事、

〇二四一 島津久竹外四名連署条書并添書写
(四一〇一)

外城横目可致覚悟條々

一 鬼利支且宗并一向宗心之及見立聞立へき事、

一 御兄弟衆・御一門衆・家老衆之子共たりといふとも、

於外城御法度ヲ相背、無作法之儀於有之ハ可見立、尤

所中ニ而も御法渡之旨ヲ相背、連々氣任有之、企惡事、

所々妨ニ罷成者之事、

一 諸役人私欲ヲ専とし、御奉公疎意仕人ノ事、

一 御蔵入取納方并代成定様親疎有之事、付仕上米手迫惡

事、

一 新開被仰付、御為宜見及候所ノ事、

一 新明ニ付開添仕、依怙いたす者、付切明屋敷ニ而掠公

儀、私欲ヲ専仕者ノ事、

一轉突^(傳)うつ事、付火付其外あやしきもの致徘徊事、

一欠落者改様大方ニ仕候所之事、

一御奉公ニ付鹿兒嶋より差越候衆、不作法ニ有之、差而

無用所ニ緩々罷在候事、

一所之役人、公儀之外百姓之出錢・出米申付事、付私ニ

人夫ヲ召仕候事、

一駄賃并舟賃御定之外増銀取候者之事、

一不依士・百姓、徒黨ヲ組、申分仕候事、

一蒙御勘氣候衆へ致入魂者之事、

右之條々、常々心掛可致見聞、此外可入心得儀者、実

不実共ニ見立聞立、早速大横目所へ可致言上者也、

寛文十三年丑七月廿四日

(二四一の二)

右御條書、此節改被仰渡之間、堅固ニ相守可致覚悟之、

尤役替之砌者、御條書髓ニ可次渡之、或破損、或文字

不相見得刻者、早速可申出候、聊緩疎有間敷者也、

寛文十三年丑八月朔日

川上将監印

嶋津又十郎印

都之城

横目中

○二四二 島津久竹外四名連署達書写

覚写

肝付^(久慈)彈正

新納^(久丁)又左衛門

嶋津^(久馬)新八郎

嶋津^(忠広)市正

嶋津^(久竹)出雲

一梶山表之儀、題目之境目故、自前之番手之人被差置候、

此節津曲清兵衛被仰付、被差越候間、可被得其意候事、

一右之通梶山へ清兵衛雖被遣置候、都之城領内之儀ニ候

間、境目并仕置之儀、如此中都之城より入念申付候様

ニ可被申渡候、清兵衛被遣置候付、仕置之儀都之城役

人於致遠慮者可為曲事、尤清兵衛へ引合、首尾能相調

候様ニ可被申付之、此等之旨清兵衛江茂申聞置候事、

一 梶山住宅之者共へ茂、清兵衛より致差函候儀、不致違背、堅固ニ可相勤由可被申聞置之事、

一 山中境目為見分、梶山之者共相廻候儀、時々清兵衛可致差圖候之間、可隨其意旨可被申渡置之事、

一切寄番所之儀、第一可入念ニ儀候間、少茂不背様ニ可被申付之、邊土之儀候へハ、御國中より之走者他方へ

可忍通之間、常々無油断心懸可相改、番所より外ニ致住宅候者共、就中無油断可心懸、惣而不見馴人入來候

ハ、稱致穿鑿、うろんの者ニおめてハ留置、清兵衛へ可得差函、就中人居迦之所、又ハ不堅固之地常之題

目ニ可入念勿論、他方より入來候うろたへ者可入念事、一切寄之外ニ致住宅候者共、自前之他所^(地方)ニ相替御心を被

付、勝手能様ニ被仰付置候間、其旨を不致忘却、山中之御奉公方少茂無油断相勤可申、清兵衛存寄之儀申付

候ハ、無違背可相勤之、若氣任之人於有之者、早速可逐披露由、清兵衛へ申付置之間可承置候事、

一 寺柱番所之儀、折節清兵衛見廻候様ニ申付之、都之城

書役人清兵衛存寄之儀申談候ハ、無油断致相談、急ニ可相濟、於緩者可及沙汰事、

一 清兵衛方へ輕キ品ニ而も進物等受用之儀、令停止之間、所中之者共可得其意由可被申渡事、

一 清兵衛より鹿兒嶋へ差上候状并用物等、往来共ニ都之城より可相届之、付御用之儀ニ付清兵衛近所へ可差越

砌、送迎人馬等之儀、同前ニ可申付候事、右条々、堅固ニ可相守之、若於違背者可及沙汰旨、都

之城役人并梶山暖中へ可被申付之、尤所中之者へハ、梶山暖中より申聞候様ニ可被申渡之、以上、

延宝五年己七月十六日

^(島津久了)
又左衛門印

^(島津久元)
帶刀

^(島津忠広)
市正印

^(島津久輝)
中務印

^(島津久竹)
出雲印

〇二四三 某袖判条書写

判

- 一奉公方ニ付諸士脇を兼候、就夫家老衆心持可入事、
- 一地頭衆より衆中つかひ様之事、
- 一諸百姓夫丸仕様之事、

卯正月廿一日

〇二四四 評定所達書写

覚

去々年風損以後、御分國中百姓別而及困窮候、依之八木・雜穀他領江出儀令禁制候、縦魚・塩調用として八木・雜穀持通といふとも、番所にて慥ニ相改、曾而差通間敷候、魚・塩之儀者、御分國中にて可相達旨申渡置候間、寺柱・梶山番衆へも此旨堅相守候様ニ可申付之、若於緩者急度、可及沙汰者也、

辰五月十四日

評定所印

都之城 役人中

〇二四五 藩達書写

『押札朱書
六月五日』

他領より魚・塩商賣ニ参候ハ、銀錢ニ而者商賣可然候、雖然御領内志布志表・福山表より魚・塩商賣ニ持上り候ハ、御領内之者を差置、他領之者と致商賣儀者如何ニ候間、其心得を以可被申付候旨、御差図ニ而候、

取次 喜入次兵衛

〇二四六 藩達書写

覚

一今度 〔綱貫カ〕 太守様被遊 御家督、御入部之御事候間、諸事御仕置之儀をも被 仰出候者、其節可申渡儀ニ候得共、先以所中無作法ニ無之様ニ相慎可申候事、

一從他國御祝儀之御使者可被差越候間、百姓・町人以下、御使者ニ行合候者致下馬、傍ニつくはひ可罷通候、士たりといふとも無礼不致様ニ、成程懇懃ニ可仕候事、
一毎度雖被仰渡候、百姓・町人以下、士ニ行合候而も不

致下馬、無作法之者も有之由、不可然儀候間、向後自

他国之人によらず、惣而士と見及候へ、致下馬、不障

様ニ可罷通事、

右之段、各地頭所江慥ニ可被申渡之、無礼之者於有之

者可及沙汰候、以上、

八月朔日

御老中御下知ニ而候、以上、

二月朔日

取次

鎌田太郎右衛門

○二四七 藩達書写

従他國入来出家行脚・醫者、縦國證文持来候共、衆中相付鹿兒嶋へ差越可得下知旨、去年御條書を以境目番所江被仰渡候、雖然從此節相替、右躰之人ニ不限、惣而他國人入来之節、國證文并宗躰證文慥ニ於有之者、當國內場何方江參候哉与尋届、通筋より参先々役人迄從番衆證文相添候様ニ与被仰渡候之条無用事、諸所へハ一日茂召置間敷候、且又参先之所用談相濟候へ、其所之役人より通筋諸所役人并出口番衆迄證文相付、中途無滯有之間敷候、無用事旅人召置候へ、宿主ハ不及申、五人与迄其咎可被仰付候、右之趣各地頭所囑中へ堅固可被申渡旨、

○二四八 某書状写

一 学文朝のきやうに可有候事、

一 悪馬には無用の事、

一 酒の事、

一 一人のいやかることせましく候事、

一 遊徊者無用ノ事、

右之条々送候程に、見物かんしんの事にて候、やかて

これよりこま／＼と書のほせ候、

○二四九 島津久慶外五名連署書状写

以上

急度申候、

一 御蔵入諸給人持ニ至迄、當納霜月限ニ可致皆濟候由、

堅可被申付事、

一 諸士六舛出物并作人者五合出物も、可為右月限事、

一春定ニ約束候共、當毛之出来候上ニテ、憲法ニ納方可相濟候、諸士給人高一石ニ付三斗二升代、檢地之上ニ而定候而物仕候処ニ、出来たる八木を作人算用之外ニ取籠候儀、道理不叶候、付津下先年如定吳儀有間敷事、

右條々、堅固ニ噯衆前より百姓入作人ニ可被申付候、若緩之儀候而、御藏入并給人より右之旨相違之通於申出者、鹿兒嶋へ噯衆召寄可及沙汰候、恐々謹言、

八月廿一日

(鎌田正統)
鎌治部少輔

(三原重廣)
三左衛門佐印

(山田有榮)
山民部少輔印

(川上久國)
川因幡守

(島津久遠)
圖書頭

(島津久慶)
彈正大弼

都之城

〇二五〇 某達書写

覺

今度其許後室不慮ニ被成死去、笑止之至被 思召候、然者北郷家跡職之儀、嶋津市右衛門殿へ被 仰付置候上者、別条無之候得共、弥以役人其外家中之面々諸事入念、仕置等緩疎無之様ニ堅固ニ可相守旨被 仰出候、依之此節以相良主税申渡候条、委細可被得其意候、以上、

寅八月三日

〇二五一 五代少左衛門達書写

覺

琉綏他國江出候儀、前々より御禁止候處ニ、頃日後ニ有之由、其聞得候間、往還之諸荷物能々相改、曾而他國へ不出様ニ各可被念入旨、御関所へ堅固ニ可被申渡置候、左候而此中申渡置候他國へ曾而不出諸物書付之内ニ無之候條、同前ニ可被添置候、聊緩せ有間敷候、以上、

御物座印

午八月廿五日

五代少左衛門

都之城
役人

〇二五二 某覚写

覚

從他國咎人追來、於御領内搦捕之候刻、其所物主差而肝煎為申儀茂無之処ニ、彼方より御礼物有之候共、受用仕間敷候、尤他國之走者、御領内於境目番之者共より搦捕差越候刻、御礼物於有之者、如此中受用仕、早速此方へ其首尾可申上候、此等之旨、都之城役人并寺柱番之者へ可被申渡者也、

己五月三日

〇二五三 幕府評定所達書写

覚

一御兄弟衆・御一門衆・御縁者衆へ諸士被參合候刻、又内下々之者不及申、雖為歴々疎意成躰にて不罷通様ニかたく可被申渡事、

一此内之又内・百姓・町人・浦濱之獵師かたけ賣仕候者等、歴々へ參合候而、或疎意成躰にて罷通、或馬を追懸、下馬をもいたさるよし候、向後者小者を列候程之人へ參合候刻者、致下馬、脇へふみよけ可罷通候、鏈を持せ候人ニ參合候時者、傍へ引よけつはひ候様ニ可被申觸事、

一町人長刀指候儀、弥以可為停止候、脇指ハ壹尺八寸より上之刀町人指候儀、堅可為停止候、若相背者於有之者、横目を被仰付候間、見立聞立稱其扱可被申付候条、其段かたく可被申觸候事、

一横目衆不見合所にて、右之御法度相背もの於有之者、其者之名・在所を慥ニ被問届、則横目衆可被申断候事、一又小者・百姓・町人・浦濱之獵師其外下々之もの歴々へ參合、於不致下馬者馬より引おろし、口能申候者鞍輪ニくゝり付、其上難見通隙成躰於有之者、横目衆被切捨候様ニ与被仰付候条、可有其心得由、堅可被申觸候事、

右之條々、堅固ニ可被申渡者也、

正保四年三月廿三日

評定所判

於御評定場、諸大名衆之留守居衆へ、井上筑後守殿・

宮木越前守殿被仰渡候御條書之写、

(本文書ハ「旧記雜録追録一」一三三号文書トホボ同文ナリ)

〇二五四 幕府達書写

覚

一城之繪圖之事、

一本・二・三丸間敷之事、

一堀之ふかさ・ひろさの事、

一天守之事、

一惣曲輪、堀ひろさ・ふかさの事、

一城より地形高処有之者、高所と城とのあひた間敷書

付候事、但惣構より外ニ高所有之共書付候事、

一侍町小路わり并間敷之事、

一町屋右同断、

一山城・平城書様之事、

一郷村知行高、別紙ニ帳ニ作り、二通上ケ候事、

一繪圖帳共ニ郡わけの事、

一繪圖帳共ニ郡切ニ郷村之高上ケ可申事、

一帳之末沓國之高上ケ可申事、

一繪圖帳共ニ郡之名并郷之名、惣而難字ニハ朱にて假名を付候事、

一繪圖帳共ニ村ニ付候はへ山并芝山有之所ハ書付之事、

一郷村不落様ニ念を入、繪圖并帳書付之事、

一水損・干損、郷村帳ニ書付之事、

一國之繪圖ニ枚いたし候事、

一道法六寸沓里ニいたし、繪圖ニ沓り山を書付、沓り山

無之所者卅六町に間を相定、繪圖ニ沓り山書付候事、

一本道ハふとく、脇道ハほそく、朱ニ而致すへき事、

一本道冬牛馬往還不成所、繪圖ニ書付候事、

一川之名、繪圖ニ書付之事、

一名有山坂、繪圖ニ書付之事、

一沓里山と郷との間道法、繪圖ニ書付候事、

一船渡・歩渡、わたりのひろさ繪圖ニ書付候事、

一山中難所道法、繪圖ニ書付候事、

一國境道法卷里山、他國之卷り山へ何程と書付候事、

一繪圖ニ山木の書様色之事、

一海川水色書様之事、

一郷村其外繪取ニこふん入申間敷候事、

一此以前上り候國之繪圖相違之所候間、念を入、初め上

り候繪圖、國中引合、惡敷所なをし、今度之繪圖致す

へき事、

以上、

右御條書、酉ノ四月五日(正保二年)ニ菌田清左衛門殿・田尻八兵

衛殿御持せにて候、

〇二五五 某達書写

覚写

「学文・弓馬之道專可相嗜候旨、従前々被仰渡置候、勿論

其身之嗜ニ候へへ、無油断可相勸儀候之處ニ、武藝之稽

古修行等令懈怠、第一学文之志大形候故、道を守候心入

無之、諸士之風俗不宜儀ニ被 思召候間、学文可心懸儀

肝要候条、講談等致興行、常式之參會ニも相互ニ其穿鑿

仕、自今以後風俗を引易、志正道ニ可仕候、就中御一門

且又御家老、其外面立候人者、弥以可心懸儀候之条、

御城退出以後、於私宅催講談、邪儀無之様ニ相勸可然候、

此旨諸士下々至迄、承知可仕之由被 仰出候、以上、

正月廿五日

右御覚書之趣謹而奉承達、家中諸士へ具可申渡之、諸口・

諸外城へハ地頭直ニ致持參、堅固可申渡、聊緩疎有間敷

者也、

戊三月二日

〇二五六 伊地知助右衛門・田中五右衛門連

署達書写

覺

「寛文九年己酉春從

太守様御氏族并他家系圖可被遊 御覽之由、大田小平次・

河野六兵衛ニ被 仰付、兩人致相談、御氏族者不殘、他

家者古来より一所を領シ、又者代々御家老職被 仰付候

家廿四氏撰出、其家々ニ申渡、系圖并文書等を以相考、被差出候上ニ而、致詮議、肝要候事計を成程文字を省キ相記候而、略系圖ニいたし備 御覽候、其撰述者俄之事ニ候得ハ、考之當否有之、又者其家々よりも文書・旧記等不見出、公私之考少々者違も有之儀候故、六兵衛存命之内ニ文書・旧記并古系圖を見合可相載、證據又者考違候儀共見出次第備 御覽候、系圖之留ニ致押札置候而、得能造酒之允を以右之段申上、此系図相改可差上候由達貴聞候、六兵衛致死去、我々共見出申候儀共多候故、弥以相改可差上覚悟ニ候処ニ、此度右系図御下ケ被遊、私共兩人ニ右之諸家系圖遂吟味、相改可差上之由御意候条、致再撰答ニ候、就夫其家嫡被勉候面々申申達、庶流之方江被相達、於其家々被遂詮議、其嫡家より被差出候ハ、遂吟味、至後代無相違様ニ可有之候、来春 御發駕前ニ清書不相濟候而不叶儀ニ候条、相究申候、日限ニ右諸家之指出可有之候、各為御心得可被為書出条々、左ニ相記候、

系圖ニ可記傳之覚

一元祖之家號を定候由緒證書可有之者不及吳儀ニ、家傳計ニ而も賜何國何所號何与、又父祖并外祖等之讓を得在名等を為家號、其外何そ由緒有之家號を定候家者遂吟味、理筋次第可相記事、

一從元祖至當代、男女之兄弟次第不乱、尤耆人も不殘假名・実名、母何某^実名女与、女子者何某ニ嫁与可相記事、一先年之系図ニ其家々之元祖相違有之、今更考出儀共候ハ、先年之系図与此度被差出候を、両通共ニ考之證據相添可被差出候事、

一養子ニ罷成候ハ、何某養子与養父之実名迄、又養子ニ入来候者、実父之儀右同断ニ可相記事、

一禁裏・院中・將軍家より拜領物、或御感之御綸旨・御教書等者、其正文、或写ニても相添、拜領物ハ、其品々書付候而可被差出候事、

一所領拜領、古来者於一所一郷一村被宛行、其地を為居所、子孫迄も令居住来候衆多々有之候、證據於有之者相考、其上ニ遂吟味可相記候、雖然古来一所之例トハ可為各別候、若其家々ニ右之證據不相知、官庫之旧記

ニ為相知證據於有之者可相記事、

一 地頭職之儀者、御一族并他家之歴々之家無餘儀御奉公仕候衆、雖為平人忠節武功之人、又者無比類戰死共仕候子孫、共ニ為被仰付儀候、寛永十五年以前之地頭職之儀者、證據次第ニ可相記候、其家ニ無證據、官庫之旧記ニ於有之者可相記事、

一 技群之武功忠勲^(勲)之輩、或武藝等為勝譽有之候者、先年之系圖ニ茂被相記候條、前ニ記後候儀も候ハ、證據次第ニ候事、

一 先祖江官位叙任被仰付候證書、又家傳之段可被相記事、
一 戦死并殉死之事、不改落候様ニ別而入念候條、成程尋究證據雖無之、慥ニ見得申候ハ、何年何月何日於何所戦死と可相記、但戦死与雖有之、或御敵對又者於地方又内戦死之儀者各別之條、其委細可書分、年月日・何所不相知候共、戦死於無別儀者可記候、官庫之旧記ニ可相考之事、

一 嫡家之儀者代々病死之年月日迄、并誕生年月日相知候

ハ、可相記事、

一 御家ニ御敵与成、後ニ降参之家、本領半地・三部一・

五部一被下置、又後ニ茂依子細本地被召上候儀共委細ニ可相記候、御敵与成候家者、一時片刻と云共其分不相知候而不叶儀候條、有躰者不殘可被書出候、官庫之旧記考候上ニ而、其子孫ニ致詮議、其上ニ而可相記事、
一 先祖又者當代ニも他國ニ致出奔罷在、或其後ニ致帰参事可相記候、若致隱密候ハ、御咎目可有之候事、

一 雖為嫡子不肖ニ有之、或ハ背君父之命家督不被仰付、就病氣ニ家督難勤茂有之候條、其段可相記候、他腹之長男ハ其段可相記候事、又二男ニ而も不義之子細有之候ハ、家之位ヲ下ケ、三男・四男・五男ニ而茂二男ニ准候儀古例ニ候、右通之類ハ得与遂詮議可相究候事、
一 嫡子として他之家、又者一家中之養子、又者他號を冒後ニ雖復本姓、可准次男事、
一 其家々之世ニ記後、又者後ニ先祖之世名考出も可有之候條、此段も證據無之候共、考出候分可相記候、尤證據於有之者可被差出事、

一 先年被差出候系図ニ、其家之氏族落候家多々候、縦庶

流之子孫共いか様ニ凡下ニ雖罷成候、隨成證據於有之者、其嫡家之吟味次第可相究候条、其段可被書出之事、一先祖又者當代ニ御昵近ニ被召出、或者武功又為勝藝能故ニ被召出候ハ、其段可相記候、又御昵近より家中ニ御附人と成、尤家臣与被召成、至于今昵近同前ニ罷居候哉、又者身軀致衰微、或者依罪科無為方家僕与成候儀可相記事、

一依背 君父之命被誅伐候事、委可相記事、

一其家々ニ而庶流ニ相分候元祖不相知候家、多々有之儀

歴然候条、不知候ハ、其家ニ而相知候者を始与なし、

従是上世不知所自出与致片書、相知候ハ假名・実名・

法名計ニ而茂可相知事、

一代々之人、幼名を始假名・実名并入道名迄不殘可相記事、

事、

右條々、各為御心得如此候、寛文九年より當年迄廿

六年ニ及候条、子孫不相載、又者考出候儀も可有之

候条、成程不改落候様ニ可有之候、此度之再撰ニ改

落、又者考違於有之者、別而殘念至極候、其上此系

図近年中ニ又々御改可被仰付候儀不相知候条、互ニ遂御相談、至子孫無究不及吳儀候様ニ可致候、各其覚悟可被成候、各家々ニ付相定候日限之通ニ可被差出候、若及遲滞候ハ障ニ罷成候条、載後之儀者可及口能候、以上、

御記録所

戊八月十一日

田中五右衛門

伊地知助右衛門

○二五七 某届書写

今度筑前國大嶋ニ而捕候南蠻伴天連・同入満・同宿白

状之事

一いたりやの国らうまと云所ニ、きりしたん宗門之頭ば

つばと云もの有、國々へ伴天連遣し、宗門をひろめ、

其國ばつはにしたかひ候へハ、漸々奉行を遣し仕置い

たし候、のひすはん・ごわ・呂宗、其外國多むさふり

取申候、日本ハ軍ニ而ハ猶々成かたく候故、後生之為

ニ宗門をひろむるとて、伴天連を渡す、宗門大形ひろまりたる時分ニ、中間にて軍いたし、日本の他宗を打たいらけ、ばつばにしかかへむとのたくミニ而候事、

一きりしたん宗門ニこんはにやと申派・さふらんしすこと申派の伴天連、年来日本へ多渡し申、彼伴天連とも門派々へ申遣し、ばつば前にて日本國をうはひ候て大事を仕候處ニ、ばつば批判にハ日本六拾六ヶ國を二ツニ分、相坂より東者さふらんしすこ、坂より西ハこんはにや法をひろめ可申候、日本ばつば共にしたかひ候ハ、右之通違乱有間敷候由申渡し候与、吳國にて専此沙汰仕候事、

一伴天連を日本へ渡し申事、数年此入目門派々ニ帳を付置、數百年過ても日本ばつばにしたかひ申候時、右之入目面々の派のだんなより取為可申之儀ニ候、世界の有内ハ伴天連を渡し、宗門をひろめ、日本を取可申覚悟ニ而候事、

一呂宗へ日本人之伴天連四人御座候、一人ハ豊前國加賀山隼人親類にて候、隼人も先年火罪にあひ申候、此親

類之はてれんを日本へ渡し可申との儀ニ御座候、一人ハ黒川寿庵と申候、来年日本へ渡し可申由、呂宗にて我等ニ物語仕候、なんはん伴天連れいものと申ものも来年渡り可申由、是も我等ともに咄申候、其外日本人の子五六人ろそんへ只今学文をいたさせ申候、天川ニ而も日本人の子を十二人学文させ、いつれも伴天連ニ取立、日本へ渡し為可申のよし承候、伴天連多、方々の國に仕立置申候、此ものとも連々日本へ渡し可申由、専沙汰仕候事、

一先年日本にてきりしたん宗門ひろまり申時分ニ、日本の出家ニ金銀を出し、きりしたんの宗門ニいたし、其外日本之入満・同宿を諸寺諸山ニ遣し、学文をいたさせ、佛法・神道之極意をならひ取、ばつば方へ遣し、南蠻口に引なをし、はんにおこし、國々の伴天連ともニ遣し、学文をいたさせ申候、いつれの道にも日本へ法をひろめ、したかへんとのたくミの儀ニ候事、
未ノ

九月八日

〇二五八 田中五右衛門外二名連署寛写

寛写

平佐

末弘八之丞

右、北郷家之庶流ニ而、代々久之字名乗来候由、此節申出候ニ付、證據等有之候哉被相糺、於有之者可被為差出旨先頃申渡候處、其證據證文無之由、然者末弘氏之儀者、以前より御定被召置候御支流系譜北郷氏系図之内ニ、元祖尾張守資忠之六男十郎忠直傳記ニ、為末弘氏之猶子ニ与有之候、然者末弘氏ハ元来他家ニ而、北郷家より別レ出候庶流之家ニ而ハ無之候、元より他家ニ而候得者、證據無之筈候、此内八之丞北郷家之庶流与存候儀ハ傳誤にて候間、自今以後者右之通相心得候様ニ、八之丞へ得与可被為申聞候、左候而其首尾書付を以、當座へ可被為申出候、以上、

巳

六月廿五日

御記録所

川上平右衛門印

肥後二右衛門印

田中五右衛門印

北郷作左衛門殿

〇二五九 有馬五右衛門届書写

北郷作左衛門様より筑後様へ被仰入申候者、當家庶流改之儀、先年御記録所より被仰渡候ニ付、末弘八之丞庶流ニ而御座候通、御記録所へ書出仕置候、尤其砌此御方江茂右之首尾申入置候、然所ニ此節御族氏御改ニ付、家傳證據等有之候ハ、可申出旨被仰渡候得共、左様成儀無御座候故、其趣申出候処ニ、末弘氏之儀者他家ニ而候、當家之庶流与存候儀者傳誤ニ而候間、八之丞方江茂可申渡由、御記録所より委細書付を以被仰渡候付、申渡筈御座候、先年此方庶流ニ而御座候段申入置候段、筋違ニ罷成儀ニ御座候故、御記録所より之書付之写、掛御目候間、被置御覽届可被下候、尤役人を以可申入候得共、病氣ニ而罷出候故、内藤仲左衛門を以申上候由にて、右之写仲左衛門殿持参ニ而御座候ニ付差上申候間、宜可被仰上候、仲左衛門殿儀上下着用ニ而御番所迄被罷出、私江用事之由承候付、出合申候得ハ、右之筋ニ御座候、以上、

六月廿九日

有馬五右衛門判

重信休左衛門様

相馬藤左衛門様

北郷清兵衛様

川上官左衛門様

○二六〇 島津久龍書状写

一筆致啓達候、殘暑之砌ニ御座候得共、弥御堅固被成御座候由、珍重存申候、然者御家来末弘八之丞儀、當家庶流ニ而御座候通、御記録所へ被仰出置候処、此節末弘家之儀ハ他家候由、御記録所より書付を以御承被成候由ニ而、右覚書写、御使を以其御地屋敷迄被仰聞候趣致承達候、此程被仰出置候筋ニ相違ニ付、右通被仰聞候趣致承達候、御念儀ニ御座候、早速此方記録へも記可為置候、右之段旁為可申入、如此御座候、恐惶謹言、

六月晦日

嶋津筑後

久龍判

北郷作左衛門様

人々御中

○二六一 平田盛右衛門伺書写

北郷殿御繼圖、下野守殿御存生之時出申候、其写と今度出申候書物と相違多く有之事ニ候、いつれよく候哉、重而承究候而、書立可申候、

一越中國安部郷、將軍家尊氏卿ヨリ御拜領、

御系圖写ニハ建武四年八月廿二日ト有之、今度之御

書物ニハ延元二年丁丑八月廿二日ト有之、

一任尾張守、

御繼圖写ニハ建武四年卯月廿日ト有之、今度之御書

物ニハ文和二年癸巳二月九日於都ト有之、

一日向國北郷御拜領、

御繼圖写ニハ文和元年十二月十二日ト有之、今度之

御書物ニハ文和四年乙未十二月十二日ト有之、

^{四代}一讚岐守持久法名無極、

御繼圖之写ニハ無之候、写落欵、不審、若書落ニテ

候ハ、御兄弟已下細ニ被遊付候而可給候、

一讚岐守敏久与尾張守數久之間ニ、御系圖写ニハ讚岐守

義久有之、書写之誤乎、不審、

一秀長御状写式ツ今度参候、誰人ニテ候哉、并何之年間

たるへく候哉、難定候大和納言秀長タルヘキ欲、然則天正十五年丁亥タルヘシ、

一大閣御朱印之内

十一月六日唐船目錄之書、年号之事、

正月十四日年頭祝儀太刀之書、年号之事、

十一月八日鷹一連之書、年号之事、

右條々難定候、相違之所者、是非を御書付候而可給候、

未知儀ハ若知たる人もや候ハん間、御尋究候而可被仰聞

候、已上、

慶安三年四月三日

平田盛右衛門

北郷殿

御役人中

○二六二 北郷次右衛門・土持權之助連署答

書写

鹿兒嶋より被仰候ニ付、其返答事引得

一越中國安部郷賜之儀、此方繼圖写ニハ建武四年八月廿

二日与有之、又頃進上之書物ニハ延元二年八月廿二日

ト有之、御不審之由候、

右、建武年号ハ二年ニ而相終、延元ニ罷成候、然時

者建武四年与候ハ延元二年ニ相當候歟、

一資忠任尾張守、此方繼圖写ニハ建武四年卯月卅日与有

之、此度之書物ニハ文和二年二月九日与有之由候、

右、延元二年卯月卅日ニハ資忠任左衛門尉与有之、

文和二年二月九日ニハ任尾張守、此方繼圖ニハ如此

有之、

一北郷名賜之儀、此方繼圖写ニハ文和元年十二月十二日

与有之、又頃進上候書物ニハ文和四年十二月十二日与

有之由候、

右様子爰元見合申候、然者先年當家之繼圖御用之由

候、清書仕進上申候、其砌筆者書誤たる哉ニテ、文

和四年能御座候、

一當家四代目讚岐守持久法名無極、此方繼圖写ニ無之由候、

右、爰元之繼圖ニハ其座ニ髓載て御座候、其次第書

付進上申候、

●資忠 七良右衛門 法名月窓

●義久 讚岐守 法名無塵

●知久 中務少輔 法名天巖

●持久 讚岐守 法名無極

持久ノ弟
●信久 左京亮 法名義叟

●敏久 讚岐守 法名歡翁

●敷久 尾張守 法名哲翁

一此方繼圖写ニ讚岐守敏久与尾張守敷久之間ニ讚岐守義久有之、御尋之由候、

是ハ右ニ次第細々書付申候間、可有御納得候、

一秀長之御状写ニツ前ニ進上候、誰人ニ而候哉、又何之

年間ニ而候哉、御尋之由候、

右秀長誰人共相知不申候、乍去大和大納言殿たる

へく候哉、又時分之夏ハ大方天正十五年亥ノ年たるへく候哉と申候、

一前進上候 大閤公御朱印之内、

十一月六日唐船之夏、

正月十四日年頭祝儀之事、

十一月八日鷹之事、

右年号御尋之由候、彼御朱印にも無之、又為存人も無御座知不申候、

慶安三庚

土持權之助判

卯月廿一日

北郷次右衛門判

平田盛右衛門殿

〇二六三 藩達書写

覚

一都之城後見之儀、前ニ鳴津新八殿江被 仰渡、差引被

成事ニ候、然處去年於江戸御断被為申上、達

上聞、弥以可被為勤旨承被成候、并仁禮覚左衛門殿儀

為御相談被 仰付之由上意之趣、舊冬御老中より被仰

渡候、就夫諸事別而被入御念儀ニ候条、家中面々奉公
方之儀、專一ニ可心懸事、

一都之城飯肥境目通路之儀ニ候、前々より他國江不出御
法度之品々在之候、就中此比之往還之者并うろんなる
人、其外被入御念事ニ候条、緩無之様ニ毎度可被申渡
事、

一此節より半ヶ年宛當地へ致居住候儀為仕置、且又當時
借銀多出來候ニ付、役人を始何れ茂家を題目ニ相守、
致相談、役高并切米を減、借銀之足ニ茂可成候間可差
上由申出候事神妙之至、令祝着、雖然家中之者共却而
者疲ニ可成候間、可減儀如何ニ候、依之諸役人取拂、
不顧私大形ニ無之様ニ萬端可入念事、

一當地諸士風俗惡敷、無作法ニ在之由致風聞儀、言語道
断ニ候、自今以後、不依公私懸慙之為躰題目ニ候、尤
文道・武藝義理を專ニ、軍役等之心懸可為專要事、
一役所より諸奉公方被申付候刻、為差立儀無之處ニ難決
申出間敷候、乍然無據儀者可申出、依筋相應ニ可相達
事、

右之条々具ニ致承達、慥ニ可被申渡候、若相背者於在
之者、無用捨可露頭者也、

午三月十四日

○二六四 島津筑後口上覚写

口上覚

私事、未年若御座候得共、殊之外肥滿仕、其上勢大キ有
之、馬上乘下り別而難儀仕候間、乘輿御免被遊被下度候、
此節者一節之儀御座候得共、先々被召列儀茂可有御座候、
至其節願申上候而茂急ニ御免之程難計御座候ニ付、何と
そ此節御免被仰付置被下度候、此旨宜御申頼存候、以上、
十一月十七日 嶋津筑後

右御口上書、市來次郎左衛門殿御取次ニて、嶋津將監様
被聞召置、此節ハ江戸滞在無餘日故、御申分御無用ニ罷
成、御國元乘輿ハ御免之方ニ被仰渡候、江戸ニ而御免之
儀ハ、後年御上洛之時分御願被仰上筈候由、渋谷次郎左
衛門殿より承候事、

○二六五 市来次郎左衛門申渡書写

御國中乘輿御免之御願達 貴聞、願之通御免之旨被仰候間、承知可被成由、將監殿御差圖ニ候、以上、

追而申上候、明日御礼可有御座と奉存候、以上、

十一月廿九日

市来次郎左衛門

嶋津筑後殿

○二六六 島津筑後書状写

御國中乘輿御免之儀、願之通御免被遊旨奉承知、難有次第奉存候、弥明日罷出、御礼可申上候、

十一月廿九日

嶋津筑後

市来次郎左衛門殿

○二六七 某達書写

写

御家之儀者元源性^(姓)ニ而候処、中比

近衛様御契子之訳付、藤原性^(姓)ニ而被成御座候、然処故有

之、從 光久公如本々御改候、右之訳候得ハ、御庶流

之儀茂 光久公以前之御庶流者藤原性之管ニ候、 光久

公以來之御庶流者源性之管ニ而可有之処ニ、取違之者茂有之由相聞得候間、此趣御家老江申聞、御庶流嫡家ニ者

此段可申渡候、且又他国之人より御家者源性ニ而被遊御座候處ニ、御庶流之内藤原性茂有之候段者、何様成訳ニ

て有之候哉之旨相尋候ハ、藤原性之儀者 御先祖忠久

公 近衛様御家ニ訳有之藤原性被遊候故、 家久公迄者藤原性ニ而有之候得共、 御家者元源性ニ而被遊御改候、

依之 光久公以來之庶流者源性ニ而有之候、 光久公以前之庶流者藤原性ニ而有之候段、 返答可申旨可申聞置候、

以上、

正月十八日

右之通被 仰付候間、奉承知、庶流之面々ハ嫡家より

右件可被申聞候、以上、

○二六八 島津筑後達書写

写

源性^(姓)

藤原性^(姓)

嶋津周防殿

嶋津大藏殿

嶋津頼母殿

嶋津求馬殿

嶋津兵庫殿

嶋津小源太殿

嶋津左衛門

嶋津筑後

嶋津備前殿

嶋津内記

嶋津将監殿

嶋津内膳

伊集院藏人

川上久馬

嶋津助之丞

新納四郎左衛門

椋山権左衛門

桂太七郎

喜入右衛門

町田郷九郎

義岡右京

嶋津伊織

大野七郎太夫

吉利李右衛門

嶋津六郎次郎

大島休左衛門

龜山李太夫

山田七郎右衛門

迫水可遊

碓山仲左衛門

大田吉兵衛

寺山源右衛門

若松次右衛門

宇宿寛兵衛

石見与吉郎

羽月衆中

阿蘇谷彦左衛門

加世田衆中

西彦四郎

鶴田衆中

西川六太夫

嶋津兵庫殿家来

恒吉氏

嶋津小源太殿家来

和泉氏

島津筑後家来

石坂氏

相馬氏

右同

知覽氏

正月

右之通被仰渡候ニ付、書写遣候間、承知可被成候、以

上、

二月六日

島津筑後

北郷作左衛門殿

北郷七郎左衛門殿

北郷次兵衛殿

右、銘々通ツ、

〇二六九 右馬頭書状写

なをく伊集院しんゑもん事、きこしめしわけ候
てかたしけなくそんし候、なをかさねてく、

そのうちハ久しくふミしても申さすほいなうそんし候、
われらもたやすく此方へまかりつき申候、こゝもとかハ
り候こと候ハす、一たんふしに候、いよく又八郎さま
御仕あはせよく、めてたくそんし候、さためてそこもと
御子さまたち御そくさいに御せいしん候ハんとそんし事
候、何さままかりくたり候おりふし、くハしく申上候へ
く候、めてたく、かしく、

七月十三日

より

ミヤこの城
まいる

むまのかミ

〇二七〇 某達書写

覚

一毎朝出仕、日出時分ニ可被罷出候、役人其外御用之人
者可被相詰候、出仕衆者被致御目見得候者、可被罷帰

事、

一式部太輔様江御吳見可被申上儀於有之者、年寄衆談合候而、三原次郎左衛門殿へ以相談之上可被申上事、

一前代よりの失衆餘多有之由候間、依何之科何年逼塞被

申候通、細々以書立可有披露事、

一口事沙汰入念、年寄衆・口事聞衆被聞届候而、早々事

濟候様ニ可有談合事、

一武具事々數無之様ニ、無油断可被相調事、

寛永十四年十一月廿六日

○二七一 諸寺家定法写

諸寺家定法之事

一寺家之跡續禮那之可為定事、

付於其寺家遂学文、於有仁儀者先師之一跡可定事、

一構新地傍結庵有間敷事、

一亂行之輩會合有間敷事、

付従本寺可有成敗事、

右条々、為向後記置所也、

弘治二年九月吉日

○二七二 某条書写

條

一先年家相續之儀条々被仰候刻、北郷家之儀於 御當家

無余儀事候、雖我等若輩候、無恙可被相立之上意、不

淺御高恩候、然ハ奉對

公儀可抽忠懃存處候、家臣いづれも守此旨、碎心肝致

奉公、可守家之長久儀偏ニ相憑事候、就中於進退行跡

不可然折節者、何度も諫被申候者可為忠節事、

一當家中仕置之事、連々家老之衆へ任置候処ニ、此比何

も緩なる躰候由聞及、不心得儀候、自今已後諸給人任

役人中之下知、奉公方無疎略可相勤者也、此旨違背之

輩者堅可為曲事候、若又役人事被致油断、不調候儀有

之者、可為越度候条、可遂糺明候事、

一諸地頭或諸主取之可随下知、若相背人於有之者可為曲

事候、又主取として非分之儀を申懸ニおいてハ、當人

無用捨可申出事、

一諸士公界之差合、或出仕之時懇勸ニ可有之候、人々家

々次第常相定儀候間、狼無之様ニ可被致候、併出仕之時者、縦雖為高家、於遲参者不可及高下之沙汰候事、

一諸士之参會不懇勸ニ有由、其聞得候、惣而公界之嗜相應之所作可為存候、徒之差合不作法成躰あらは、見及

次第五ニ可加吳見候、其上無承引氣任之人候者、脇より可申出候、吳見之熟意等者無之候共、傍輩之上於側相そしり致批判事、可為停止候事、

一諸士・町人・土民・百姓等にいたるまで、非法なり儀を申かくる族有之者、即其旨可申出候、可及憲法之沙汰候事、

一家中軍役馬、毎月朔日・十五日出仕以後、可被相揃事、

寛永十年五月十九日

〇二七三 新納久了達書写

覚

今度山方之掟、新納大藏・種子嶋伊兵衛方より條書差越候、行司・竹木見舞へ茂髓申渡、堅可相守之、聊緩

疎有間敷候、仍如件

寛文六年午八月朔日

都之城

(新納久了)
又左衛門印
役人

〇二七四 評定所達書写

従前々如被 仰出、毎月十七日・同廿四日 天下様御禁断日にて候間、殺生仕間敷候、たとひ鉄炮之立物并弓矢持出事も可為停止候、若相背者あらは堅留置、此方へ可申上候、以上、

寛永廿二年正月三日

評定所印

〇二七五 島津久輝外二名連署達書写

覚

一諸國當年者作毛能候といへとも、近年打續洪水・風損故、八木不足たるの間、當暮寒造之酒、八木去年之員數之通可造之、勿論當座迄者一切可為無用、若令違背

多造候輩あらは、縦後日雖露頭候、可被行罪科之条、

訴人に出へし、急度御褒美可被下候、違犯之族者、其

所之名主・五人組迄可被行曲事事、但来年二月より右

之酒商買仕へし、其以前ハ不可賣買事、

一たはこ本田畑に不可作候旨、度々如被 仰出、年内よ

り堅可被申付事、

一御領・私領に有之寺社領之儀、 御朱印所にて高之外

たりといふ共、其所之守護人・御代官より先條之旨可

被相觸候事、

以上

八月日

右之通、今度江戸自 御老中様被 仰出候間、謹而可

奉得其意、聊緩疎有間敷候間、所中堅可被申渡者也、

延寶三年卯十月廿日

(島津久元)
帶刀印

(島津久敏)
新八郎印

(島津久輝)
中務印

〇二七六 島津久慶外三名連署達書写

覚

一江戸より大窪備前守を以、きりしたん改之儀、弥稱可

申付旨被 仰下候間、各可被承届候、諸所之改緩ニ有

之由、其聞得候、天下之御法度一大事之儀候処ニ、若

大形候者、地頭・改衆曲事深重之段可有御沙汰事、付

ころひ候きりしたんハ、南蠻やう之起請之判之内ニ、

十文字をかゝせ可為血判事、

一貴理師且改ニ付、焼印判之札不持者ハ留置、此方へ可

申来候、焼印判之札持候ものハ、無吳儀分國中可相通

候、其所之境々ニ番屋を作、往還之人を可被相糺事、

一下々之者共若椎をひろい、其外野山にて一日ノ渡

世をいととなミ候処ニ、其所より相留由候、縦山奉行よ

り為御狩被留候共、此節者先雖為御立狩倉、木之実ひ

ろい候やうに可被申付事、

寛永十二年十一月五日

(鎌田政統)
出雲守

(三原重勝)
左衛門佐印

(山田有英)
民部少輔
(島津久慶)
彈正大弼印

都之城

〇二七七 某袖判条書写

判

一 何篇相應之奉公差當候時、無緩可相勤候、惣而訴詔か
ましき儀、堅可為停止事、

一 諸出物、毎々未進かちに有之由、其聞得候、今度於鹿
兒嶋 仰出候様子も、此儀專一候間、向後疎意之人於
有之者、堅可及其沙汰事、

一 毎事定置候役人、用捨かちに候て、萬事不調候由相聞
得候、以來其躰ニ於有之者可為曲事候、付諸役人より
可申付義も無難哉可相勤候、若又役人として非分之儀
於申付者、遂相談、以其上可申出事、

一 口事篇之時、不依親類縁者致荷擔儀、前々より法度之
儀ニ候、弥以可守此旨事、

一 諸傍輩之參會、無慙懃ニ有之由聞及候、向後於其躰者

不可然候間、能々可相嗜候、或者徒差会、公事を批判
いたし、猜奉公人、或者誹傍輩之上輩有之由聞得候、
自己之不顧無奉公如此躰、曲事深重候、自今以後横目
を可付置候条、聞立次第可處重科事、

寅六月廿一日

〇二七八 島津久竹外四名連署達書写

覚

一 諸國在々所々にて當年茂冬造之酒可為無用、寒作之酒
ハ、米之員數去年之通可造之、若令違背、多作之族あ
らは、たとひ後日ニ露頭たりといふとも、可行曲事之
条、訴人ニ出へし、急度御褒美可被下候、違犯之輩者
勿論、其名主・五人組迄可被處罪科、但来年二月より
右之酒商賣可仕、其以前ニハ一切賣へからざる事、

附當座造之新酒者、弥以來迄可為停止事、

一 たはこ本田畑ニ弥不可造之、年内より急度可被申付事、

以上

丑八月日

右之通、今度江戸從

御老中様被 仰出候条、勤而可奉得其意、聊緩疎有間
布旨、所中へ早速可申渡者也、

寛文十三年丑八月廿九日

(肝付久兼)
彈正印

(新納久了)
又左衛門印

(島津久政)
新八郎印

(島津忠広)
市正印

(島津久竹)
出雲印

〇二七九 某起請文前書写

天爵靈社起請文上卷

一奉對 光久様へ無二心一筋御奉公可申上事、

一自今已後為何惡心者有之候而、御國御心遣成事共候、

曾以入其案申間敷候、若左様者承付候へ、即可申上

候事、

一自然若世上如何様之儀出合候へ、取分抛身命、忠節

を可申上候事、

右條々、一事茂於偽申者、

〇二八〇 島津久通外二名連署達書写

覚

一耶蘇宗門御制禁たりといへとも、密々弘之族有之と相

見得候にて、断絶無之條、向後者遂穿鑿候役人を定、

常々無油断家中并領内改之、不審成者無之様ニ可被申

付候、若此上吉利死且宗門領内ニ在之を、他所よりあ

らわるゝにおひてハ可為不念事、

一吉利死且宗門、其上ニ有之候儀者、名主・五人与可存

候處ニ、此已前より高札ニ書載候旨趣、令違背不申出

候、以来脇より於頭者、穿鑿之上、乍存知不申出候ハ

、可被行罪科旨、兼々申聞候、無油断相改候様ニ可被

申付事、

一吉利死且宗門、近年からき者共令露頭、法をもひろむ

るよききりしたん不出候、すゝめをもいたし候程のも

のハ、深くかくれ可有之候間、精を入遂穿鑿、捕候様

ニ急度可被申付事、

附宗門訴人之輩者、此以前より御定之通御褒美可被

下候事、

以上、

寛文四年十一月廿五日

右之旨、今度從江戸就被 仰出、鬼利死且宗門改人数
札之上を以、急度可申付候条、先為心得御條書之写意
を申渡候間、内々組中致僉儀、不審成者於有之者、早
速可申候、就中旅人之儀別而心遣候之間、縦當國之者
如何様之懸合雖有之、國證文等無之者ハ一切召置間敷
候、若大方ニ於有之者、与頭可為不念者也、

寛文五年己三月十日

町田勘解由印
(忠代)

新納又左衛門印
(久丁)

嶋津圖書印
(久通)

○二八一 島津久通外三名連署達書写

覚

一每度一向宗改之儀、無油断様ニと雖申渡、執心深々敷

輩者、色々偽事ニ而本尊并道具・書物之類隱置候、其
段訴人申出ニ付穿鑿、頃日ニも右品々多差出候、尤所
之曖・横目・五人与迄懸合之書物出置、如此仕合、曲
事深重ニ候得共、右宗旨之者ハ親子・兄弟も不存もの
有之と聞得候条、縦各懸合之書物被仕置候而も、宗躰
所より訴人之申分ニ付、其趣申越候刻、蔽其沙汰仕置
可申出候、若前ニ懸合之書物仕置候とて、其違目ヲ存
大方之改被仕候ハ、別而可為越度事、

一本尊持之者、近キ頃ニ自分より品々差出輩士ハ、科銀
迄を申付、其分ニ召置候、町濱・百姓以下者科銀をも
指免、宗旨可相易通申渡相返シ候、向後弥可為其分旨
可申觸事、

一前方本尊差出候者共ハ相付候門徒之儀、尔今不申出人
多由候、曖・横目・組中より相改、老人ニ而茂於申出
者可為忠切事、付近年本尊・諸道具差出候者并門徒之
者、誓紙未仕輩有之由候間、此度札改之刻可申付之間、
左様ニ可心得置事、

右條々堅固ニ可被申渡者也、

寛文五年己三月十九日

(町田忠代)
勘解由

(新納久了)
又左衛門

(鎌田政直)
蔵人

(島津久通)
圖書

如右、今度諸外城へ者御検使申渡候、鹿尾嶋之儀、別而御念遣ニ被思召上之間、彼條書之心得ニ而、各組中家内之人数入念改可被申付、左候而きりしたん宗并一向宗相改之通、慥ニ書物仕可被差出者也、

己四月廿八日

(町田忠代)
勘解由

(新納久了)
又左衛門

(島津久通)
圖書

○二八二 某達書写

覚

一諸士之子共さかやき大きにすり、角を高く入レ、後さかりニすり落し、見苦敷躰ニ候、右躰ニ而者、何方之御供、又者御奉公も難被 仰付候、就其為可被成 御覽

御狩被 仰付候へとも、其節者親共不差出候、是者無

隠事ニ候条、与頭より相改急度可被申上候、自然右改

ニ落候者於有之者、御内可被召放候条、能々改入念候

様ニ、与頭可被申付候、左候而右改帳急度江戸江可差

上事、

一頃日氣任者多有之、或ハ致祝言之所へ参、無作法之躰

仕、或人之屋敷へ石つぶてを打入、石垣・屏・門柱等

ニ疵ヲ付、土方・町方大勢押入、又者路頭ニ多人数集

候儀不可然候、毎度御禁止ニ被 仰出候得共、其者曾

不相知レ、ケ様之仕置横目頭役ニ而候処ニ、大形ニ有之

ニ付、徒者多出来候儀、早竟越度ニ被思上候条、右件

之族承立候様ニ可被申渡事、

一諸士娘嫁入共下女定、高三百斛以下二人、三百石より

千石迄三人、千石以上弐千石迄四人、二千石以上三千

石迄五人、三千石以上五千石迄六人、五千石以上壹万

石迄七人、壹万石以上八人、定之下ハ心次第たるへき

事、

如右 上意候之間可得其意候、以上、

巳四月十四日

○二八三 北郷忠頭智達書写

覚

此節兵具所軍役道具得与見合候之處、前代より在来道具ニ而候故、損物又者用ニ不立物有之候、此方高ニ應し軍役道具無之候而不叶事ニ候、兵次具足并弓・鎗・鉄炮其外諸道具いか程有之候得者、高ニ可應与詮儀を極、當時有之道具ニ不足いか程と致吟味、年々ニ不足分手廻シ能仕置可被置、尤為損道具、爰元ニ而拵ニ可成物者、兵具奉行より役所へ申出、無油断可相調之、新敷可出来道具者、前以何色いかほと出来候而勝手能候通致相談可申登、左候而相下次第員數為濟品者何時茂可記置候、兵具奉行替合之刻、請取渡為相濟迄ニ而、道具之過不足茂無僉儀候ハ、大方ニ可有之候条、頭役人江右之段堅申渡可入念、若無僉儀ニ而大方ニ仕候ハ、當役可為越度、付馬印之儀、毎年七夕ニ表方江差出候、家中之面々見馴置候様ニ有度事ニ候条、其段茂可被申渡候、

右之趣堅相守、無油断可調置者也、

延寶六年戊午五月十一日

(北郷忠管) 忠頭印

○二八四 島津久頼外二名連署書状写

尚々からめ取候ハ、繩取被付候而、宿次ニ相替リ、此方へ送届候様ニ可被次渡候、以上、

態申越候、仍橋口少左衛門与申者、公儀科人ニ而候、其表へ親類有之ニ付罷越由候而、昨日鹿兒嶋懸落、其元念を入被相改可被擲候、為其道具之者三人差遣候、不及申候へ共、何方へも不懸落様ニ被入念尤ニ候、恐々謹言、

鎌源左衛門

卯月廿四日

政有判

山民部

有栄判

嶋筑前

久頼

都之城

北郷藏人殿

土持権之介殿

御宿所

〇二八五 鎌田政直達書写

梶山并速水村相加地頭川上四郎右衛門、志和地付中尾口
相加、地頭北郷清兵衛へ被仰付、可然之由今度又作殿へ
御相談申候間、其段可被申付者也、

万治二亥

十二月廿五日

(鎌田政直)
鎌蔵人印

都之城

役人中

斑
目
文
書

〇一 出羽国斑目地頭職補任状案

(縮裏書)

「出羽国斑目御下文案」

在御判

下 出羽国斑目住人

補任地頭職事

橘元長

右人補任彼職之状、所仰如件、以下、

建永元年七月廿四日

〇二 斑目行蓮重松讓状案

斑目兵衛二郎入道聖蓮ハ為舎弟上、吳國警固の代官として忠をいたすあひた、薩摩國那答院柏原の内、河口の野并其内のあらひ新田(弥源次入道作)等をハ讓渡也、向後更不可有他人之口(物)、若此志をわすれて不慮之次第出来候時ハ、

(此状)ニよるへからず、仍證文之状如件、

正応元年八月十一日

行蓮在判

〇三 斑目聖蓮基泰讓状案

讓与 所孫三郎景泰薩摩國

那答院柏原内下河口田在家等事

四至堺見本券

右件水田在家等者、相副本證文、限永代無他之妨可令領知者也、仍為後日讓之状如件、

正應二年九月五日

聖蓮(花押)

〇四 蓮性陳状案

(一枚目ノ紙ヲ欠ク)

同状云、以斑目三郎入道性禪自行蓮存日令勤仕之上、差副觀聖甥澁谷孫七郎朝重令勤仕之上者、不及蓮性之口入、凡就行蓮之讓状、令立申相傳次第之處、蓮性寄事於警固令押領他人所領云々、

此条性禪者行重之代官也、非觀聖(ミヤ)之代官、朝重者蓮性之舎弟也、仍蓮性下向之時、具下之所差置也、何觀聖代官

之由可偽申哉、所詮何比觀聖以朝重為代官令勤仕哉、被召出着到之日、觀聖不實可為顯然者也、

次任行蓮讓、令申相傳由事、觀聖以正應三・六狀等、雖号讓狀由、有糸々所難之上者、難備實證、凡有糸々違目者、有何罪怠貳箇村之内被悔返一ヶ村哉、如重春可書載其由緒之處、無其儀之上者、非本主之素意之糸顯然也、次正月十六日狀仁謂、先日狀等者、差重春・土用犬分由事、限兩人分先日由載之糸、色目何事哉、如狀文者、正應六年以前之狀等皆以不可成證文之由所見也、

而觀聖賞申彼狀之上者、同三年之狀令自破之糸不及異儀者也、次重春訴詔事、蓮性不能陳答、次土用犬訴詔被弃置由事、不存知之、奉行人誰人哉、被召出弃置狀、欲申細子、次平氏訴詔被弃置由事、虛誕也、平氏与觀性相論為當御奉行未落居坎、各別之上者、不能蓮性口入哉、同狀云、土用犬丸去永仁二年之比、為五番御引付對馬民部大夫重實奉行、可宛給借屋原之由申付御教書於行重之間、被經御沙汰、被弃置彼濫訴早、雖不被下御下知狀、

被記錄坎、奉行人現在之上者、有御尋不可有其隱坎云々、

此糸永仁之比者、土用犬丸死去早、為誰人訴人可被記錄哉、不可然次第也、雖然若猶相貽御不審者、尤被召出記錄、可有御沙汰者也、

同狀云、土用犬分讓狀者蓮性令帶之坎、無蓮性之私曲者、兩通袖書行蓮自筆不可有相違云々、

此糸如觀聖号土用犬分、讓送給正應六年正月十六日狀袖書者、非行蓮自筆、子細載于先段畢、云袖書、云判形、相違之上者、尤可被校合行蓮自筆狀等者也、

之由載于先陳之上、如正應三年正月廿七日狀者、大井乃右衛門四郎云々、如同六年正月十六日狀者、孫子行重自幼少養子之糸所見、如同六年狀者、謀作之間、令作名坎、隨而澁谷屋數名田者行蓮重代私領也、而行重不讓得段步之上者、爭可被呼澁谷名字哉、為本主行蓮之素意者、何前後狀如此可令相違哉、然者違目非一、觀聖私曲忽令露顯畢、

尤欲被行其咎矣、次押領由事、蓮性自行蓮之時至于今

令知行來之上者、何可為押領哉、比與也矣、
以前條、大概如斯、所詮任觀聖自稱、被召出正應三年并
同六年正月廿七日讓狀為被

行觀聖於奸訴不實謀書重疊之科、
恐、披陳言上如件、

德治二年十月日

○五 關東引付衆結番交名注文案

一番引付

無出仕

武藏守

同前
安藝守

同前
掃部頭入道

雖有出仕則退出

宮內權大輔

因幡民部大夫入道 伊勢前司

筑前權守

齋藤十郎左衛門尉

下郷中務丞出仕無之

雜賀孫二郎

南条四郎左衛門尉

越中左近藏人

當奉行 應有

延慶三年七月廿一日、於引付遂問答、同廿八日事書

被取捨畢、

同八月二日、御評定ニ合兩國司以下評定衆太略皆參
云、蓮性・重秀等遲參之間、有内談テ、以觀聖所

持之讓狀并蓮性承狀之類書・御下知等許披露畢、次
沙汰完中蓮性令參上、(最之)兩度雖令庭中、無許容、仍則
退出了、

○六 沙弥行誓請文案

(端裏書)

「行誓入道御請文案」

陸奥國苦谷保國方御年貢金貳拾兩事、依和談之儀、每
年以代錢貳拾伍貫文、於京都十月中可備進候、且此趣不
可有相違之旨、下賜國宣候者、向後不可有子細候、若懈
怠不法事候者、任先例可有其沙汰候、仍之狀如件、

正和二年七月廿日

沙弥行誓

在判

○七 斑目政泰着到狀

薩摩國那答院一分地頭斑目六郎政泰并子息孫七政行當參
之間、依禁裏御事、則時馳參、付着到候畢、以此旨可有

御披露候、恐惶謹言、

元亨四年十月廿一日

橋政泰上

進上 御奉行所

(裏花押)

〔承了 (北条英時) 花押〕

建武二年八月一日

平重實 (花押)

〇八

斑目政泰着到状

依京都騒動事、薩摩國一分地頭禰答院斑目六郎入道行惠

令馳参、令付著到候訖、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元徳三年十月十九日

沙弥行惠 (政泰)

進上 御奉行所

〔承候了 (北条英時) 花押〕

〇一〇

沙弥祖銛讓状

ゆつりわたす

薩摩国禰答院時吉・柏原兩名之内下河口村・借屋原村

右、行蓮并重實のゆつり状にまかせて、斑目豊犬丸に限

永代所讓与也、子孫可知行、仍為後日讓状如件、

正平廿二年四月三日

沙弥祖銛 (花押)

〇九

斑目重実讓状

後のためにしひつをくわうる也、

さつまのくにけたうゐんのうちかりやへらのむらへ、重

実ちうたいさうてんのしよりやう也、しかるにかのむら

を、またらめの三郎とのに心ざしあるによて、ゑいたいゆ

つりわたすところなり、子々孫々さうそくせらるへく候、

〇一一

斑目重朝安堵状

行蓮并行祖讓状令披 (見) 候早、

右、薩摩国禰答院柏原之 (内之) 下河口村并時吉之内下

於此兩村者斑目松熊丸 證文、無他妨可令知行、為後

證状如件、

應永貳年十月十五日

平重朝（花押）

〇一二 斑目重茂安堵状

薩摩國那答院時吉名内借屋原村并柏原内下河口事、前々のゆつり状にまかせて斑目信濃入道子息万壽丸、永代無相違可令知行也、此上者於向後祖專入道如何様仁他人仁けいやく候とも、任此状仁可有知行候、但妻子外ハ事儀にて可相計候、仍為後日状如件、

應永五年十一月六日

斑目信濃入道殿

前出羽守重茂（花押）

〇一三 斑目延廣讓状

（端裏書）

「千寿丸とのへの状」

讓与 昌的とかへて候、
為後日に書付了、

薩摩國那答院時吉名之内下借屋原内鎮守丸田をへ、千壽

丸仁永代ゆつりあたうる所なり、無他妨子々孫々まで知行すへき也、仍為後日之状如件、

應永十參年二月十日 沙弥昌的（花押）

〇一四 時吉・柏原両名内所領注文

（字ノ端裏書）

「 之日記」

ほんりやう下かり屋原二ちやう内の門かす

一所かミのその 一まゑのその 一所なかその 一所く

るす 一所くほその 一所くすせ その外うきめんたゝ

候也、

又とうゑの門かす日記

一所大すミ 一所下河口 一所かミなかむら 一所ほり

一所はたけなか 一所下とうゑ 又とゝろはらより上の

田みなもちて候、一いき山三たん

又おうかしハはらのさいけのかす

一所まゑのその 一所まきせ 一所その田 一所ちより

たう 一所ふちのうへ 一所かりやのその 一所すきつ

る 一所くすはら

又うきめんの日記 田はら三たん かち山三たん ふか
た二たん 柘田のかちやのもと 又はたけ田二たん い
わざ跡二たん

又さし内 一所くりやの 一所やなつめ 又あしかむた
一ちやう

又時吉の内 一ふるのたちやしき二か所

一いち口六たん 一下たはら三たん 一なかむた五たん
一てろくのミな口二たん

又くすせ殿ニつかわし分日記 これハおうかしハはら内

一所ひかし 一所まきせ 一所なかその 一所こそその

一かく山二たん 一いわもと二たん 一しけ田一ちやう

○二五 河内守延重名字書出

(異筆)

「内外しやうくしんくむく」

斑目三郎橋延廣

應永十九年霜月十五日

(河内守)

延重(花押)

(本文書へ一四号文書ノ裏書ナリ)

八幡宮

○一六 斑目広通寄進状案

為立願時吉名萩峯之門之内ま弓場のもとの水田一反
三百地之事、於子孫寄進候早、仍為後日證文如件、

永祿元年戊午十二月吉日

斑目治部左衛門尉橋広通

湯田現瑜御代

座主

○ 時吉・柏原両名内所領注文案

(本文書へ一四号文書ト同文ニツキ省略)

○一七 某願文

夫大般若經者、三世諸佛薩摩□十方□学道之快鞭也、
或如神殊其光輝無邊際、或如妙醫、其藥性除惡氣、上以

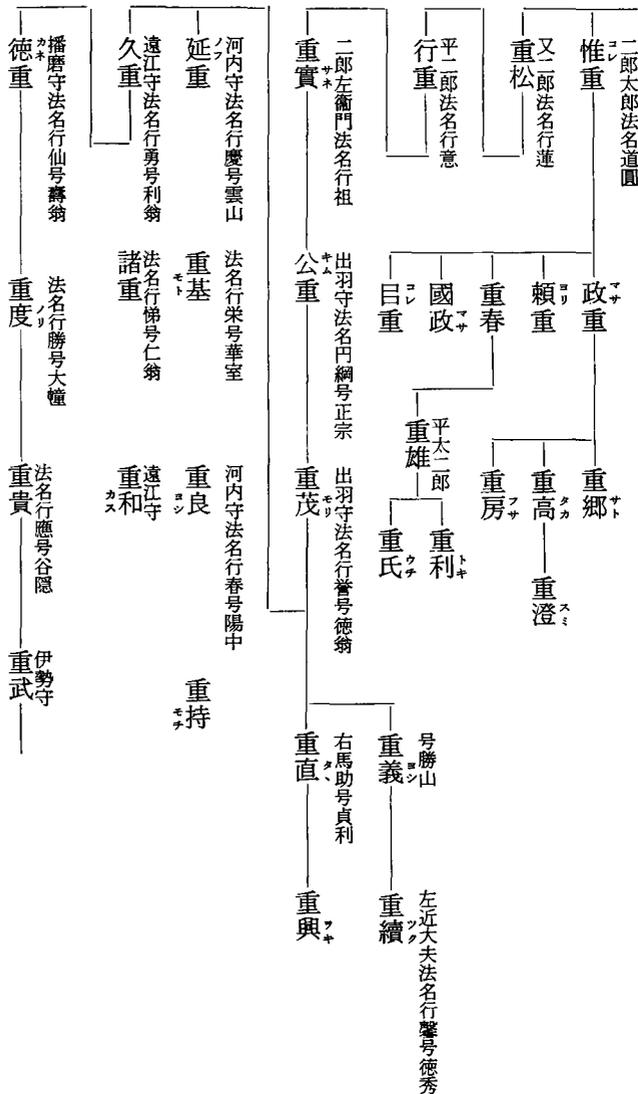
愜聖賢之情、下以解凡愚之惑□也、故或受持讀誦、或
 書寫聽聞、則衆魔惡盡、驚怖倒退、信受奉行、則諸天善
 神、皆來衆會、常隨擁護矣、故一切諸願得成□意吉祥矣、
 越有留駐藤原久元公三州之大主君、就于上洛、東関武州有留駐住居
 江戸境。數月、依焉嫡子之久通公尊父為信心堅固・武運
 長久奉仰諸天三寶護持之力、由是選吉日良曜就于陽廣山
 曇秀精舍莊嚴保安集慶道場命調濟之淨侶、謹自仲冬十五
 冀奉開啓大般若六百軸、以同到念又九日真誦之、全功早
 矣。○專祈處、○當生辛巳信力康堅・仁智宏深・君臣合
 道・声庶民名遠傳乎四海、令子令孫
 壽山增役耳、○福海弥深空城剛堅日々長武運、○次冀関
 路、無一点之碍驛程有千詳之喜、早凝帰駕速到家郷、

(端裏ハリ紙)

「出水 廿四ノ内

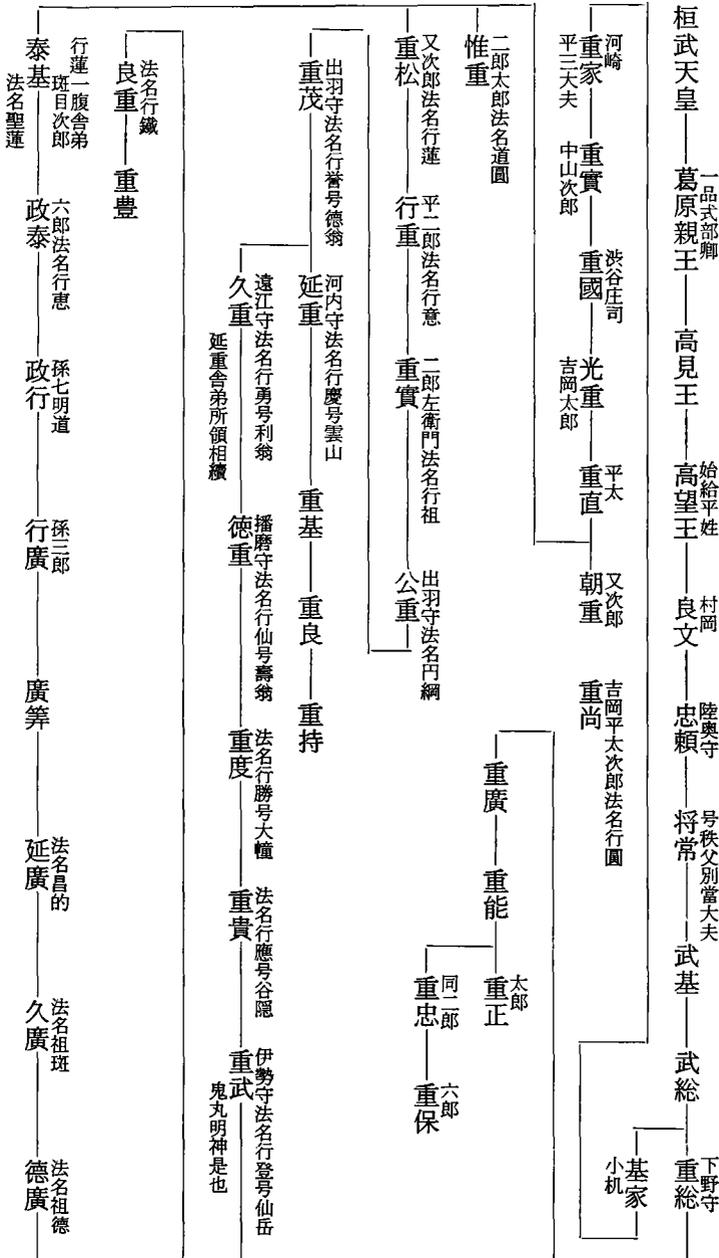
〇一九

禰答院渋谷氏・斑目氏系図

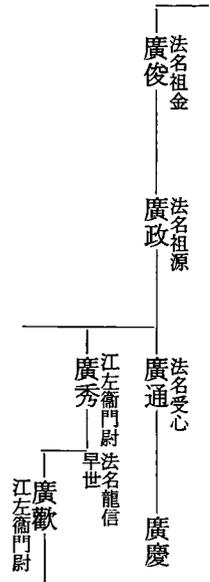


斑目藤左衛門

系圖

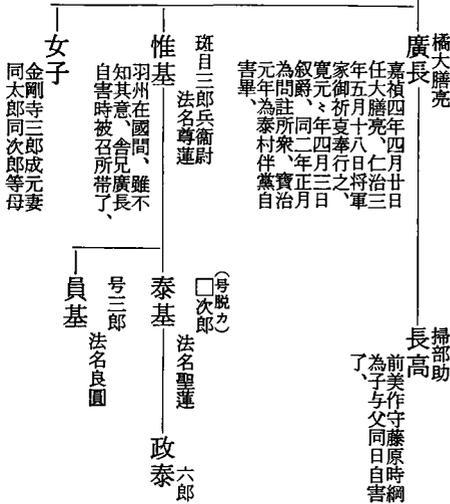


〇二〇 橘姓斑目氏系図



右馬權頭
遠江權頭(守之)
正五位下
廣
右大将家御時始下
関東文治元年十二
月廿四日勝長壽院
養為布敷取長久
十一月八日為政所
廿五日永福寺供養
軍師出問、同模河
導御物、同模河
領養奉七日相模河
供養奉七日相模河
領養奉七日相模河

惟廣
橘三藏人法名
惟蓮
藏久三年三月九日
建久三年三月九日
廿七日相模河
供奉承元二年
正月十二日御供
尊事行之同御
建正二月間所
大慈寺造間奉
六日將同宮三月
行也、同家御祈
移徒七月廿七日
寺供養時為前
日



橘姓斑目氏系図

(本文書ハ二〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

〇二一 祁答院渋谷氏・斑目氏系図

渋谷庄司 重國 — 吉岡太郎 光重 — 平太 重直 — 又郎 朝重

吉岡平大二郎 重尚

二郎太郎法名道圓 惟重

又二郎法名行蓮 重松

平二郎法名行意 行重

二郎左衛門法名行祖 重實

出羽守法名円綱 公重 号正宗

出羽守法名行譽 重茂 号徳翁

河内守法名行慶号雲山 延重

次郎 泰基 續斑目之家 行蓮一腹舎弟也、

法名聖運

播磨守法名行仙号壽翁 徳重

法名行勝号大幢 重度

法名行應号谷隠 重貴

重武

又次郎法名行鐵 良重

重豊

六郎 政泰 孫七 政行 孫三郎 行廣

廣筭

延廣 法名昌的

久廣 法名祖班

徳廣 法名祖徳

廣俊 法名祖金

安藝守 廣政 法名祖源

廣通 法名受心

廣慶

三角文書

〇一 鎮西下知状

薩摩國成富次郎忠廣法師法名与成富太郎朝忠相論薩西雲

摩郡成枝名内成富田畠事

右、就訴陳擬有其沙汰之處、兩方和与訖、如朝忠今年八月三日和字狀者、成富名條條雖番訴陳、以和与之儀草平太作被止違乱之間、鏡乃西邊新開奉避畢、宇津野乃木場・松波邊・同中尾乃下地去畢、此外相互忠末去状於迄于子孫不可背、加樣契約申上者、此後不可有腹黒凶害云云忠末・加證判畢、起請之詞畧之、

如西雲同日同状者、成富名條條雖番訴陳、以和与之儀鏡乃西邊新開去給之上者、草平太作不可申違乱、此外相互忠末和与状於迄于子孫不可背、加樣和与之上者、惣領山下地仁不可相綺、加樣契約申上者、至于子孫此後不可有腹黒凶害云云子細同前、如忠末弘安七季三月廿九日同状者、薩摩郡成枝内成富名者、任親父浄土讓、忠末雖可知行、次郎忠弘為一腹一性兄弟之間、和与儀仁定旨、次郎忠弘所仁分渡田畠・山野狩倉事、水田鏡陸段坪四至畧之、木戸口貳段、井尻坪同前、寺前藤太郎作、高次・須多木・石於土里・

合貳段廿坪、永田乃登草平太作合八段、畠地四至畧之、忠弘知行之所乃水田加徵米波、任檢田得田可被弁、但大番役・万雜公事・臨時課役・濟物者、宛于成富所五分一可令勤仕、於本證文者、自三郎忠弘手、忠末請取畢、於山野狩倉者、互無違乱可令合符、分田加徵米者惣領可弁、但相傳乃田雖返次郎不可綺、國衙所當・万雜公事宛當物者、忠末加拘志言付于忠弘方田不可弁給、右於件田畠・山野狩倉者、限永代至于忠弘子孫、可被知行也云云忠時・忠實・忠種加證判畢、者此上不及異儀、相互守彼状等可令領掌焉者、依仰

下知如件、

文保元年九月十六日

(北条隨時)
遠江守平朝臣(花押)

〇二 沙弥西雲讓状案

(端裏書)

「あんもん」

ゆつりあたう五らうかところニ、沙弥西雲か先祖相傳の(私領)しりやう薩摩國薩摩郡成枝名(成富)なりとミ名の内てんはく、

山野かりくらの事并水田のつほく、てらまへ所々内と
う太郎(作)つくり、石おとり・にれ木・たかつき・すたき合
二反廿・なか田かミ四反、あふミ一丁内南のより半分に
定、畠地ほりのうち北のより半分、東田はた、ほりより
北のはらはんふん、うつの・まつはへ・なかをとくふん
半分、山野かりくら(合符)へあいかりいとりにすへし、

右件の田畠・山野かりくらハ西雲か先祖相傳の私領なり、
而子息たるニよて五郎ニ永代をかきて譲渡早、しかれハ
御公事ニおひてハ、本證文の旨ニまかせて、あたるとこ
ろ半分(勤仕)きんしすへし、但遠江殿御下知の正文を相副て譲
与處也、本證文等者雖可相副、四郎か許ニとゞめおく、
若入事あらハ是を相帶すへし、又遠江殿御下知、四郎か
方ニ入事あらハ、これをいたすへし、兄弟相互ニ一身同
心ニして、譲与所々不可有相違、無他妨可令知行狀如件、
元應三年五月九日 沙弥西雲 在判

〇三 沙弥西雲讓狀
さつまのくにさつまごほりなりとみ(成)ミやうの内、(西雲)さいらう

んかちぎやうふんをさしわけて、しそく四らう、同じよ
のことも(字共)に、せん(先日)にちゆつるとゆゑとも、四らうい(二期)ちこ
の(孫)ふちハ、さいうんかまこみろく丸ちぎやうすへきとこ
ろ也、すいてんあふミたのつほ、同さいへんをくわうるち
やう、なかたのしもの五反、きとくち五反、はくちほり
の内のきたのし(四巻)、なりとミのほりのとをりよりすくに
ひかしのたしまのにし(山野)のたはたにさたむ、ほりよりきた
のくわうやはんふんニさたむ、さん(山野)やかりくらハほんせ
うもん(文)にまかせてちぎやうせしむへきところ也、もした
んに(人)にも、一そく(族)にも、しそのなかに(元)も、うりもしゆ
つるというとも、またくそれをみろくもちいるへからす、
てうとのほんせうもんをあひそゆるへけれど、みろく
いまたをさなきあひた、四らうか本にあつけおく、四ら
ういちこの(文)ふちハ、もんしよといふ、そりやう(所領)とも、
しふそん(所領)にいたるまでなかくちぎやうすへきなり、
よてゆつりしやうくたんのことし、

正中三年九月八日 しゃみさいうん (花押)

○四 平経忠讓状

ゆつりあたうる五らう三らうかところニ、(先祖) 経忠かせんそ
 さうてん(私)のしりやうさつまのくにさつまこをりなりへ(成枝)
 た・なりと(成)ミみやうの内、てんはく・さんやかりくらの事、(田)山野狩(倉)
 水田(坪)つほく(寺)てらまへ二反、とう太郎つくり、なかつた下(水田)
 につけて二反、あぶ(證)ミ五反か内、にしにつけて二反廿日(南)
 ニさたむ、はくちほりの内、ミナミにつけてはんぶん(半)分、
 ひんかしのたはたをかきる、ほりよりきたのはらはんぶん(北)分、
 ん、し(四五)ハほんせうもん(本)にミへたり、うつのこは(宇都之木場)・ま(松)
 つはへ・中を、つねた(屋)かちきやうふん(知)のところニあた(分)
 らんところはんぶん(半)分、さんやかりくらハほんせうもん(行方)の
 むねにまかせて、いとりああいかりにすへし、
 右件水田・さんやかりくらハ、つねた(手)かせんそさうて
 んのしりやうなり、しかれハしそくたるにて、五らう
 三らう(永)にゑ(代)たいをかきてゆつりあたうるところ也、し
 かれハ御くうし(公事)においてわ、ほんせうもん(分)のむねにまか
 せてふんけん(分)をきんしすへし、御けち(動仕)のしやうもんをあ
 いそへてゆつりあたうるところ也、よてゑ(下)たいをかき

てゆつりしやう如件、

ちやうわ二年四月十七日

平経忠(花押)

○五 道政・山田泰道連署沽券

ようく候にて、ほんせんかゑしに入をき候すひてん(本)田
 の事
 さつまこほり時吉(名)やうのうち、くさ(草)りのうち、かふ(腰)
 らてん二反廿中城のならひのほりまち、かわらけくわ(加)
 候てにくハんさ(二)ひやくもん(一)ニ、もりの五郎三郎との御(一)
 かつ(二)いれをき候ことしちなり、よてほんせうたう(本)・ち(所)
 とま(三)ひあひつかね、りん(三)しのくハやく(百)・御くふし入物(地)
 いたるまで、いかうにと(一)め候なり、もとのようとう候(用)
 とも、三かね(手)のうちにはうけ候ましく候、そのかハリハ
 いづくにても候へ、もとのようとう候ハんときハ、さく(作)
 もう(毛)いこさんてん(以)いせん(以)ニうけ申へく候、よて後のため
 ニしやうくたんのことし、

延文六年二月十二日

山田泰道(花押)

道政(花押)

○六 島津師久預状

凶徒森孫次郎跡事、為闕所之間所預置也、早任先例、可被知行之状如件、

貞治七年卯月十七日

師久(花押)

森五郎三郎殿

○七 森忠次讓状

ゆつりあたふ、森の二郎三郎よりして、かしけ田の九郎さゑもんにゆつり状、此旨あらそひあるましく候、

平朝臣 忠次よりして、忠光にゆつりあたふ、

もりの忠次(花押)

九郎さゑもん

ゆつり

あたふ

明德二年 二月十七日

○八 本田常直外四名連署契状

薩摩國薩摩郡之内成枝名四十町・^(光)瀦富名地頭職二十

町・東手山野等事

右、可被致御忠節之由堅申談候之間、彼名田山野等事、

御判於申下進候、御一家中無二心被致忠節、可有御知行候、仍於于彼在所、自然与自公方無理之御沙汰候する時者、此衆一味同心ニ其沙汰於可申立候、若此段偽

申候者、

日本國鎮守伊勢天照大神宮、殊者當國鎮守新田八幡大菩薩・天満大自在天神

^(兼訪)

取方上下大明神 御罰各々可罷蒙

候、仍為後日證状如件、

應永卅五年八月廿二日

成富殿

^(野道)のくひ

家久(花押)

富長殿

^(小田原)こたはら

慶幸(花押)

中殿

^(遠矢)とをや

善朝(花押)

森殿

^(本田兵衛)ほんたひやうこ

忠親(花押)

上野殿

^(本田)ほんた

常直(花押)

(本文書ハ英彦山発行ノ牛玉宝印ノ料紙ヲ使用セリ)

○九 成富忠光・忠成連署証状

さつまのくにさつまこおりの内の、うちのひかしてのな^(東手)_(成)

〇一三 森重有書状

尤我等之儀共、其地へ今日参候間、参上申、此よし申度候へ共、今程ハ御時分ニ而候間罷成らず候、何とそ調候様ニたのミ入候、我等事、何日ハ其地へ参候而、御奉公可申覚悟ニ候、其内ヲ彼人たのミ申度候、調様ニたのミ入候へく候、以上、

態申入候、随而者彼人事、我等同名之儀ニ候条、拙者番代ニ談合申度候間、貴所御前より嘸中へ御談合被成候而、我等其許之様ニ可参間(會)を、番代彼人ヲ頼申度候、貴老御存之人ニ而有之間、能様ニ御取成し奉憑候、餘ハ追而御面談之時可申達候、偏頼入候事候、恐惶謹言、

四月三日
森忠右衛門尉 重有(花押)

清敷ニて 中津川より

村
田
文
書

○ 一 新納忠元坪付

坪付

羽月

清水之門

一
鳥巢村井ノ尻
上田五畦拾歩 七斗四升六合 次郎三郎
同村堀上
中田六畦廿八歩 八斗三升貳合 長兵衛尉
同村井ノしり
下田壹畦
同村観がるひ
下田壹段十二歩 壹石四升 八郎三
同村にし
下田七畦十四歩 七斗四升貳合 即右衛門尉
同村ほり上
上田七畦廿八歩 壹石一斗壹升 清右衛門尉
宮人村千与
下田九畦十歩 九斗三升三合三勺 九郎左衛門尉
同村追間
下田五畦六歩 五斗貳升 二郎右衛門
一ノ宮村種かけ
荒田壹段拾二歩 一石貳斗四升八合 半助
鳥巢村にし
中田壹段貳畦 壹石四斗四升 藤左衛門尉
同村同所
下田貳畦 貳斗 備中守
同村同所
下田八畦十二歩 八斗四升 同人
宮人村はしノ口
上田六畦廿歩 八斗 源介
同村引田
中田壹段十五歩 壹石五斗 清九郎
鳥巢村屋敷そへ
上田三畦貳歩 四斗貳升九合 五郎三郎

同村芹幸田
下田一段壹畦廿歩 九斗三升三合 主馬允
宮人村通ノ口
上田壹畦十歩 壹斗六升 五郎九郎
同村瓦くたし
下田九畦十歩 七斗四升六合 孫八郎
同村同所
下田三畦十四歩 貳斗七升七合 同人
同村同所
下田壹畦五歩 九升三合三勺 同人
同村山ノほり
中田貳段四畦廿四歩 二石九斗七升六合 うと
同村出水か追
下田八畦五歩 八斗壹升六合 与三
上山野村くつかた
上田四畦廿四歩 七斗六升 八郎右衛門尉
同村のり末
上田壹畦 壹斗六升 清右衛門尉
同村あらた
下田四畦八歩 五斗一升貳合 三郎五郎
同村大つほ
上田六畦廿四歩 壹石八升八合 源太郎
志の原村みつくり
中田九畦廿歩 九斗八升三合 太郎次郎
同村めの上
下田壹畦貳歩 八升五合三勺 四郎左衛門尉
里村上幸田
下田七畦 七斗 民部左衛門尉
上山野村追
中田四畦廿五歩 六斗七升 李助
同村権現之下
下田壹畦廿歩 貳斗 彦三郎
篠原村かん林
中田六畦 六斗 源八
同村かり川
下田貳畦廿四歩 貳斗二升三合 新九郎

柳瀬村岩か迫
下田式段四畦 式石四斗 松田九郎右衛門先
源之丞

島集村横つる
下島卷段卷畦廿四步 八斗式升六合 彦兵衛尉

原田村古市
中島三畦十步 式斗六升六合 太郎四郎

島集村つかとし
中島一段四畦 卷石卷斗二升 右衛門尉佐

同村屋敷わき
中島八畦 六斗四斗 次郎三郎

同村つかとし
下島九畦十步 五斗六升 弥次郎

同村屋敷その
下島四畦 式斗四升 二郎三郎

同村ちやうちんの本
下島一段六畦廿四步 卷石八合 善右衛門尉

同村圓通寺原
下島八畦 四斗八升 右衛門尉佐

小木原村大四郎
上田七畦十五步 卷石五升 宗左衛門尉

同村こた田
下田卷段四畦 卷石四斗 助次郎

はねた村なへ
下田五畦 五斗 半五郎

湖邊村なこ丸
下田八畦 八斗 城介

合高三拾七石二斗六升

新納武蔵入道

慶長十四年己酉
十月七日 為舟(花押)

村田源之丞殿

〇二 比志島国貞外二名連署知行目録

知行目録

高拾六石六斗七升七合三勺三才

高廿式石卷斗八升六合六勺六才

高七斛三斗九升八合六勺五才

合四拾六石二斗六升

右之地、應比中公役之高被宛行者也、
慶長十九年 六月廿七日

薩摩大口牛尾村之内

溝口之内

同大田村之内

比良ノ小屋敷

同里村之内

汎免

三原諸右衛門尉

伊勢兵部少輔

比志嶋紀伊守

村田源之丞殿

〇三 知行名寄目録

(増裏書)

「村田源之丞殿」

知行名寄目録

里村あふみ
下田十八間 六畝

俵三ツ

与八

篠原村永幸田 畝八ツ

下田十五間 卷段 五俵卷斗式升

形部左衛門尉

大田村吉たけ

下畠八間 八畝 大豆式斗四升

善右衛門尉

同村ふか町 畝十二

下田十二間 八畝廿四步 四俵七升五合

同人

里村古川一反一畝 畝十二之内

上田四畝六步 三俵卷斗 市之丞

市之丞

篠原村長幸田 畝六ツ

中田九間 七畝六步 四俵卷斗六升

源之丞

里村わき

下畠八間 五畝十步 大ツ卷斗五升九合

幸調

同村小城之本

下田十四間 六畝十六步 俵三ツ五升

勘左衛門尉

篠原村永幸田 畝八ツ

下田八間 五畝十步 卷俵卷斗 市兵衛

市兵衛

大田村ふかまち

下田十四間 四畝廿步 式俵一斗七升八合

市之丞

里村五段田八畝 畝六ツ之内

中田四畝五步 式俵一斗七升八合 大膳亮

大膳亮

同村上幸田

下田九畝廿九步 式俵一斗五升七合 新右衛門尉

新右衛門尉

河添村田中

屋敷六間 五畝十步 五升三合蒔 次郎五郎

次郎五郎

桑式本

漆式本 同卷升四合 糶一升四合

同卷升四合

柿卷本

糶七合

同村小松榮

山畑八間 卷畝二步 卷升蒔 大ツ式升

二右衛門尉

同村馬場之下

下畠二畝之内 大豆三升五合九勺七才 土佐守

土佐守

同村たきノ本 畝十ヲ

下田六間 卷畝十二步 卷升一合蒔 久蔵

久蔵

河北村徳右衛門

上田卷反六步之内 八表式升五合 筑後

筑後

同村下ノ水

下畠十九間 卷段四步 大ツ卷表一斗五升 吉兵衛尉

吉兵衛尉

河北村八反田

中田卷反四畝廿二步 糶卷表一斗九合一才 市弥太

市弥太

同村彦川

上田七畝六步之内 糶四升八合四勺二才 志摩丞

志摩丞

合糶大豆四十八畝

高ニシテ十六石

元和六年申三月廿九日

〇四 知行名寄目録

五石四十三番 知行名寄目録

くし替か迫六畝廿八步 畝八ツ之内 砂入

下田拾拾步 糶式升五合 對馬

松か迫式畝十步 畝九ツ之内 崩成

下田廿八步 糶卷斗七合 木工丞

同所畝二ツ 崩成 三合蒔

下々田拾一步 糶三升 甚介

糶三升

甚介

帶田 畝十七
下田四狹廿步
馬渡り 畝四ツ
下々田五狹十步
同所 畝十二
下々田老段
同所 畝八ツ
下々田三畝六步
同所 畝十一
下田貳畦
野中田三反四畝廿步 畝五十四之内
下田二反七畝一步 糶八表二一斗三升七合

勘七

○六 大口支配所知行目録

三升八合蒔
糶老俵二斗六合
四升三合蒔
糶貳斗壹升
八升蒔
糶老俵壹斗五升
二升五合蒔
糶壹斗二升五合
老升六合蒔
糶壹斗六升

軍七

本町九畝廿七步大ッ老表壹斗之内

村田源之允殿

同所 畝十二
下々田老段
同所 畝八ツ
下々田三畝六步
同所 畝十一
下田貳畦
野中田三反四畝廿步 畝五十四之内
下田二反七畝一步 糶八表二一斗三升七合

三介

下屋敷四畝廿七步

餘地

同所 畝十一
下田貳畦
野中田三反四畝廿步 畝五十四之内
下田二反七畝一步 糶八表二一斗三升七合

仲介

同所仙田源五左衛門先

大ッ式斗式升式合

同所 畝十一
下田貳畦
野中田三反四畝廿步 畝五十四之内
下田二反七畝一步 糶八表二一斗三升七合

作左衛門尉

下屋敷廿一間半

九畝拾壹步

源五左衛門

同所 畝十一
下田貳畦
野中田三反四畝廿步 畝五十四之内
下田二反七畝一步 糶八表二一斗三升七合

与一左衛門尉

一柿壹本 一茶百目

大ッ老表八升

合拾五俵

里村上牟田三反壹畝十六步糶九表壹斗五升九合之内

喜兵衛

高ニシテ五石

下々田五畝廿四步

喜兵衛

右知行、今度青木へ就被召移、為加増被宛行者也、

辰

糶老俵式斗五升八合六勺五才

喜左衛門

寛永五年 十二月十六日

里村高島式畝拾七步糶老表式斗壹升之内

喜左衛門

村田源之丞殿

糶老俵壹斗式升

同村古川老反三畝廿六步糶七表三斗式升せ町式ツ之内式ツわり

千吉

○五 大口支配所不足割付目録

糶三表三斗三升五合

不足わり付目録

同村青木本四反式畝十四步糶十七表壹斗式升六合之内 助左衛門

篠原村畝廿四 糶八表一斗二升ノ内
下田二反二畦之内糶六升二合四勺

二郎右衛門尉

寛永七年 三月二日 大口支配所 (印文「大口改」)

同村下水流 せ町八ツ 六畝十八步 長作

村田藤左衛門尉殿

糶二表

里村前畠卷反式畝九歩大ッ卷表八升之内四ツわり
中畠三畝式歩半
甚右衛門

大ッ卷斗七合五勺

延宝六年午ノ

正月十一日

同村嶋島

山畑六式間
式畝拾式歩

徳右衛門

大ッ卷升八合

○七 新納久仰奥書

町ノ後卷反五畝廿六歩大ッ卷表卷斗之内屋敷竿より入
下々屋敷五歩

勘左衛門

右、坪付等六通、其方家蔵ニ而、此節致一覽候處、
靈社真蹟等茂有之候ニ付、加袷装差返之候条、無鹿抹永
傳有之度者也、

大ッ五合

里村脇三畝廿四歩式表六升之内
下田卷畝廿七歩

治部右衛門

大ッ俵三升

新納駿河

里村古川中嶋式畝廿歩初卷表之内
下々田卷畝拾歩

弥右衛門

「久仰」(花押)

初卷斗七升五合

安政六年未十月

右初大豆拾三表三斗式升七合八勺

村田治右衛門殿

高五石八升九勺九才

外五才過

○八 伊地知季通副書

右知行、寛文九年酉ノ正月門浮免混合三拾石圖ニ

(別添副書)

而致支配、浮免ハ三十石與合を以自分より被致地

御自分家蔵之文書、新納駿河殿江今度入御覽候処、一軸

割候処ニ、直之請書無之候ニ付、此度目錄相改者

ニ袷装被相加、外箱迄被相添御返相成候条、猶亦後年為

也、

御家寶御秘蔵有之度、拙者致取傳候故、寸筆副置もの也、

大口支配所



伊地知喜十郎

安政六年

未十二月

村田治右衛門殿

季通（花押）

山口文書

〇一 渋谷重心陳狀案

(端書)

「渋谷弥三郎入道重心陳狀 嘉元三三八廿九」

(薩摩)

國入來院内上副田村地頭渋谷弥三郎入道重心謹陳申、
欲早被停止濫訴、且任祖父渋谷五郎三郎入道善心法名秋重嚴

誠遺狀、且就濫訴□彦三郎惟重所進讓狀旨、急被遂押

領界檢見、蒙御成敗、以重心分領村□致自由押領、還

致掠訴、旁招罪科事

副進

一通 親父念心讓于重心狀案弘安十年八月十三日

一通 惟重所進念心讓狀案同 月 同日

右訴狀云、於山口村者、祖父念心以弘安十年載四至仟佰
於讓狀、讓与惟重之条狀文炳焉也、仍知行無相違之處、

伯父重心去弘安五年以來踏越界令押領惟重分領當村内若

于田畠・在家・山野等云々、取證、此條以念心之讓狀、互可

知行之条勿論之處、惟重令押領重心分領之間、雖可訴申、

如曾祖父善心置文・遺誠狀惣領平次郎入道帶之者、界已下相論出來

者、可隨一門之計、於背此儀之輩者、雖有道理、可定于

負云々、仍重心守彼遺誠之趣、一門等可有所談之由、承

諾之間、重心存其旨之處、惟重恐紆曲、猥差違而背彼置

文之誠、無道濫訴之企、招自科畢、所謂如惟重備進念心

讓狀者、讓与福石所仁、丹三郎与副田界北園乃後乃大道

於切天高平次賀道於小萩野惠行道并手乃面惠限留、自其

平野次郎入道賀屋敷并田云々、次句云、自餘惣領方云々、

取證、仍惟重之分四至阡陌令帶念心之讓狀、乍存知之、任

自由打越、即并手面之以東、小萩野乃并手・平野坂道・

栗佐古・平野宮已下田畠・在家等自余名字略之而惟重任雅意

令押領之条、被遂檢見之日不可有隱、所詮依先傍例、且

任置文之旨、被停止自由之押領、為被懲肅惟重之狼戾、

被陳如件、

嘉元三年 七月 日

〇二 渋谷重心代某陳狀案

(端書)

「渋谷弥三郎入道重心代」

(重讓狀)

□

薩摩國入来院内上副田村地頭滋谷弥三郎入道惠心代又三

郎秋□申、

為彦三郎惟重背曾祖父善心遺誠置文旨、不用一門計、

破□讓狀、乍令押領重心分領、致逆訴上者、被遂押

領界檢見、欲蒙御裁許之副田村事

副進

一通 善心置文文永三年二月廿七日辨以下相論出來時者、可隨一門之計、於背此義之輩者、雖有道理可定于負由事

一通 惟重書札五月十四日付嘉元二

一通 繪圖

一通 證人文名注文山崎御堂可寄合由事、

右如惟重之訴狀者、於惟重所進念心讓狀者、重心承伏畢、

以彼狀互可知行□自稱之上者、被遂界檢見之後、被

停止重心押領、任傍例欲宛給打越□不押領惟重分領

之上者、可宛給打越由事、所令庶幾也、同狀云、惟重分

領之山口村內小荻野并井手、平野次郎入道屋敷及屋敷付田

地以下田島、重心□押領云々、此條無跡形大不實也、副

田村内号山口村□之所、全以無之、隨而如惟重所帶讓狀者、

山口村名字一切無所見之處、惟重任自由、如作出山口名字及濫訴之條、眼前今案也、次平野・同宮・栗迫、是又

讓狀無所見之條、子細同前、凡惟重姪謀餘不載讓狀、付

村之名字天被押領重心之由、訴申之上者、早重心所得

讓狀與惟重帶持讓狀御比較之處、彼村之在所不實之條、

立可露頭也、同狀云、背一門評定之間、經上訴之處、被

押領副田村於惟重之由、載陳狀之狀、希代不實也云々、

此條如載先陳、先段被遂檢見之時、不可有其隱者也、次

背一門評定由事、虛誕申狀也、重心者祖父善心置文お令

存知之間、去嘉元二年五月十二日、於那答院内山崎御堂、

可請一門評定之旨令約束之間、重心其日雖罷向、惟重差

違而越伊集院舅許之上者、不用評定之条、惟重所行也、

相貽御不審者、仰交名人、任注文之旨以起請文有御尋之

時、不可有其隱者也、次山口村內押領于重心之上者、爭

惟重可押領副田村哉云々、此條如載先段山口村名字不載

讓狀之上者、押領由事不實也、同狀云、令押領重心分領

者、爭相觸子細不及一門評定哉、將又惟重背一門評定者

不經上訴哉、云彼云此、比與偽陳也云々、此條一門評定

由事、載先段之間不能重言、次比與詞惡口也、重心者雖
 疋弱之身、為惟重伯父也、於加志之詞爭無御炳誠哉、同
 狀云、背念心讓狀致自由押領之間、一門等遂界檢見之後、
 各申云、披見惟重帶持證文之處、理非懸隔也、可和与云
 々、爰和与事、雖令違惟重所存、一門之評儀難默止之間、
 是非可隨計之由返答之處、重心不叙用云々、此條和与由
 事不實也、一門評定事、重心本自令庶幾之間、罷向之處、
 不治定之間、以後日於山崎御堂可寄合之旨、乍令申、惟
 重越伊集之上者、(院脱力)重心不叙用由事、無極虛誕也、所詮惟
 重書札備進之上者、所不及御不審也、次先日押領之外、
 重令押領自余田地云々、此條令押領何田地哉、就差申可
 明申也、惟重打越祖父念心讓狀之界、令押領重心分領之
 間、為塞自科、構申今案不實之條奸謀也、次重心背一門
 評定之條、遂檢見之輩等悉存知也、以起請文為有御尋交
 名注文進覽之云々、此條不背一門評議之條、載先段之間
 不能重言、次界檢見由事、同前、同狀云、小荻野江行路、
 井手面於限之旨、證文炳焉之上者、小荻野・井手面者、
 則為山口村內之處重心乍令押領之、惟重押領之由掠申之

條、不實云、詮取、此條如載先段、副田村內惟重帶持讓狀
 御披見之處可露頭也、同狀云、弥三郎屋敷之久称お切天
 小野河內江行小路お為界之上者、於此界內田畠・在家等
 者、重心爭可懸悵望哉云、詮取、此條惟重越讓狀之界令押
 領之上者、被遂檢見之時可露頭也、所詮惟重者、以胸臆
 浮言被押領之由、訴之、重心以證文、為先、然者胸臆与
 實證宜仰上裁者哉、同狀云、平野次郎入道屋敷与弥三郎
 屋敷中間一段余也、於所差定之界者、旁以為明白之處、
 重心理不盡仁乍致押領、還而惟重押領之由、構申虛誕云
 々、此條如載先陳、先段莅于界、被遂檢見之時、惟重不
 實奸謀可露頭之間、不能委細矣、次惟重所進之繪圖參差
 事、期間答之時、惟重背曾祖父善心置文并祖父念心讓狀
 等、致不實濫訴令押領之上者、早任善心置文之旨、為蒙
 御成敗重被陳言上如件、

嘉元四年正月 日

○三 藏人東宮学士藤原兼綱奉口宣案

上卿 春宮權大夫

曆應五年三月十九日 宣旨

左兵衛尉平重武

宣任左衛門尉

藏人東宮学士藤原兼綱奉

〇六 高城重棟書下

薩摩國入来院内副田村事、可有御知行候也、恐々謹言、

建武五年七月十七日

重棟

(花押)

〇四 山口静心惟着到状

澁谷彦三郎平惟重法名静心今月廿日馳参御方候畢、以此

旨可有御披露候、恐惶謹言、

〔元弘参〕九月廿五日

沙弥静心

進上 御奉行所

(ハリ紙)

〔此重棟トハ高城河内權守重棟ト云、鎮西評定ノ人、重棟ヨリ四代ノ

祖重貞、落合六郎ト云、高城ト号ス、重貞ハ定心ノ弟也〕

〔山口平次三郎トハ重武妙安道號弓人ノ夏也〕

〔承了〕
(足利尊氏)
(花押)

〇七 山口重音讓状

讓与 子息弥三郎厚重所

薩摩國入来院上副田村内柳田壹町

并屋敷同前箇在家一字事

右於彼所領者、為重音重代相傳之所領之間、相副調度文

書、限永代所讓与也、四至堺者見本證本、仍讓状如件、

觀應二年卯月廿一日 平重音 (花押)

〇五 足利直冬感状

於國致忠節之上、馳参候条、尤神妙也、弥可抽戰功之状

如件、

貞和七年五月廿五日

(足利直冬)
(花押)

澁谷彦三郎殿

(ハリ紙)

『此重音とハニ代彌三郎政重、法名重心ノ一男ト相見得、子息彌三郎
厚重ト有リ、政重重心ハ家督トハ相見得不申、此讓状者家ノ讓状ニ
テハ無之、子孫厚重弥三郎迄ニ而不相見得候、政重ハ他腹等ニ而も
候也、可礼事』

〇八 山口重経讓状

讓与 子息伴左衛門尉重増所

薩摩國入来院上副田山口□

田数二町七反

一前箇在家一字事

一久木箇在家一字事

□春□箇在家一字事

一田嶋在家一字事

并屋敷

一山口に孫四郎居屋敷

一左衛門四郎屋敷

一五郎九郎屋敷

一はね田彦五郎屋敷

一二牟礼屋敷 二ヶ所

一市ノ後屋敷 二ヶ所

明應九年庚申十月十九日

平重□(經)

〇九 山口重経讓状

讓与 子息伴左衛門尉重増所

薩摩國入来院之内上副田之村之内

一前箇 一字事 一町

一久木箇 一字事 六反

一并屋敷 一ヶ所 はゝのその孫四郎

一屋敷 一ヶ所 同所左衛門四郎

一屋敷 一ヶ所 山口之助八

一屋敷 一ヶ所 原口九郎三郎

一屋敷 一ヶ所 はね田之四郎三郎

南方否之留之内

一春の箇 一字事 一町五反

西方市比野村之内

一 百寿久 一字事 二町三反

一 上野 一字事 四反卅

一 并屋敷 一ヶ所 上野兵衛三郎

一 屋敷 一ヶ所 上篠原六郎兵衛

一 屋敷 一ヶ所 下篠原助七

一 屋敷 一ヶ所 中篠原八郎兵衛

北方中村之内

一 田嶋 一字事 一町九反

一 一反卅 風呂前

一 一反 あらひら

一 卅 なみさこ

一 卅 もり田

以上うきめん四反

薩摩郡山田村内

一 ほとりの内 一字事 一町二反

一天辰郷川 一字事 五反

清敷麓

一 二牟禮屋敷 二ヶ所

一 屋敷 一ヶ所

一 屋敷 一ヶ所

一 屋敷 一ヶ所

十日市後、今ハ犬馬場也、

島中之彦五郎

同市後

同所右衛門三郎

堀之内麓壽昌寺前

うきめん

一 一反十 わらふた、市比野城之下

一 二反卅 ふねかさこ、同

一 一反 中へうの下副田

一 一反廿 大將軍田

一 十 はしか谷

一 大いとり

一 廿 松かさこ

一 十 □しむた

一 二反卅 桑木丸

一廿 柿木の丸

一十 とひかけ

一一反十 平野之下

一冊 めくりかうと

一一反 うちの田

一三反冊 三反田

一四反 つふき田

一三反 上井、野いねの原

一一反 ひのくち 二舛まき丸せまち

一三反 なり田

以上三町一反

門八

屋敷拾四

惣以上拾参町四反

一文書

文亀元年 辛酉十二月廿二日

山口勘解由重經（花押）

〇一〇 入来院重頼書状

懇令啓候、就之^{〔其次第カ〕}別も未道行候、如御存知

令^{〔探題〕}探題へれうそくまいらせ^{〔たてのたんへつ〕}たてのたんへつこの

と^{〔いそぎ給下候へく候、御〕}いそぎ給下候へく候、御^{〔あしの事、御そん〕}あしの事、御そん

ち候あひ^{〔たカ〕}くわしく不申候、同庄^{〔たちの御方へ仰候〕}たちの御方へ仰候

へく候、無^{〔いられ候へ、承候て催促〕}いられ候へ、承候て催促^{〔候、返々さ〕}候、返々さ

きたての田別^{〔ととも〕}ととも疾給候へ、為悦^{〔恐々〕}、恐々謹

言、

十月廿日

重頼

山口殿

（墨引）

山口殿

(ハリ紙)

『此文面、探題へれうそくとへ貫之事と相見得候由、安政二年卯八月五日入来院家ニ而文書一覽之砌、拙者とも此卷持参ニ而、伊地知小次郎殿へ一覽ニ入候処ニ、貫一件之書状之段承申候間、張紙いたし置候事、

但、重頼とへ入来院家七代彈正少弼重頼とト云、

法名松山義秀庵主天福寺、永享元年己十月九日卒』

〇一一 山口氏系図

入来院氏庶流

山口氏

平姓渋谷之族入来院氏之庶流山口氏之元祖平太篤重者、
入来院二代三郎明重三男也、自元祖篤重至重通及支流、
件^(符カ)件系之加證判、附与之畢、至子孫無窮宜爲家藏者也、
元禄三年庚午六月十四日

入来院氏二十代

志摩之助重堅(花押)

二代明重入道善心三男

△篤重

或重貫平太 法名念心

政重

彌三郎 法名重心

△重次

孫三郎 早世

重宗 — 成重 — 彌陀熊女

平三郎 — 平太郎

重音 — 厚重

又三郎 — 弥三郎

女子

数重

又五郎

△惟重

號山口彦三郎 法名淨心

○弘安十年受祖父念心之讓、領山口村^{副田}之内、以故

號山口、

○建武以來屬將軍方、數抽戰功、

敦重

○於南方戰死、

重妙

鶴丸彦三郎

○於舟木戰死、

△重武

平次三郎 左兵衛尉 左衛門尉 法名妙安道

號弓人

○建武以來數拔軍功、以故曆應五年三月十九日、
被任左衛門尉、

△重幸

新左衛門尉 法名宗見

重成

四郎 越後

△重友

筑前守 法名宗照

重尚

號鬼原左馬助 法号養庵道育

△重仁

四郎左衛門 法名妙觀

重邑

平太次郎 法諱無言圓道

△重家

木工左衛門 筑前 戒名定善

重松

新左衛門 法名淨善

重位

平左衛門 肥前

元重

平太次郎 法名徳叟昌永

重能

助右衛門 法号昌心淨久

重長

民部左衛門

△重經

〔山口駿河守重經、文龜三年〕

○妻法名真幸大姉、

○文龜元年辛酉十二月廿二日卒、法名齡叟菊公居

士、

重根

木工左衛門

△重増

伴左衛門 筑前守 法號淨慶禪門

○文龜元年辛酉十二月廿二日、受父重經之讓、領

所領十三町四反門八、屋數十四

○妻法号妙金大姉、

△重昌

將監 法名了乘

○(考)享祿三年庚寅二月廿五日、於百次善能寺口戰死、

○妻法号妙英大姉、

重張

長門

重行

越中

女子

甌島小河偽釣入道妻

重利

武藏

△重秋

筑前守 法諱淨本禪門

○天正八年庚辰十月十五日、

太守公使諸將攻取肥後八崎城、時重秋爲入來院家之軍代、率士卒勳戰功、其外之軍功許多也、

○妻法号妙秀大姉、

△重福

半右衛門

△重能

筑前 新兵衛 法名道盛

寛永十八年辛巳十二月六日、病死、行年六十五、

重正

甚兵衛

女子

種田權兵衛妻

重良

重宗

伴右衛門

甚介

△重保

菊次郎 清左衛門

○母東郷次郎左衛門重娘、

○寛文五年乙巳十月十九日病死、享年六十一、法

号性屋等智居士、

女子

四位治部左衛門鶴田之士妻

重次

千松 新次郎

女子

稻垣市之丞妻

早次郎

○相續相良家、

△廣重

半助 五郎右衛門

(後略)

○母相良石見入道常久娘、

山門文書

〇一 征西將軍宮令旨 (小切紙)

(押紙)

「守護人御奉書」

正平六年十一月廿七日

修理權大夫 (花押)

山門彦七郎館

〇四 平秀忠讓狀

馳參御方可致軍忠、有忠功者、早可有恩賞者、 征西大

讓与

將軍宮御氣色如此、仍狀如件、

薩摩國山門院内針原村田畠・荒野并屋敷市来崎

正平五年四月廿五日

勘解由次官 (花押)

〔〕 藪二ヶ所、水田高柳北夜中桓元事

山門彦七郎館

舍弟平五

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二二二一八号文書ト同文ナリ)

〇二 足利直冬書下 (小切紙)

為奉息兩殿御意、既所打立也、急速同心輩相共、可致忠

節之狀如件、

貞和六年九月廿五日

(足利直冬) (花押)

山門七郎殿

如件、

建保五年三月五日

平 (花押)

〇三 征西將軍宮令旨 (小切紙)

馳參可致軍忠者、依 將軍宮御氣色、執達如件、

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二二四号文書ト同文ナリ)

○五 道性所領注文

▽^⑩ 心さしあるにて六郎衛門ニ相續之所

一へき雲寺代官職の給分足の支

一田畠の間

一前田一鶴の上下一國ニ

一おひ田 一さしけのさこ

一たぬき穴 一宮之前同宮の後

一梅のさこ 一なへ田の苦河（苦河）

一たにの口 一かうか崎 一油地

一松のさこ 一三十田 一鳥こへのほり町

一畠之次第 一小畠 一かみのかわら

一池上の畠 一時漂の原の畠

一なへ田の畠 一いやしき

文安（丁之）二（卯歲）稔十月吉日

道性（花押）△

於子孫まくのもん、

舞（カシマ）たる鶴（カシマ）ニ勝草（カシマ）ヲ

マクノ紋ニスルナリ、

平治年中薩摩州下向、

「道性」
光兼（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編」二一三二六号文書ト同文アリ）

○六 道惠讓状

ゆつりあたふ 彦七郎殿所

さつまの國山門院東方高小野里田地事

合小長田五反卅定（四至者）やなきをうへらるへし、

右田地ハ、道惠重代さうてんの所領也、而彦七郎殿秀雄

あさからさる心さしあるにて、永代をかきりて、ゆつ

りあたふるところ也、たゞし國カ・リやうけの御年貢以

下の御公事等にをいてハ、そうりやうのかゝ委にして、

きんしすへき也、若道惠か子々孫々の中に、かの田地に

いらんをなし、けいはうをいたさんともからにをいてハ、

道惠か子孫として、ゆつる所の所領をちきやうすへから

さる物也、仍為後日ゆつり状如件、

康永二年八月三日

道惠（花押）

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三〇四号文書ト同文ナリ)

〇七 家貞証狀

薩摩國山門院東方高小野里内小長田五反卅事
をやにて候道惠之手より、市来崎彦七郎殿方に、かの田
地を御さうてんのよし承候了、仍為後證之狀如件、

康永四年八月三日

家貞(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三〇三号文書ト同文ナリ)

〇八 しやうしん宛行狀案

まさとみ名のうちのとうゆ田のつほ付事

合

五反 ぬまくち しやけニさる

五反 やなき田 一丁 下しろいし 二反上ニあり、

右、付坪ニまかせて知行あるへく候、仍坪付如件、

かけん三年五月十六日

沙弥しやうしん 在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇八六号文書ト同文ナリ)

〇九 沙弥行念讓狀案

本正文事

付本名田同奉讓

八幡新田宮御燈免田壹町伍反元二丁、相具候次第證文、
限永代、字羈王殿所讓与實也、但有限御燈役并宮方公
事、准傍例、可令勤仕欵、仍為後代證文、所讓与如件、

延應元年十一月九日

沙弥行念在判

為證人一家加署之、

紀正元在判

紀正恒在判

紀正友在判

紀正光在判

依讓狀明白、加署之、

惣地頭并守護所代僧在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二四〇二号文書ト同文ナリ)

〇一〇 鎮西下知狀案

遠江守御下知案文

山門弥宗太法師法名如善代子息種友申、新田宮燈油免田、薩

摩国宮里郷正富名内田地壹町五反事、 右、如申狀者、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」二〇四二号文書ト同文ナリ〕

帶代々燈文等、當知行無相違之處、下野前司入道道義扶
持人宮原太郎入道蓮心、致非分押妨之上者、可被停止彼
違乱云云、仍可催進蓮心之由、兩度雖被仰、道義無音之
間、仰下總權守重雄尋問違背実否之處、如重雄執進文保
二年十一月二日道義請文者、新田宮燈油免田事、任御教
書之旨、相觸候之處、論人宮原太郎入道蓮心代子息正光
請文如此云云、

文保二年十一月二日

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」二二四四号文書ト同文ナリ〕

〇一一 妙義讓狀

讓与 嫡子二郎太郎所

薩摩國山門院内城入道屋敷并西桃木田五段事

四至堺者見本證文

右、田・屋敷等者、妙義重代相傳私領也、然者、相副次
第證文等、限永代讓与訖、有限地頭所役者、任先例可勤
仕也、仍讓狀如件、

曆應二年五月十日

妙義(花押)

〇一二 某讓狀案

▽⑩

(口裏)

「たいらの彦六へゆつり状案文」△

ゆつりあたふ子息彦六所

薩摩國山門院東方田畠事

一 高橋里 口坪四段廿

つか原九段

むくの木丸六段

かわら田貳段

今新開貳段卅

上平牟田貳段廿

一 高小野里窪田七段

已上參町參段廿定

一 高小野やしきの事

但往古より坪定間
四至をさすニをよハす

東限 立きゝの御前道

四至 南限 田ふちのはたけのまへ

西限 五郎太郎入道給分内田成の給分、同

西かきね、北南ニすくにとほす

北限 古はゝのかきねのまへ

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三二五号文書ト同文ナリ)

〇一三 平家高讓状

奉讓与

薩摩國山門院三百五十丁、限永代山門六郎當知行不有相(可脱カ)

違、於末代奉讓与所也、可為子々孫々之地也、仍執達如

件、

正平元年三月廿八日

平家高 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三二二号文書ト同文ナリ)

〇一四 孫二郎証状

薩摩國山門院東方高小野里内小長田五段卅并小山田八段

卅事

祖父にて候道惠の手より、市来崎彦七郎殿方に、彼田地

を永代御相傳之由承候了、仍為後證状如件、

貞和六年四月廿九日

孫二郎 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三二九号文書ト同文ナリ)

〇一五 伊予守某書下

薩摩國山門院之内針原之内号高柳 卷町三反、柚木田五反、市来崎

之内藪老ヶ所等事

可付沙汰市来崎彈正忠之状如件、

明德五年卯月九日

伊予守 (花押)

楠橋對馬守殿

設楽駿河守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五三三号文書ト同文ナリ)

〇一六 家重・家高讓状

ゆつりあたふ

さつまのくに山とのみん(東)ひん(方)かしかたたたかハしのミヤウ

てんちの事

合 今新開參段定、但さかいにハ、やなぎをうふる、

右てんちハ、家高しんふ道恵のゆつりをゑて、たうちぎやうさういなし、しかるに(市来崎)いぢくさぎのひこ七郎殿あひしたしきうゑ、心さしあさからさるに、ゑいたいをかきてゆつりたてまつるところなり、かのところハ、もとより御(公事)くうしか(万雑公事)らさるうゑハ、まんさうくうし、り(臨時)んしのくわやくに(向)をいてハ、一かうとよめて、しよせん(知行)く(知)にいたるまで、ゑいたいさういなく、ちぎやうあるへく候、仍為後日ゆつり状如件、

文和四年二月廿九日

家高(花押)

家重(花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編」二二五七六号文書ト同文ナリ)

〇一七

島津道鑑貞書下

南方凶徒等、引合于和泉・牛屎賊徒、可寄来當城之由、有其聞、剩去七月十日將軍家御教書如此、早任被仰下之旨、馳寄于當城、可被致合戰也、仍執達如件、

延文元年十月九日

沙弥(道鑑)(花押)

市来崎彦七郎殿

(本文書へ「旧記雜錄前編」二二六三三号文書ト同文ナリ)

〇一八 一色直氏宛行状

薩摩國日置内恒吉名田地陸町・同所若松田地陸町地頭職事、為勲功之賞所宛行也、早守先例可致沙汰、仍執達如件、

延文二年五月十九日

(一色直氏)右京大夫(花押)

市来崎彦七郎殿

(本文書へ「旧記雜錄前編」二二一八号文書ト同文ナリ)

〇一九 秀貞讓状案

譲与 熊松所

薩摩國山門院古城園老所事

一 古城四東限田縁至西限川路之道通 南限田縁北限城之中道通

一 宮郷田老町五反内 下白石老町内貳段

一 高小野名内太郎丸作參段 四至者見本證文

右田・屋敷等、為親父妙義禪門之讓、無當知行無相違、然間、限永年讓与熊松丸畢、致子々孫々無相違可領知也、仍讓狀如件、

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二〇四三号文書ト同文ナリ)

〇二〇 秀貞讓狀案

讓与 熊松所

薩摩國山門院高小野名内太郎丸作參段事

右田地者、秀貞相傳之間、無當知行無相違、然間熊松讓与處也、但御公事等者、本證文明白之間、不及注之、任此讓狀、致子々孫々永代無相違可領知也、仍讓狀如件、

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二〇四四号文書ト同文ナリ)

〇二一 山門院地頭兼惣郡司代盛秋和与狀

和与

薩摩國山門院内西桃木田地并城蘭等方々御季貢以下

所役對捍事

右、云國衙・領家乃貢、恒見・宮富神用米、書生・定使

得分、云石築地・楯・旗用途、永仁貳季以来、一向對捍之間、及上裁、雖番訴陳、以和与之儀、所經替未済・對捍物代仁被出驚眼拾結候之間、請取之、止沙汰候早、但自當年^{德治}貳^貳者、有限於應輪所役等者、每年無懈怠可被并勤候、仍為向後和与之狀如件、

德治貳年七月廿七日

山門院地頭兼惣郡司代盛秋(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二〇七号文書ト同文ナリ)

〇二二 沙弥性慶讓狀

讓与

薩摩國山門院之内市来崎村^{同北園}
^{同國新園}

一所 西桃木田五反

一所 垣本六反

一所 高柳一町

一所 北夜中田一町

一所 針原之門三町同浮面一町三反

同荒野居敷等

かさねての御おんの事へ、御心さしによるへく候、

一はく路の事

しもたかうのに三反

なかせう路ニやしき四か所^田四反

上原のさい所、これ又へつしてとしよりあつかりて候、

末代のさい所たるへく候、

龜^大太郎丸ニゆつりあたへ候、仍為後状如件、

文安六年^{つちものとの}二月九日

平能登守家教（花押）

又おうくほみそゝへ三反

すかむた三反

井てのすミ三反 ひらき二反 合五反

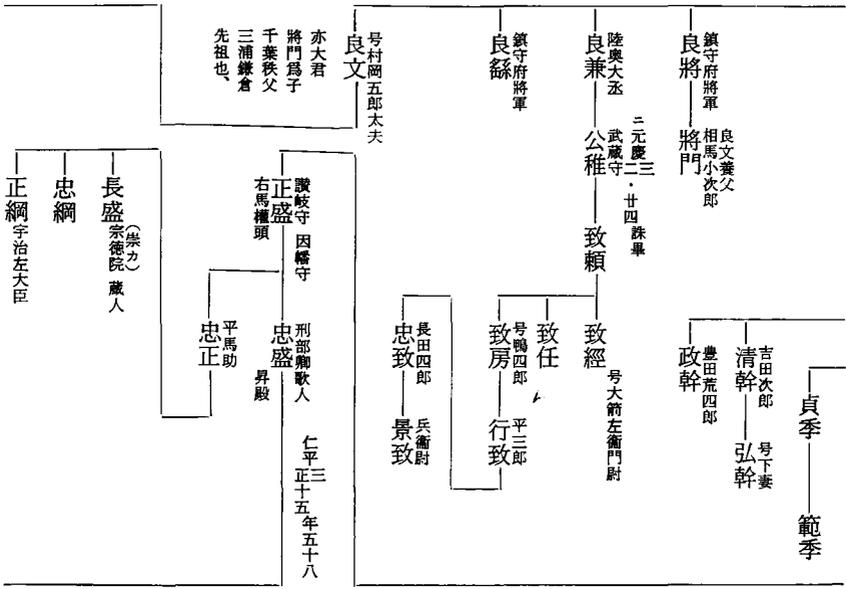
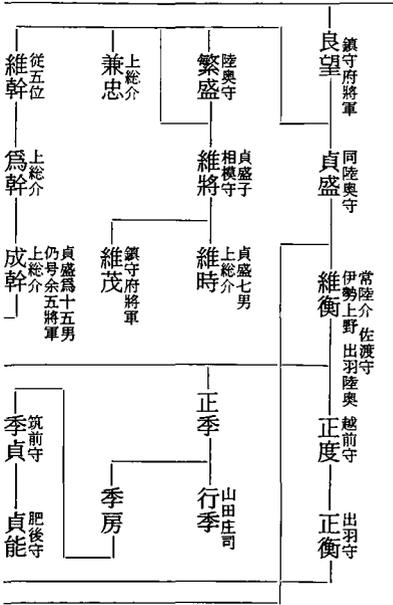
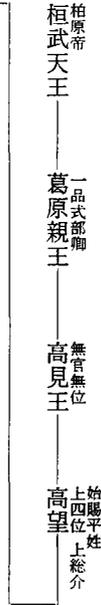
はく路しもたかうの山下一か所

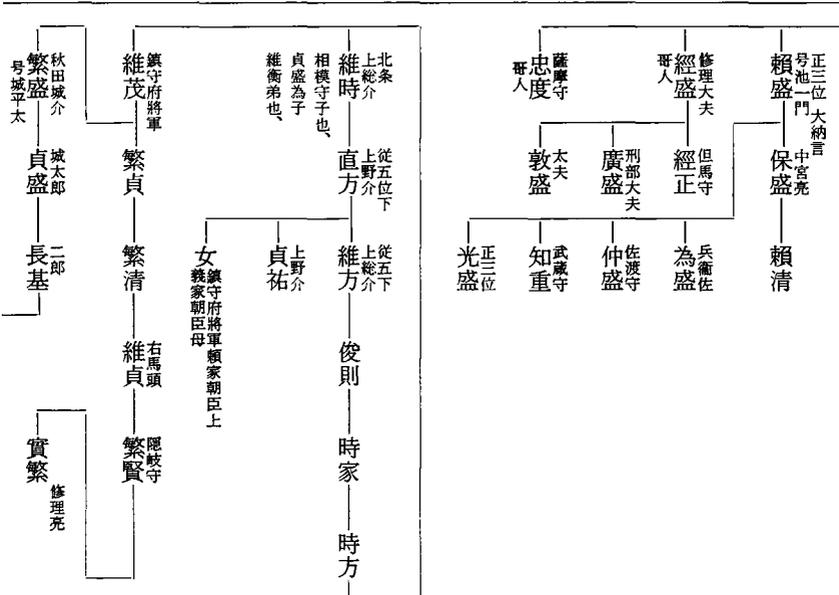
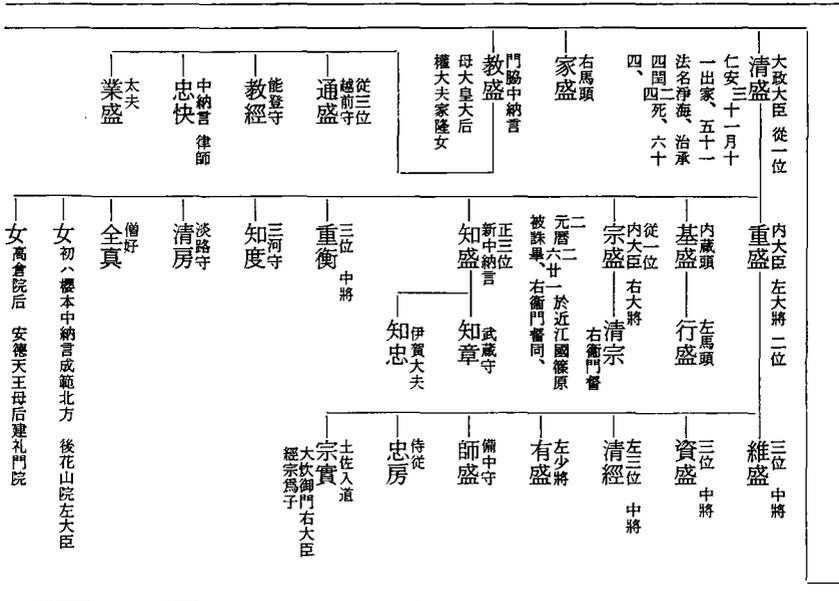
（本文書ハ「旧記雑録前編二二一三四号文書ト同文ナリ」）

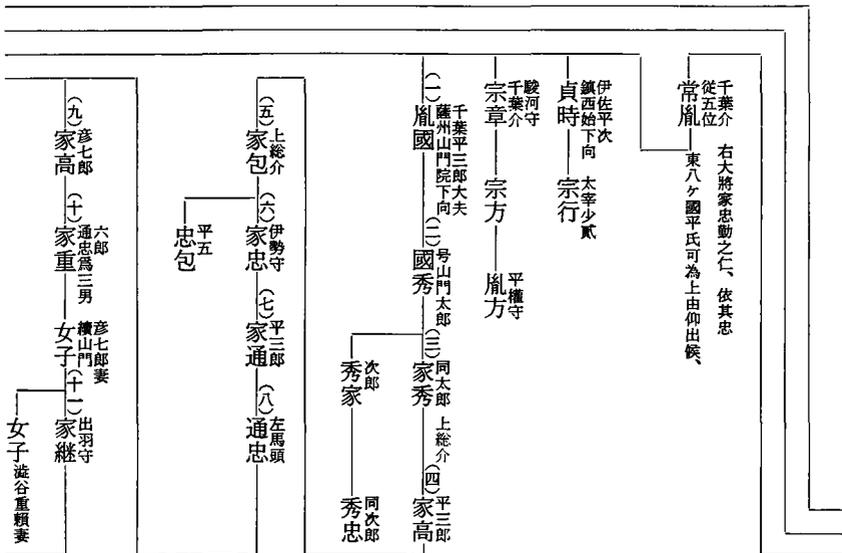
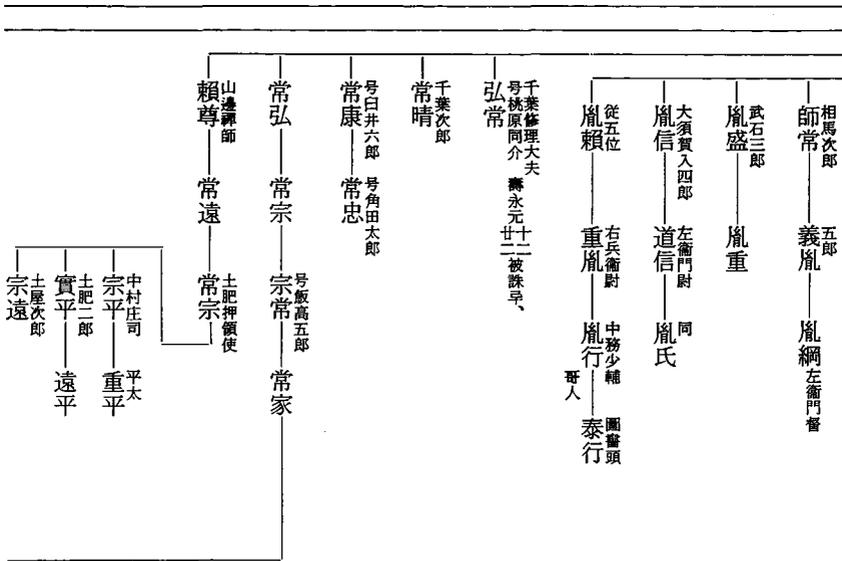
〇二五 山門氏系図

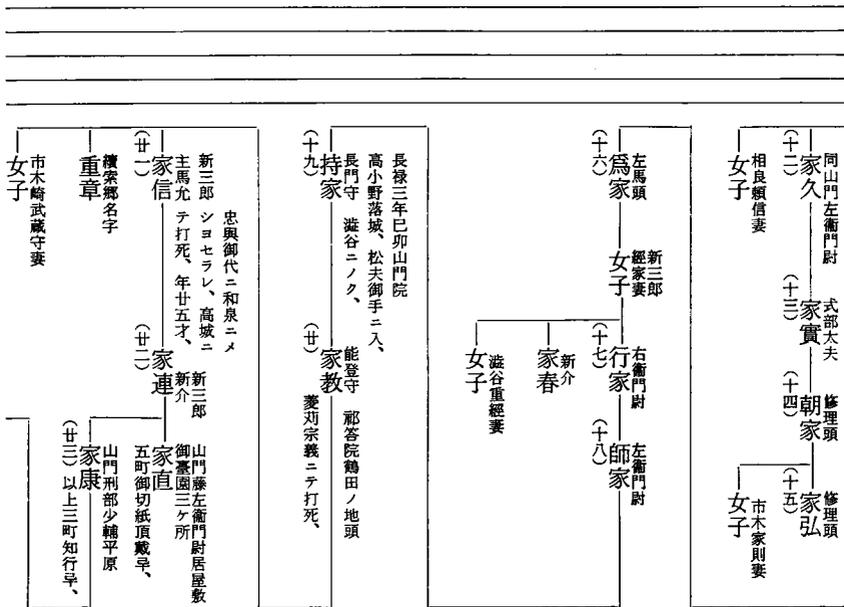
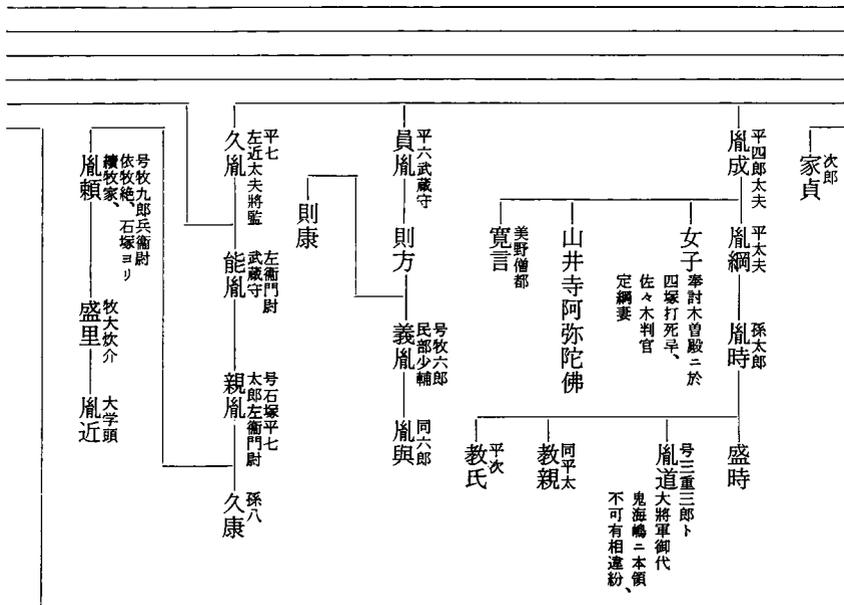
桓武天皇第五十代光仁天皇第一ノ御子、四十五ニテ位
 ニツキ玉フ、治廿四年、七十才ニテ崩御、陵墓大和國
 柏原ノ宮ニアリ、都ハ奈良ノ宮ニラフシマス、又ハ長岡
 ノ宮ニモアリ、平氏ト申スハ、此ノ御門ノ末孫也、

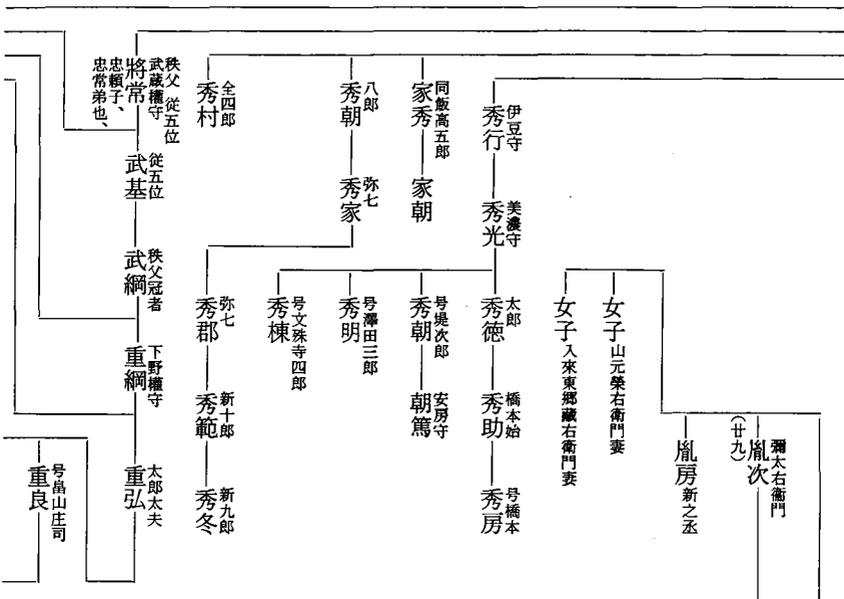
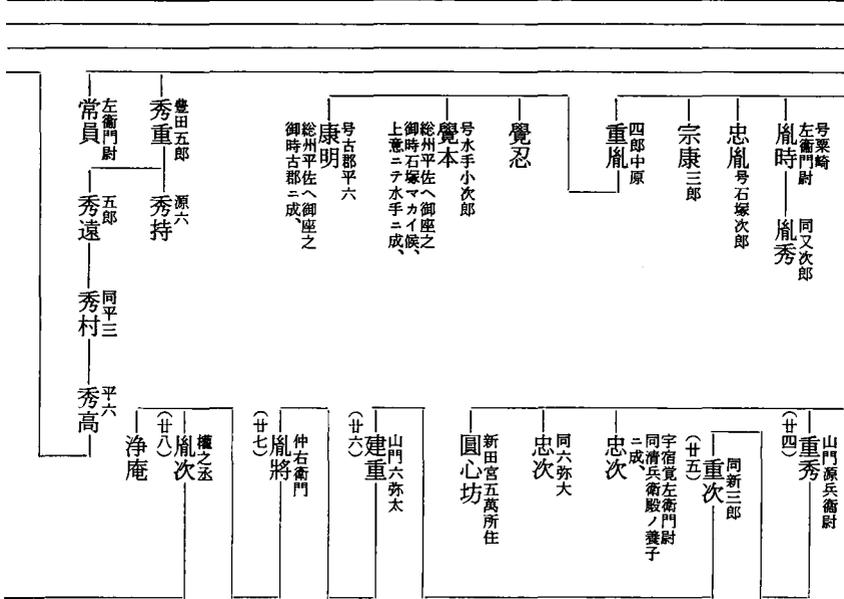
平氏

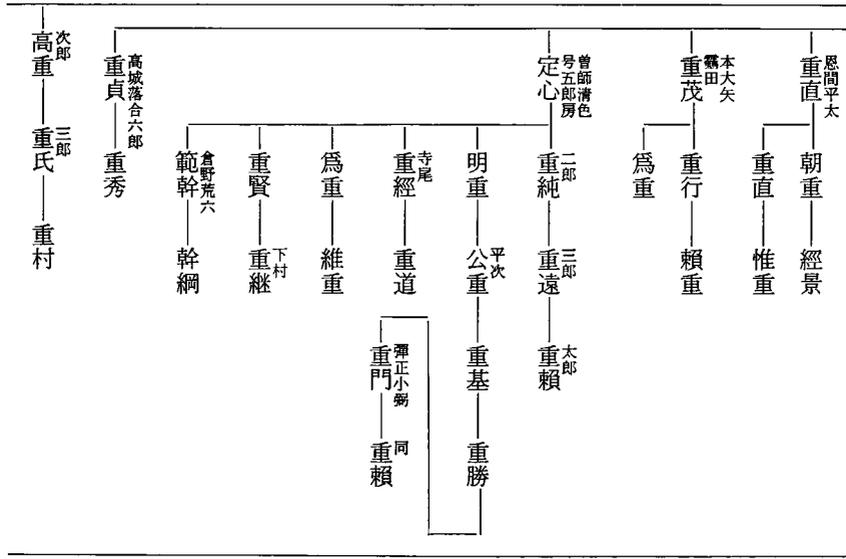
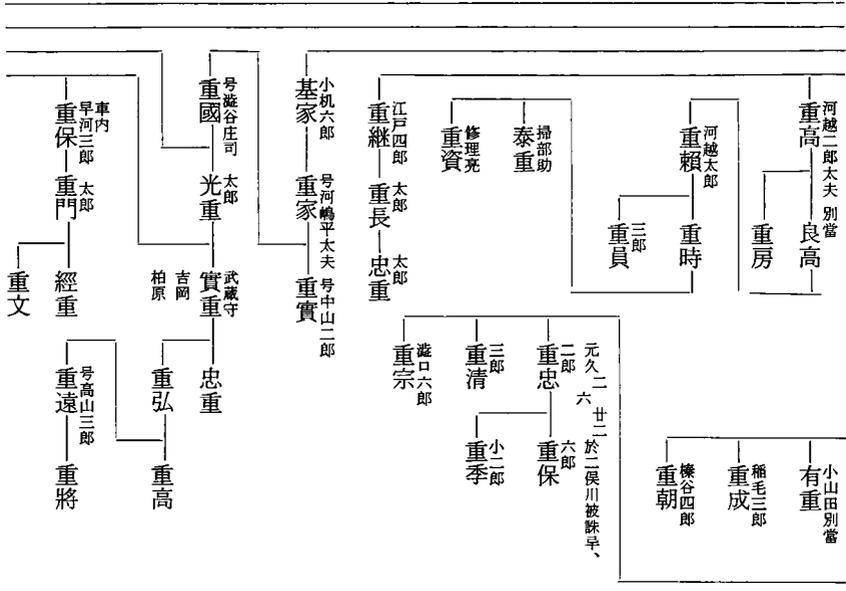


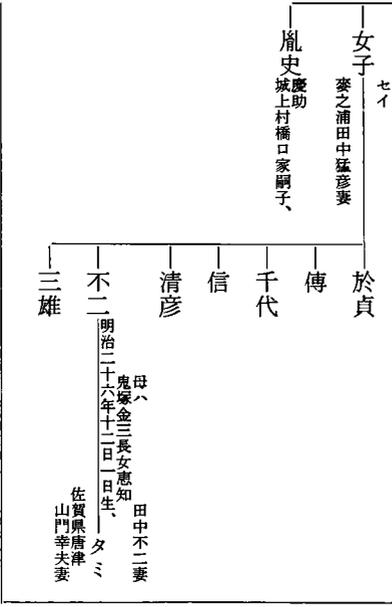
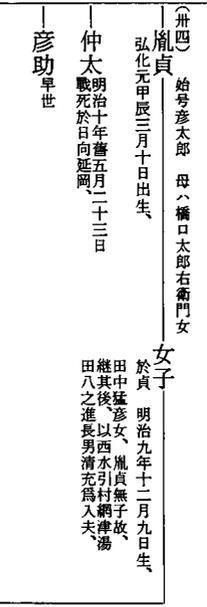
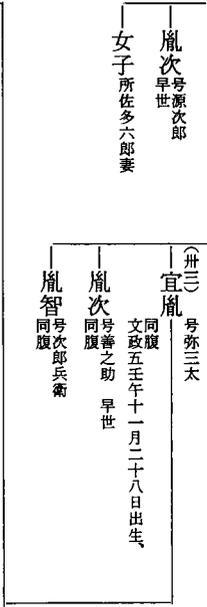
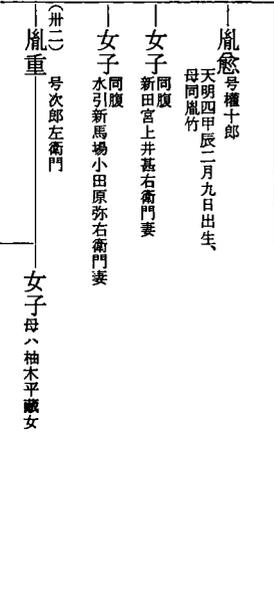
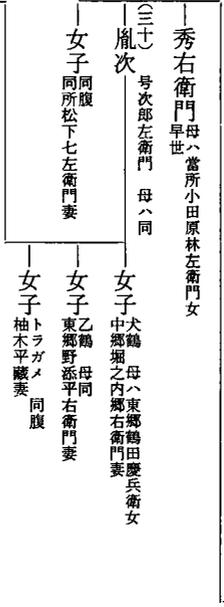
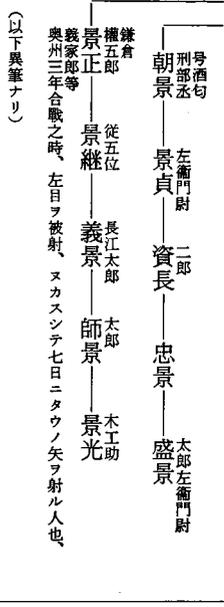


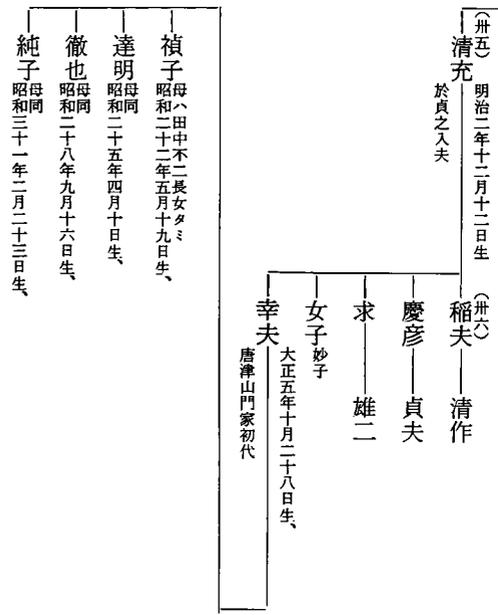












〇二六 大隅・薩摩国古城主来由記

大隅國肝付郡

肝付八郎兼重

右、先祖河内守兼俊以来、代々肝付郡領主也、

尊氏將軍之時、兼重奉属 宮方故、守護上總入道鑑公（道範之）

御代、可誅伐兼重之由、將軍家御感狀數多有之、

大隅國加治木

加治木能登守

右、先祖藤宰相經平卿、

忠平

一条院御宇、寛弘年中、流人下向于加治木、其時本領

主大藏 良長為聳加治木相續也、

經平卿ヨリ忠平十八代之孫也、應永十七年守護 元久

公御代、於京都將軍家義持卿ヲ招請元久宅、此時嶋津

國方謁 義持卿、于時被任命登守、

大隅國蒲生

蒲生美濃守清寛

右、先祖上總房舜清、鳥羽院御宇保安年中、初下向于

下大隅府、守垂水城、後為蒲生院城主、代々相續、舜

清より清寛迄十五代之孫也、應永年中為嶋津國方、謁

將軍家義持卿、于時被任命美濃守、

大隅國菱刈

菱刈大和守重次

右、先祖宇治左大臣頼長之孫重妙、為菱刈院城主、代

々相續也、重妙より重次迄拾一代之孫也、守護勝久公

御代菱刈城主、

大隅國帖佐

肥後房良西

右、先祖平氏太夫判官重成公之末流也、 忠久公御存

生之比迄ハ良西存生、平田氏先祖共いえり、不詳、

大隅國帖佐

帖佐太郎信宗

右、先祖四位少將資盛之曾孫伊与房時盛初下向、其よ

り以来代々田代之領主也、守護元久公之御代、三ヶ國

為大將軍元久公御名代にて、探題参上、於川邊遂戰死、

大隅國祢寝

祢寝山城守重清

右、先祖四位少將資盛之曾孫伊与房時盛三男祢寝三郎

成盛之末流也、祢寝領主重清者、守護忠國公御代居住

之人也、田代一族、

大隅國佐多

佐多太郎久秀

右、先祖伊与房時盛嫡男佐多太郎存盛之流也、於宇治

川遂死戰、此久秀也、佐多断絶也、

大隅國横川

横川藤内兵衛

右、先祖平基盛公之末流、横川城主之後たり、不詳、

守護道鑑公御代、藤内兵衛隅州居住之人也、

大隅國曾木

曾木彦太郎重茂

右、菱刈一族、守護道鑑御代、曾木領主居住、

大隅國廻

飢肥伊豆守

右、先祖頼政子兵庫太郎頼直流、源頼政公嫡流也、代

々廻之城主也、守護元久公御代、應永年中上洛、為島

津国方謁將軍義持卿、于時被任伊豆守、

大隅國敷根

周房
土岐左衛門尉

右、土岐始之元祖也、国房代ニ隅州下向、為敷根領主、

子孫代々相續也、

大隅國祢寝

祢寝小太郎義明

右、父ハ祢寝長谷四郎太夫と云、壽永二年癸卯六月一

日、北陸道篠原合戦遂戦死とあり、忠久公無御下向以

前ニ下向にて、領祢寝邊欵、

大隅國大始良

大始良六郎時義

右、祢寝小太郎義明曾孫也、大始良弁濟使、

大隅國串良

平田右馬助重宗

右ハ、元久公御代、應永之比、重宗串良城主也、為島

津國方謁 將軍從家義持卿、被任右馬助、

大隅國鹿野屋

鹿野屋周防助

右、肝付姓庶流也、守護 忠昌公御代文明之比、鹿野

屋領主、

大隅國曾於郡

税所助敦秀

右、先祖上古霧嶋為税所職下向と見得たり、從其以來、

為城主子孫代々相續也、守護忠宗公御代居住之人と見

得たり、

大隅國姬木

姬木十郎

右、姫木之城主、大中臣姓之人也、守護久豊公之時居

住欵、

大隅國守護代

行重
森三郎次郎

右、平姓之人也、守護道鑑公時、元弘・建武之比居住

之人也、將軍家御感状数多有之、

大隅國御家人

隆儀
菊池左近次郎

右、守護道鑑公時、隅州居住人也、先祖不詳、

大隅國

志々目藤藏

右、祢寢・大始良一族之人也、守護忠國公之時、穴目之領主ニ而、隅邇居住人之欵、

大隅國時部名

時部次郎重能

右、忠久公御代、時部名領主、先祖不詳、

德邊名之事を上古時部と唱欵、

大隅國德邊名

德邊入道 正中

右、元久公御代、應永之比、德邊領主也、先祖不詳、

大隅國馬越

馬越太郎隆氏

右、先祖三郎坊相印重妙、菱刈姓嫡流と見得たり、守

護忠宗公時居住人欵、

大隅國清水

本田信濃守 元親

右、元久公時、清水城主也、先祖平家氏族安房押領使

信濃守親幹也、

大隅國牛根

牛根兵衛五郎道綱

右、道鑑公時、曆應之比ハ莫祢氏隨身、莫祢次郎成長

(道脱カ)入道圓也、為良從有戦功、先祖ハ牛根領主と見得たり、

由緒不分明、

大隅國種子嶋

種子嶋左近將監 時光

右、忠宗公時居住人欵、代々種子嶋領主也、先祖平家氏族基盛公孫肥後守信基孫也、

大隅國

小濱十郎

右弟、道鑑公之時居住人也、先祖不詳、

大隅國

柿木原太郎 左衛門 入道圓佛

右、氏久公御代嘉曆比、大隅菱刈院居住と見得たり、

於處々有戦功、先祖不詳、

大隅國菱刈郡内得光名

得光孫五郎 兼保

右、氏久公時嘉曆比、得光領主と見得たり、由緒不

分明、

大隅國

永池藤平重則

右、嘉曆比居住也、先祖菱刈氏也、

大隅國

平良小次郎重世

右、嘉曆比居住、菱刈一族、

薩摩國鹿兒嶋

矢上左衛門五郎 高純

右、先祖藤原純友、飢肥・櫛間・南郷弁濟使職

越前守直純之末流也、從上古為鹿兒島郡司守東福寺城

云り、曆應之比、鹿兒嶋楯籠催馬樂城、振逆威故、守

護 道鑑公加退治、讓鹿兒嶋郡氏久公、

薩摩國川邊 川邊平太道綱

右、先祖平家氏族伊佐平次貞時之末流也、道綱祖父道

房之舍弟為忠景被討時、道綱父平次郎道平三歳之時、

就母方之縁落下豊後国、其後下向薩州而為川邊領主也、

此道綱ハ頼朝公之時、薩州居住と見得たり、

薩摩國谷山 谷山五郎資忠 法師覚信

右、先祖伊作平次貞時之孫別府五郎忠明五代之孫也、

守護 久經公之時、谷山領主ニ而居住人也、弘安年中、

鎌倉御下文ニ谷山之郡司資忠と有、

薩摩國頼娃 頼娃五郎忠長

右、先祖伊佐平次貞時也、頼朝將軍之時、建久之比、

頼娃郡司平忠長とあり、其後頼娃之城主他家之人欵、

守護元久公之時、應永之比、頼娃領主憲純とあり、是

ハ藤姓之人と見得たり、

薩摩國伊作 和田八郎親純

右、先祖藤原純友舍弟遠純之末流也、建久ノ比伊作城

主欵、居住と見得たり、此以前、伊作本領主平氏流良

道とあり、此家より親純ニ伊作を讓渡とあり、其後守

護忠宗公舍弟三郎右衛門忠長、為伊作本地頭、

薩摩國阿多 阿多四郎宣澄

右、頼朝將軍之時、建久比、阿多郡司也、谷山郡伊

作・日置宣澄領と見得たり、此人ハ平家謀反ノ時、張

本と旧記ニ見得たり、先祖不詳、藤原姓純友之弟遠純

之一流欵、

薩摩國 阿多四郎忠景

右、先祖平家氏族伊佐平次ノ流也、忠久公御下向無

キ前ニ阿多領主也、薩摩國信純・阿多四郎忠景とあり、

信純ハ阿多四郎宣澄事なるへし、同時代ノ人なり、宣

澄、忠景尊なる故、阿多を讓渡、令領知欵、

薩摩國指宿 指宿五郎忠光

右、先祖頼娃郡司平ノ忠長也、建久之御下文ニ指宿五

郎とあり、守護 久豊公時、指宿之城主良氏守之とあ

り、此者他家の人と見得たり、

薩摩國伊集院 伊集院入道僧高清

右、忠久公 御下向なき以前よりい十院郡司也、先祖

不詳、建久之比、御下文ニ伊集院郡司とあり、

薩摩国日置

小野太郎家綱

右、頼朝公より給日置庄地頭職、薩州居住之人也、郷

田姓先祖也、文治之比、日置庄本地頭重澄と之あり、

是ハ郷田氏ニ而無之、他家之人歟、

薩摩国

日置弥太郎忠純

右、先祖不詳、守護 忠宗之時、正應之比、日置無地(注カ)

頭下司職ニもあり、

薩摩国串木野

串木野太郎忠行

右、守護忠宗公時、正應比、串木野城主之居住と見得

たり、先祖伊佐平次貞時流、

薩摩国薩摩郡

薩摩太郎忠友

右、 忠久公以前より薩摩郡司職也、建久之御下文ニ

薩摩太郎とあり、伊作平次貞時流、

薩摩国上野

上野太郎忠将

右、 忠宗公時、正應比、上野城主と見得たり、今百次

之城也、伊佐平次貞時流、

薩摩国永利

永利中務丞兼光

右、道鑑公之時、永利城主之居住と見得たり、先祖不

詳、今山田之城歟、

薩摩国知覧

知覧院忠世

右、道鑑公之時、知覧郡司也、先祖伊佐平次貞時流、

薩摩国給黎

頼娃三郎忠長

右、頼朝公以来(弘カ)久安之比、給黎地頭とあり、先祖伊佐

平次貞時流、

薩摩国鯨嶋

鯨嶋刑部之丞

右、頼朝公之時、阿多郡鯨嶋地頭也、先祖不詳、藤原

氏族と見得たり、又伊佐平次貞時流歟、

薩摩国市来

中納言政房

右、先祖後漢靈帝之流、大藏姓也、光仁天皇宝龜之比

下向薩州、守市木城とあり、上古之人也、

薩摩国市来

市来太郎左衛門尉氏家

右、先祖惟宗姓也、大藏姓也、市来家房と云人無世子

故、氏家先祖政家為掣養子、連續市来、守護 道鑑公

時、氏家市来城主也、

薩摩国山門院

山門次郎秀忠

右、頼朝公之時、建久之比、山門院郡司職也、先祖平家氏族伊佐平次貞時也、

薩摩国莫祢

莫祢太郎成兼

右、守護忠義公之時居住之人也、寛元年中、鎌倉殿より給莫祢下向と見得たり、先祖平家氏族貞通流、

薩摩国和泉

和泉諸太郎政保

右、道鑑公之時居住之人也、和泉司とあり、先祖伴右兵衛佐兼清也、肝付一族、

薩摩国東郷

渋谷薩摩守重信

右、守護元久公之時、應永比、東郷城主也、先祖平家氏族渋谷庄司重國也、守護忠義公時、寛元年中、早川實重鎌倉より下向とあり、重信、實重八代之孫也、

さつま国那答院

渋谷遠江守久重

右、守護 久豊公時、守那答院城、先祖早川實重弟柏原院重貞、鎌倉より下向とあり、久重ハ重貞ハ八代之孫也、東郷兄弟、

薩摩国鶴田

渋谷刑部左衛門重成

右、鶴田城主也、守護忠宗公之時、正應之比居住人、

家先祖東郷兄弟、

薩摩国入来院

渋谷弾正少弼重門

右、道鑑公時、入来院城主也、先祖鶴田重成也、付五郎房定心始テ下向、重門定心六代之孫也、

薩摩国高城

渋谷下總権守重雄

右、先祖入来院定心弟落合六郎重貞□□下向、重雄者重貞五代之孫也、守護忠宗公時、守高城之城主と見得たり、

薩摩国入来院

藤原朝臣頼孝

右、三條院御宇長和之比、入来院領主と見得たり、先祖不詳、頼朝公以来上古之人也、

薩摩国牛糞

牛糞左近將監高元

右、道鑑公之時、元弘・建武之比、所々ニ而合戦、抽軍忠トアリ、先祖平家氏族薩摩四郎元衛、保元年中下向とあり、祖父ハ基盛公とあり、中古依夢相改太秦姓と云り、

薩摩国満家院

満家左近將監資宗

右、守護忠義公時、承久之比、満家之領主也、先祖大

藏姓、加治木八郎親平也、頼朝公時満家郡司長年あり、先祖不詳、是ハ他家之人と見得たり、

薩摩国吉田

吉田若狹守清正

右、元久公之時、應永之比、吉田之城主也、先祖大隅

正八幡之神官息長姓助清と云人也、此已前吉田本領主

大藏三位行忠卿也、天仁三年行賢執印と言人ニ吉田令

沽渡、為重鎮西八郎為朝次男とあり、助清嫡子清道

母方之祖父為清とあり、若狹守清正ハ助清十一代之孫也、

薩摩国満家院郡山

郡山又次郎俊平

右、守護久經公之時、弘安之比、郡山村領主也、先祖

加治木八郎親平四代之孫也、

薩摩国満家院内比志嶋

比志嶋孫太郎入道
佛念

右、道鑑公之時、元弘・建武之比、比志嶋領主也、先

祖源氏族志田三郎義憲也、信濃國主之時、有由為流人、

頼ミ忠久公ヲ、薩摩江下向云々、比志嶋住居、于時満家

郡司為聳生男子、是比志嶋先祖榮辨也、其後義憲被免

て信州ニ帰國、榮弁者比志嶋ニ留と云リ、

薩摩国南郷

桑波田讚岐守兼
景元入道親兼

右、忠昌公・勝久公、永吉城主也、上古永吉ヲ南郷と

云、先祖紀姓人也、

薩摩国満家院内川田

川田左衛門太郎資清

右、氏久公之時、川田城主也、先祖者比志嶋榮辨也、

薩摩高江

紀太夫正信

右、頼朝公之時、建久之比、高江并宮里郡司也、先祖

ハ石清水水俗別當兼信也、正信ハ兼信より六代之孫也、

薩摩国国分

国府左衛門尉友成

右、忠義公之時、承久比、国分領主也、先祖惟宗氏宗

大納言知國新田宮執印康友之次男国分左馬守友久也、

薩摩国内顛嶋

小川小太郎

右、先祖ハ平山武者所季重と云、日奉姓也、代々顛

嶋、小太郎、守護 忠宗、公時地頭也、

薩摩国

在国司道氏

右、久經公時、文永・弘安比、薩摩郡在国司と有、先

祖不詳、大前氏人欵、

薩摩国

東郷藏人道義

右、道鑑公時居住之人也、渋谷氏之東郷ニ而ハ無之、

渋谷無下向以前、東郷之城主ニ斧洲とて有之、此家の人成ヘシ、在國司道氏并道(ト)ト皆一族云々、大前氏欵、

薩摩国守護代

左衛門尉清秀

右、忠義公時、承久比居住之人也、旧記ニ見得たり、

先祖不詳、

薩摩国

救仁院平八成直

右、頼朝公時居住人也、先祖不詳、救仁院日州志布志也、平家謀反時見得たる人と旧記ニあり、

薩摩国

安樂平九郎為成

右、救仁院平八弟也、

薩摩国阿多郡高橋

隱岐左衛門入道道存(行カ)

右、忠宗公時、正應比人也、吳國為警固鎮西下向と見得たり、先祖二階堂氏也、

薩摩国牛糞院入山

入山彦五郎入道元古

右、氏久公之時、嘉曆比入山領主と見得たり、先祖者牛糞氏太秦也、元古ハ菱刈一族とあり、

薩摩国

花北左衛門太郎入道妙道

右、牛糞一族也、嘉曆比居住、

薩摩国

井手籠孫次郎重久

右同、

嘉曆比居住、

薩摩国

東郷兵衛尉

右、山門院郡司秀忠聳也、久經公時、弘安比之人と見得たり、渋谷氏ニ而ハなし、斧洲氏成ヘシ、渋谷兵衛尉と云ハ不見得、

尉と云ハ不見得、

薩摩国

長谷場六郎久純

右、元久公時、應永比之人也、福昌寺地者久純之住處と云、元久公御所望ニて建福昌寺と云ヘリ、先祖ハ矢

上氏、同前矢上兄弟といヘリ、

さつま国

草道太郎左衛門

右、道鑑公時、宮里郷霧王丸名之名主とあり、先祖ハ正平紀氏成ヘシ、

さつま国

伊集院野田淡路房兼祐

右、道鑑公時之人と旧記ニ見得たり、先祖不詳、御家ニ而ハなし、

薩摩国

武光日向入道法忍

右、道鑑公時之人也、先祖不分明、伴氏人なり、上古

武光氏市来邊ニ居住と見得たり、

薩摩国

牟木大郎

右、頼朝公時、當国住居人也、建久之御下文ニ見得たり、先祖不詳、

留
守
文
書

〔表紙〕

留守文書寫

留守文書寫

文書写

〇一 石清水八幡宮別当家奉書

〔花押〕

〔在正文〕

大隅國正八幡宮執印職事、以紀朝臣儀景所被補任彼職也、早被存知之、可被專神事之由、石清水八幡宮善法寺法印掌清依仰執達如件、

天文二十年八月廿六日

前加賀法眼東尊

執印越前守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編」二九五号文書ト同文ナリ〕

〇二 石清水八幡宮別当家奉書

〔花押〕

〔在正文〕

大隅國正八幡宮留守職之事、以紀景親所被補任彼職也、早被存知其旨、專神事・祭礼之由、石清水之八幡宮善法寺法印掌清依仰執達如件、

天文廿年九月六日

前加賀法眼東尊

留守左衛門尉殿

〇三 石清水八幡宮別当家奉書

(花押)

〔在正文〕

大隅國正八幡宮留守職事、以正執印紀景親所被補任彼職也、早被存知其旨、可被專神事・祭礼之由、石清水八幡宮善法寺法印堯清依仰執達如件、

天正二年九月十日

藤木

民部卿周尊

正執印殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編一」八九一号文書ト同文ナリ〕

〇四 町田久幸外三名連署証狀

〔在正文〕

正宮江就拜進之馬之儀、留守殿・澤殿諍論之子細、數日致沙汰、其上社家之衆召寄様子相尋候、然者神馬与申事者、從前々承傳候、祈念之馬与在之儀者不存知之由、社衆被申候之間、弥如先規寄進之神馬者、貴所格護尤候、自今已後為祈念之馬儀、堅令停止事、仍為後日狀如件、

慶長十七稔

十一月廿八日

三原諸右衛門尉

重種 (花押)

伊勢兵部少輔

貞昌 (花押)

比志嶋紀伊守

国貞 (花押)

町田勝兵衛尉

久幸 (花押)

留守右衛門佐殿

〇五 伊集院忠朗坪付

〔此坪付就御用、御記録所へ差出置候處、元錄九年 御城回祿之節焼失故、正文無之〕

坪付

木房

東屋敷

中間屋敷

西屋敷

以上

天文十七年

五月十七日

伊大和守

忠朗在判

留守若狹守殿

〇六 島津龍伯義寄進狀

〔在正文〕

正八幡領

隅州宮内う地山田村之内

高五拾石 屋敷二ツ

右之内十石島方也、

已上

先年以京儀諸社領雖令勤落、新仁今度致奇進候、然者從前々當家之為祈願人之故、到貴所相付早、元日之大節供、如舊規堅於神前奉備、聊無怠慢可被抽精祈者也、慶長四年五月十七日

龍伯（花押）

留守次郎三郎殿

（本文書ハ「旧記雜錄後編」三七四号文書ト同文ナリ）

〇七 島津忠恒家寄進狀

〔在正文〕

薩州郡内知行目錄

吉田佐多之浦村之内

高五拾石但三千四佰五十一石之内

右知行之事、先年為令立願驗、今度先奉寄進候、然者從前々為當家之祈願人之故▽◎到貴所△相付早、十月十五日大放生會・中節供、如舊規堅於神前奉備、無怠慢可被抽精祈者也、

慶長四年九月十四日

忠恒（花押）

留主次郎三郎殿

（本文書ハ「旧記雜錄後編」三八〇号文書ト同文ナリ）

〇八 比志島国貞外二名連署知行目錄

〔在正文〕

知行目錄

大隅宮内之内

内村名三右衛門屋敷

高八石六斗五升三合

内村名助十郎屋敷

高廿七石九斗三升老合

内村名山之元屋敷

高拾四石七斗四升一合

浮免

内村名之内

高卅石八斗七升四合

浮免

内山田名内

高百九石四斗六升九合

浮免

見次名之内

高三石四斗一升四合

内村名源五郎屋敷

高拾七石四合

合貳百拾貳石八升六合

右之地、應此中公役ニ高被宛行者也、

慶長十九年

七月四日

三原諸右衛門尉

□印

伊勢兵部少輔

比志嶋紀伊守

□印 □印

留守右衛門佐殿

○九

島津義弘書狀

以上

「在正文」

傳書并御祈禱之札、寔欣悦不少候、然者其地之寺社令勘落、諸事不如意之躰尤存候、但正八幡御事ハ不輕儀候ハ、来春者必可為帰朝候条、其刻 巨細可申達候、事々、恐々謹言、

十一月十八日 義弘(花押)

留守殿

桑幡殿

澤殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」一三三三號文書ト同文ナリ)

文
書
目
錄

例言

- 一 本巻に収めた二十九家の文書を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、年紀を欠くもので推定しうるものは（ ）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。

※ (三六) 建武 三年 三月十七日 足利尊氏奉行人連署奉書写
三七 建武 四年 三月十七日 足利尊氏奉行人連署奉書写
三八 建武 四年 五月十日 某催促状案
三九 建武 四年 八月 六日 島津頼久催促状
四〇 曆応 二年 十二月 河田慶喜軍忠状
四一 曆応 三年 六月廿三日 某道頭・酒匂久景連署書下
四二 曆応 三年 五月十日 某書下
四三 (貞和) 四年 八月 六日 河田慶喜讓状
四四 文和 三年 二月十六日 河田慶喜讓状
四五 (文和) 三年 六月 五日 河田慶喜讓状
六月 五日 河田慶喜讓状

〔有馬家文書 六〕

四六 文和 三年 六月 五日 河田慶喜讓状
四七 延文 五年 正月 八日 ほし白状
四八 康安 二年 二月十七日 斯波氏経催促状
四九 康安 二年 二月十七日 斯波氏経催促状
五〇 応安 六年 十月十一日 島津伊久名字状
五一 応永十五年 四月廿五日 沙弥けんつう讓状
五二 (慶長) 四年 九月 十日 町田存松久倍外二名連署知行
目録
五三 四月十五日 某書状
五四 五月十六日 某書下
五五 十二月 酒匂久景書下

有村文書

五六 三月廿八日 島津久知・新納久正連署書
五七 延享 元年 十月廿八日 川上親央・町田俊雄連署與
書
五八 十二月廿一日 文書所達書
五九 名乗之書付
六〇 川田家由緒覚留
一 天正 十年 十一月廿五日 賦何路連歌写
二 三月廿三日 島津義久書状写
三 十二月十三日 島津義久書状写
四 十一月廿三日 根占作左衛門尉書状写
五 慶長 六年 四月十六日 某加增目錄写
六 某加增目錄写
七 某加增目錄写
八 十二月廿七日 木上惟商書状写
九 十二月廿一日 新納忠元六首詠草写
一〇 十二月廿四日 伊勢貞昌書状写
一一 慶長十八年 正月廿四日 有村某寬書写
一二 二月廿三日 伊勢貞昌書状写
一三 二月十一日 某寬書写
一四 二月十一日 伊地知重賢書状写

太秦文書

- 一五 重朝・忠清詠草写
- 一六 寛永十七年 二月廿六日 新納忠清知行目録写
- 一七 十一月 廿日 伊勢貞昭書状写
- 一八 万治 二年 七月 九日 知行名寄目録写
- 一九 八月 六日 有村安左衛門寛書写

一六 ※(一四)
 ※(一二)
 ※(一五)
 ※(一六)
 ※(一三)

- 十二月 八日 菊池武朝書状写
- 十一月廿五日 菊池武朝書状写
- 二月十八日 菊池武朝書状写
- 十一月廿三日 相良実長書状写
- 十二月 八日 菊池武朝書状写
- 三月十四日 後村上天皇繪旨写
- 三月十六日 相良頼房書状写
- 三月十八日 某遠江書状写
- 三月十六日 菊池弥兵衛書状
- 牛屎元息所領所望注文
- 牛屎院系図

- 一 元弘 三年 二月 六日 護良親王令旨
- 二 元弘 三年 四月廿三日 後醍醐天皇繪旨
- 三 建武 三年 五月十四日 足利尊氏下文
- 四 建武 四年 三月 牛屎高元軍忠状
- 五 観応 二年 九月 六日 足利直冬下文
- 六 正平十八年 七月 六日 藏人藤原経清奉口宣案
- 七 弘和 四年 正月十六日 征西將軍宮令旨
- 八 元中 四年 九月廿六日 牛屎元勝代山内元清軍忠目

大迫文書

一 慶長十二年
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九

- 九 応永十二年 八月十五日 島津伊久預状
- 一〇 応永廿四年 三月 廿日 藏人藤原藤光奉口宣案
- 一一 文明十一年 八月 三日 相良為統坪付
- 一二 二月十八日 菊池武朝書状
- 一三 三月十四日 後村上天皇繪旨
- 一四 十一月廿五日 菊池武朝書状
- 一五 十一月廿三日 相良実長書状

- 八月廿七日 島津義弘書下
- 十月十二日 伊集院幸侃書状
- 十月廿三日 大迫新左衛門寛
- 三月 十日 曾木五兵衛書状
- 三月十二日 曾木五兵衛書状
- 三月廿六日 曾木五兵衛書状
- 九月 五日 島津久元・喜入忠統連署書

一〇 寛永十一年 三月 大迫吉之丞口上覚
 一一 某覚書
 一二 唐土より与へられたる標幟
 ノ添書

岡元文書

一 文永 四年 六月十六日 関東下知状
 二 正応 元年 六月廿七日 関東下知状
 ※(二) 正応 元年 六月廿七日 関東下知状案
 三 三 渋谷明重後家尼寿阿置文案
 四(正応 三年) 四月廿一日 渋谷重村着到状
 五(正応 三年) 四月廿一日 渋谷重村着到状
 六 正応 四年 八月廿八日 関東裁許状案
 七 正安 元年 八月十七日 渋谷重世讓状案
 八 乾元 元年 十二月廿三日 関東下知状
 九 徳治 三年 正月 平氏女連署和与状
 一〇 延慶 二年 十二月廿九日 渋谷重□寄進状
 一一 元亨 二年 三月 九日 六波羅御教書
 一二 元亨 二年 八月十八日 渋谷静重讓状
 一三 正中 二年 三月廿三日 六波羅御教書
 一四 正慶 元年 八月 渋谷重頼外四名連署証状
 一五 元弘 三年 八月 渋谷典重軍忠状
 一六 元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇諭旨

一七 元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇諭旨
 一八 元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇諭旨
 一九 建武 元年 六月 三日 雑訴決断所牒
 二〇 建武 元年 十月 八日 雑訴決断所牒
 二一 建武 元年 十二月十九日 渋谷定円重基外六名連署和与状
 二二 建武 二年 五月 七日 雑訴決断所牒案
 二三 建武 三年 九月 三日 足利尊氏感状
 二四 二 建武 三年 四月 二日 肥前三根西郷地頭職証文案
 の1 建武 三年 七月十三日 高師直施行状案
 2 建武 四年 二月 三日 渋谷重棟讓状
 二五 康永 三年 二月 三日 渋谷重棟讓状
 二六 康永 三年 二月 三日 渋谷重棟讓状
 二七 康永 四年 九月 三日 渋谷重興軍忠状
 二八 貞和 三年 三月 六日 渋谷定円重基外二名連署讓状
 二九 貞和 四年 二月 九日 渋谷重興軍忠状
 三〇 貞和 四年 八月十七日 鎮西御教書
 三一 貞和 四年 十一月 卅日 一色直氏奉書
 三二 貞和 六年 四月 足利直冬軍勢催促状
 三三 貞和 七年 五月廿五日 渋谷重興着到状
 三四 貞和 七年 八月 三日 足利直冬感状
 三五 正平 六年 十二月廿三日 後村上天皇諭旨
 三六 正平 六年 十二月廿三日 渋谷重興軍忠状

三七 観応 三年 四月十九日 渋谷重勝遊状

三八 正平十三年 三月 六日 西征將軍宮令旨

三九 康安 二年 九月 六日 足利義詮感状

四〇 貞治 二年 五月 八日 渋谷重門証状

四一 康応 元年 十二月十七日 散位某施行状

四二 貞治 二年 四月廿九日 貞継書状

四三 渋谷氏系図

四四 筑前下長尾田地相伝系図

四五 肥前佐嘉内相伝系図

四六 肥前国佐嘉下庄内相伝系図

四七 肥前国佐嘉庄内相伝系図

四八 岡本氏古系図

〔岡元家文書写〕

※(一) 正応 元年 六月廿七日 関東下知状写

※(二) 文永 四年 六月十六日 関東下知状写

※(三) 元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇繪旨写

※(四) 元弘 三年 八月 渋谷典重軍忠状写

※(五) 観応 三年 四月十九日 渋谷重勝遊状写

※(六) 貞治 二年 四月廿九日 貞継書状写

※(七) 建武 三年 九月 三日 足利尊氏感状写

※(八) 建武 元年 十月 八日 雑訴決断所牒写

※(九) 貞和 七年 五月廿五日 足利直冬感状写

※(一〇) 建武 元年 十二月十九日 渋谷定円重基外六名連署和与

状写

※(二四) 正慶 元年 八月 渋谷重頼外四名連署証状写

※(二二) 建武 二年 五月 七日 雑訴決断所牒写

※(三六) 正平 六年 十二月廿三日 渋谷重興軍忠状写

※(二七) 元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇繪旨写

※(四七) 肥前国佐嘉庄内相伝系図写

※(四四) 筑前下長尾田地相伝系図写

※(一九) 建武 元年 六月 三日 雑訴決断所牒写

※(四六) 肥前国佐嘉下庄内相伝系図写

※(九) 徳治 三年 正月 平氏女連署和与状写

※(一三) 正中 二年 三月廿三日 六波羅御教書写

※(一五) (正応三年之) 四月廿一日 渋谷重村着到状写

※(三一) 貞和 四年 八月十七日 一色直氏奉書写

※(三〇) 正応 元年 十月 渋谷明重後家尼寿阿闍文写

※(二九) 関東裁許状写

※(一六) 正応 四年 八月廿八日 関東裁許状写

※(二七) 康永 四年 九月 三日 渋谷重興軍忠状写

※(一〇) 延慶 二年 十二月廿九日 渋谷重□寄進状写

※(四) (正応三年之) 四月廿一日 渋谷重村着到状写

※(四一) 康応 元年 十二月十七日 散位某施行状写

※(二六) 康永 三年 二月 三日 渋谷重棟讓状写

※(三三) 貞和 七年 四月 渋谷重興着到状写

文書目録

- ※(四の1)建武 三年 四月 二日 足利尊氏袖判下文写
- ※(四の2)建武 四年 七月十三日 高師直施行状写
- ※(二五)康永 三年 二月 三日 渋谷重棟讓状写
- ※(二八)貞和 三年 三月 六日 渋谷定円重外二名連署讓状写
- ※(七)正安 元年 八月十七日 渋谷重世讓状写
- ※(二八)元弘 三年 十一月 九日 後醍醐天皇綸旨写
- ※(四〇)貞治 二年 五月 八日 渋谷重門証状写
- ※(二)正応 元年 六月廿七日 関東下知状写
- ※(八)乾元 元年 十二月廿三日 関東下知状写
- ※(三八)正平十三年 三月 六日 西征将军官令旨写
- ※(三五)正平 六年 八月 三日 後村上天皇綸旨写
- ※(三九)康安 二年 九月 六日 足利義詮感状写

〔岡本氏系図〕

四九

岡本氏系図

加治木島津家文書

- 一(慶長 三年九) 四月 五日 島津義弘書状
- 二(文禄 元年) 五月 四日 島津義弘書状
- 三 五月 五日 島津義弘書状
- 四(慶長 元年) 閏七月廿八日 島津義弘書状
- 五(文禄 元年) 六月廿二日 島津義弘書状
- 六(文禄 四年) 六月 五日 島津義弘書状

- 七 五月 朔日 某書状
- 八(天正十九年) 閏正月廿四日 島津義弘書状
- 九(慶長 三年) 某書状

- 一〇(文禄 三年) 八月 七日 島津義弘書状
- 一一(文禄 三年) 八月 二日 某書状
- 一二(文禄 三年) 六月廿二日 島津義弘書状
- 一三 六月十三日 島津義弘書状
- 一四(文禄 三年) 八月 一日 島津義弘書状
- 一五(文禄 元年) 三月十九日 島津義弘書状
- 一六(天正十九年) 三月十九日 島津義弘書状
- 一七(天正十六年) 六月 六日 島津義弘書状
- 一八 九月十六日 伊集院久族書状
- 一九 四月 一日 伊勢貞昌書状
- 二〇 四月 五日 伊勢貞昌書状
- 二一 正月十八日 伊勢貞昌書状
- 二二 正月十六日 有間平右衛門書状
- 二三(慶長十七年九) 十月廿八日 喜入久供書状
- 二四 六月廿九日 伊勢貞昌書状
- 二五 十月 九日 仁礼頼景書状
- 二六 九月廿八日 伊勢貞昌書状

川田文書

- 一 弘長 四年 正月 二日 島津道仏忠時覆勘状案

- 二 貞和 五年 正月廿六日 島津貞久書下案
- 三(応永廿一年) 三月十五日 島津久豊書狀案
- 四 正平十二年 四月廿八日 島津氏久宛行狀案
- 五 正応 二年 四月 五日 島津忠宗覆勘狀案
- 六 正応 二年 十二月十五日 島津忠宗警固番役覆勘狀案
- 七 元亨 四年 十一月 十日 島津貞久書下案
- 八 正嘉 元年 八月廿二日 島津忠時書下案
- 九 応永十九年 二月十五日 島津久豊宛行狀案
- 一〇 正平十二年 四月 比志島範平軍忠狀案
- 一一 九月 二日 島津道鑑^貞書狀^写
- 一二(応永廿一年) 三月廿三日 島津久豊書狀案
- 一三(貞和 二年九) 五月十八日 島津道鑑^貞久書狀案
- 一四 七月 一日 島津貴久書狀案
- 一五(貞和 六年九) 五月廿三日 島津道鑑^貞久書狀案
- 一六 九月 九日 島津立久書狀案
- 一七 応永十三年 十二月 五日 島津頼久讓狀
- 一八 応永十八年 十一月廿七日 島津久豊預ヶ狀
- 一九 文明十七年 二月 二日 島津忠昌書狀
- 二〇(大永 六年) 十一月 四日 島津忠兼書狀
- 二一(天正十六年) 五月 六日 島津義弘書狀
- 二二(天正十六年九) 六月廿四日 島津義弘書狀
- 二三(天正十七年九) 十月廿二日 島津龍伯^義書狀

岸良文書

- 一 弘安 二年 四月 某下文^写
- 二 正和 四年 二月廿七日 尼真理宛行狀^写
- 三 文保 三年 三月廿六日 前肥後守願親宛行狀^写
- 四 元亨 元年 九月 八日 散位清保奉書^写
- 五 元亨 二年 四月廿五日 栄寂奉書^写
- 六 元亨 三年 七月十六日 栄寂奉書^写
- 七 岸良氏系図^写

霧島神宮文書

〔島津家願文〕

- 一 天文廿四年 二月 六日 島津貴久願文
- 二 天文十四年 十一月十六日 島津貴久立願文
- 三 永祿 六年 二月廿三日 島津貴久立願文々々
- 四 永祿十一年 二月 吉日 島津義久寄進狀
- 五 永祿十一年 二月 吉日 島津義久寄進狀
- 六 永祿十二年 十一月十五日 島津義久寄進狀
- 七 天正 六年 十一月 四日 島津義久願文
- 八 天正 六年 十一月 四日 島津義久願文
- 九 天正十五年 八月廿四日 島津義弘寄進狀
- 一〇 天正 廿年 九月 七日 島津義久袖判寺領目錄
- 一一 慶長 四年 五月十七日 島津龍伯^義寄進狀
- 一二 慶長 四年 五月十七日 島津龍伯^義寄進狀

- 一三 慶長 四年 九月 二日 島津忠恒家久寄進狀
- 一四 慶長 五年 三月廿五日 島津忠恒家久寄進狀
- 一五 慶長 五年 六月 二日 島津龍伯義久捷書
- 一六 慶長 五年 七月十九日 島津龍伯義久書狀
- 一七 慶長十九年 十月 八日 島津義弘書狀
- 一八 慶長十九年 六月 八日 島津惟新義袖判覺書
- 一九 慶長 廿年 三月 二日 町田久幸外三名連署知行目

録

- 二〇 九月 廿日 島津忠恒家久書狀

〔伊勢貞昌文書〕

- 二一 正月 十日 伊勢貞昌書狀
- 二二 四月十一日 伊勢貞昌書狀
- 二三 八月十四日 伊勢貞昌書狀
- 二四 十二月 伊勢貞昌書狀
- 二五 十一月十六日 伊勢貞昌書狀
- 二六 六月 廿日 伊勢貞昭書狀
- 二七 八月廿三日 諏訪兼延書狀

黒岡文書

- 一 元禄 二年 九月廿三日 島津久邦・島津久元連署書狀写
- 二 文明十八年 十月十九日 島津忠昌宛行狀写
- 三 (文明 八年) 九月十四日 足利義政御内書写

- 四 十月十七日 足利義政御内書写
- 五 文明 九年 十月 三日 足利義政御判御教書写
- 六 十一月十五日 足利義政御内書写
- 七 八月 六日 足利義政御内書写
- 八 応仁 二年 十月廿八日 室町將軍家御内書写
- 九 閏六月十七日 細川高国書狀写
- 一〇 八月廿三日 細川政元書狀写
- 一一 明心 七年 二月十九日 飯尾為規・飯尾元行連署奉書写
- 一二 明心 七年 七月廿五日 松田頼亮・諏訪貞房連署奉書写
- 一三 延徳 二年 十二月 卅日 飯尾元連奉書写
- 一四 七月廿三日 大内義興書狀写
- 一五 十二月 廿日 大内義隆書狀写
- 一六 九月廿五日 大友親治書狀写
- 一七 四月十二日 甘露寺元長書狀写
- 一八 四月十六日 近衛前久書狀写
- 一九 八月十四日 観修寺尚願書狀写
- 二〇 七月 九日 大友義鑑書狀写
- 二一 十月 六日 大友義隆書狀写
- 二二 永禄 二年 正月十一日 島津貴久吉書写
- 二三 十二月十五日 伊勢貞陸書狀写
- 二四 十二月十三日 大友義鎮書狀写

桑幡文書

一 安元 元年

八月

右近衛府牒

〔國分氏古文書 上〕

七 建武 四年

五月廿一日

國分友重契約狀

六 文永 四年

十月廿九日

左衛門尉友員相伝狀

〔惟宗姓國分氏古文書〕

五 貞治 三年

十二月廿五日

某注進狀

四 弘安 九年

三月十九日

左兵衛尉政氏奉書

三 正応 四年

六月廿八日

八幡新田宮所司・天満宮國分寺所司等契狀

四〇

二 永永 二年

二月十一日

島津存忠久書狀写

三九

三 永永 十一年

六月廿九日

前將軍足利義滿袖判御教書写

三八

三 永永 二年

八月 四日

後醍醐天皇綸旨写

三七

三 永永 二年

七月 十日

源頼朝御教書写

三六

三 永永 二年

五月 三日

源頼朝下文写

三五

三 永永 二年

四月廿九日

進藤長之書狀写

三四

三 永永 二年

正月 朔日

島津光久書狀写

三三

三 永永 十五年

正月十三日

島津家久袖判掟書写

三二

三 永永 七年

五月十五日

島津家久書狀写

三一

三 永永 二年

三月十九日

島津忠恒家判物写

三〇

慶長 十六年

四月 四日

島津惟新義弘判物写

二九

三 永永 二年

十二月廿五日

島津義弘書狀写

二八

三 永永 二年

十二月廿八日

島津義久書狀写

二七

三 永永 二年

十二月廿六日

島津義久書狀写

二六

三 永永 二年

十二月廿八日

島津義久書狀写

二五

三 永永 二年

十二月十五日

島津貴久書狀写

二四

三 永永 二年

四月 三日

源頼朝下文写

二三

三 永永 二年

五月 三日

源頼朝御教書写

二二

三 永永 二年

七月 十日

源頼朝御教書写

二一

三 永永 二年

八月 四日

後醍醐天皇綸旨写

二〇

三 永永 二年

二月十一日

島津存忠久書狀写

一九

三 永永 二年

六月廿九日

前將軍足利義滿袖判御教書写

一八

三 永永 二年

七月 十日

源頼朝御教書写

一七

三 永永 二年

五月 三日

源頼朝下文写

一六

三 永永 二年

四月廿九日

進藤長之書狀写

一五

三 永永 二年

正月 朔日

島津光久書狀写

一四

三 永永 十五年

正月十三日

島津家久袖判掟書写

一三

三 永永 七年

五月十五日

島津家久書狀写

一二

三 永永 二年

三月十九日

島津忠恒家判物写

一一

慶長 十六年

四月 四日

島津惟新義弘判物写

一〇

三 永永 二年

十二月廿五日

島津義弘書狀写

〇九

三 永永 二年

十二月廿八日

島津義久書狀写

〇八

三 永永 二年

十二月廿六日

島津義久書狀写

〇七

三 永永 二年

十二月廿八日

島津義久書狀写

〇六

三 永永 二年

十二月十五日

島津貴久書狀写

〇五

三 永永 二年

四月 三日

源頼朝下文写

〇四

三 永永 二年

五月 三日

源頼朝御教書写

〇三

三 永永 二年

七月 十日

源頼朝御教書写

〇二

三 永永 二年

八月 四日

後醍醐天皇綸旨写

〇一

三 永永 二年

二月十一日

島津存忠久書狀写

〔國分氏古文書 下〕

八 建武 三年

四月十一日

足利直義感狀案

九 建武 三年

四月廿一日

足利直義軍勢催促狀案

一〇 建武 四年

二月十二日

足利直義軍勢催促狀案

一 承久 二年

六月廿一日

天満宮國分寺重牒

二 文永 五年

五月

天満宮國分寺所司神宮等申狀案

三 正応 四年

六月廿八日

八幡新田宮所司・天満宮國分寺所司等契狀

四 弘安 九年

三月十九日

左兵衛尉政氏奉書

五 貞治 三年

十二月廿五日

某注進狀

六 文永 四年

十月廿九日

左衛門尉友員相伝狀

七 建武 四年

五月廿一日

國分友重契約狀

三 安元 三年

四月

右近衛府政所下文

三 文治 三年

五月 三日

源頼朝下文案

四 文永 二年

十二月廿七日

關東下知狀案

五 元亨 元年

十月十一日

關東下知狀案

六 元弘 二年

十月 十日

沙弥恵仁讓狀案

七 建武 四年

六月十五日

沙弥恵仁申狀案

八 建武 三年

四月十一日

足利直義感狀案

九 建武 三年

四月廿一日

足利直義軍勢催促狀案

一〇 建武 四年

二月十二日

足利直義軍勢催促狀案

八 元亨 三年 五月 国分友貞重申状写
 九 元亨 三年 五月廿三日 鎮西奉行入連署奉書写
 一〇 元亨 三年 五月廿五日 惟宗友任請文写
 一一 元亨 三年 五月 天満宮安楽寺雜掌祐舜申状写
 一二 天養 三年 正月 薩摩国司庁宣写
 一三 文治 二年 十二月 七日 北条時政下文写
 一四 承久 三年 七月 廿七日 官宣旨写
 一五 承久 三年 十月 八日 六波羅下知状写
 一六 元亨 三年 七月 国分友貞申状写
 一七 元亨 三年 七月 国分友貞申状写
 一八 元亨 三年 八月 国分友貞陳状写
 一九 元亨 三年 七月 廿八日 六波羅奉行入書状写
 二〇 正応 元年 十月 三日 蒙古合戦勲功地配分状写
 二一 元亨 三年 九月 十六日 宇佐八幡宮領条々写
 二二 元亨 三年 九月 十六日 鎮西御教書写
 二三 元亨 三年 十一月 七日 春寂書状写
 二四 元亨 三年 十一月 国分友貞申状写
 二五 元亨 三年 十二月 三日 鎮西御教書写
 二六 元亨 三年 六月 廿日 国分友貞請文案写
 二七 正中 二年 四月 三日 平某書下写
 二八 正中 二年 三月 十八日 鎮西御教書写
 二九 正中 二年 三月 国分寺雜掌靜祐重申状写

三〇 正中 二年 閏正月 廿九日 鎮西御教書写
 三一 正中 二年 二月 菅原長宜家雜掌申状写
 三二 元亨 三年 五月 十二日 後醍醐天皇繪旨写
 三三 正中 元年 十二月 晦日 沙弥正行和与状写
 三四 正中 元年 十二月 晦日 国分友貞請文写
 三五 正中 二年 三月 十二日 六波羅御教書写
 三六 正中 二年 三月 二日 後醍醐天皇繪旨写
 三七 正中 二年 三月 三日 西園寺実衡御教書写
 三八 正中 二年 二月 晦日 菅原長宣状写
 三九 正中 二年 七月 国分友貞申状写
 四〇 正中 二年 七月 廿五日 鎮西下知状写
 四一 正中 二年 七月 廿五日 国分寺領訴訟次第注文写

[國分氏古文書 下]
 四二 元亨 二年 十二月 国分友貞申状写
 四三 (文治 五年) 十一月 廿四日 源頼朝御教書写
 四四 元亨 三年 九月 廿九日 北条泰時書状写
 四五 元亨 三年 九月 廿三日 北条時氏書状写
 四六 寛元 二年 七月 廿五日 関東過書写
 四七 寛元 四年 五月 廿七日 六波羅施行状写
 四八 寛元 四年 九月 五日 六波羅御教書写
 四九 仁治 二年 九月 十日 六波羅御教書写
 五〇 仁治 三年 十一月 十九日 六波羅御教書写
 五一 弘長 二年 七月 十日 関東御教書写

五二	弘長 二年	八月十一日	島津忠時書下写	七五	正応 二年	十月	国分友兼重申状案写
五三		正月 卅日	島津忠時大番役請取状写	七六	正和 三年	七月廿五日	導証書状写
五四		二月十四日	島津忠時大番役催促状写	七七	嘉曆 三年		新田宮沙汰証人交名注文写
五五	正応 三年	十月 一日	島津忠宗警固番役覆勘状写	七八	享保 十年	三月	某寛写
五六	正応 四年	九月 晦日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
五七	永仁 元年	九月 卅日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
五八	永仁 二年	七月 卅日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
五九	永仁 四年	十月 六日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
六〇	永仁 五年	九月 卅日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
六一	永仁 六年	九月 卅日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
六二	正安 元年	十月十五日	島津忠宗警固番役覆勘状写				
六三	応長 元年	閏六月廿四日	沙弥道本義絶状写				
六四	元応 二年	十月十一日	鎮西御教書写				
六五			薩摩国分寺相伝次第写				
六六	元亨 二年	十二月 廿日	鎮西御教書写				
六七	元亨 三年	正月	国分友貞重申状写				
六八	元亨 三年	正月廿三日	鎮西御教書写				
六九	元亨 三年	二月	国分友貞重申状写				
七〇	元亨 三年	二月廿六日	鎮西御教書写				
七一	元亨 三年	四月 二日	平成貞請文写				
七二	元亨 三年	五月	国分友貞重申状写				
七三	元亨 三年	五月 九日	鎮西奉行入連署奉書写				
七四	寛元 元年	八月 十日	迎阿弥陀仏大間状案写				

〔惟宗姓執印國分一族由緒大概案〕

七九 惟宗姓執印國分一族由緒大概案

〔惟宗姓市来氏辨疑〕

八〇 惟宗姓市来氏辨疑

〔惟宗姓國分氏系圖〕

八一 惟宗姓國分氏系圖

八二 惟宗氏系圖

八三 国分氏系圖

八四 惟宗氏系圖

八五 国分氏系圖

八六 新田宮執印職并国分寺留守系圖

八七 藤野忠秀入道恕世筆

志々目文書

〔志々目家文書 一〕

一文永 四年 三月 五日 沙弥道意置文案

二文永 八年 七月十六日 島津庄留守沙弥某下文

三 嘉元 三年 三月十五日 祢寝院北俣郡本村弁濟使職 〔志々目家文書 三〕

并田蘭・在家等別分狀

四 正中 二年 閏正月 藤原弥義安堵申狀

五 元亨 二年 八月廿五日 島津庄留守法橋上人某下文

六 元亨 二年 八月廿五日 目代左衛門尉藤原某施行狀

七 元亨 四年 五月 三日 収納使藤原某書下

八 元亨 四年 九月 十日 目代左衛門尉藤原某施行狀

九 徳治 三年 三月 十日 島津庄留守沙弥某下文

一〇 正中 三年 三月 島津庄留守左衛門尉惟宗某下文

〔志々目家文書 一〕

一一 嘉曆 二年 七月 藤原弥義代定末安堵狀

一二 嘉曆 二年 八月廿五日 藤原行義・藤原弥義連署契

一三 応安 八年 三月廿三日 島津氏久挙狀

一四 祢寝院弁濟使職相伝次第

一五 曆応 二年 十月 六日 清成書狀

一六 康永 二年 五月 四日 島津道鑑貞感狀写

※ (一三) 応安 八年 三月廿三日 島津氏久挙狀写

一七 嘉曆 三年 三月 六日 藤原弥義・義峯・義村連署

和与狀

一八 天授 二年 十二月廿九日 島津氏久宛行狀写

※ (一八) 天授 二年 十二月廿九日 島津氏久宛行狀写

〔志々目家文書 三〕

一九 永和 四年 二月廿八日 島津氏久安堵狀写

二〇 至徳 三年 四月十四日 島津氏久安堵狀写

二一 至徳 三年 (十日) 島津氏久安堵狀写

※ (二一) 至徳 三年 (十日) 島津氏久安堵狀写

二二 嘉慶 三年 十月 島津元久宛行狀写

二三 応永 元年 十二月十五日 島津元久安堵狀写

二四 応永 二年 閏七月 吉日 法印空快願文

二五 応永 七年 三月 島津元久宛行狀写

二六 応永(十一年) 六月廿九日 島津久豊安堵狀写

二七 応永十八年 十一月 八日 島津久豊宛行狀写

二八 応永十九年 十二月 五日 島津久豊宛行狀写

※ (二八) 応永十九年 十二月 五日 島津久豊宛行狀写

二九 永享 五年 五月十九日 島津好久宛行狀写

三〇 藤原氏(富山志々目氏)系

三一 藤原姓富山志々目氏系図

三二 富山志々目氏相伝文書目錄

三三 並家譜

の1 貞享 二年 六月十五日 志々目義陳書狀写

2 元禄十一年 二月廿一日 志々目義辰証狀写

3 元禄十一年 二月 志々目義元証狀写

4 元禄十二年 二月廿三日 志々目養学院義覚書写

調所氏家譜

〔調所氏家譜 乾〕

三三 延享 三年 三月廿五日 志々目義詮置文
三四 三月 七日 富山氏由緒書

一九 建武 元年 四月 四日 大隅国司庁宣写
二〇 建武 二年 二月 廿四日 大隅国国宣写

二一 建武 二年 四月 廿日 大隅国日代施行状写
二二 建武 三年 四月 五日 足利直義軍勢催促状写

二三 大隅国將軍方交名注文写
二四 大隅国直冬方交名注文写

二五 文和 三年 二月 六日 足利尊氏御教書写

二六 康安 二年 三月 廿六日 大隅国在庁利米借状写

二七 貞治 四年 三月 八日 大隅国在庁質券写

二八 康曆 三年 二月 十三日 藤原某寄進状写(抄)

二九 応永十一年 十二月 十五日 姫木忠通寄進状写

三〇 永享 三年 三月 大隅国司庁宣抄写

三一 天文十六年 四月 廿一日 富山某・村岡某連署寄進状写

三二 紀定清証文写
三三 正月 廿七日 伊地知重貞等連署書状写

三四 永正十一年 九月 五日 伊地知重周等連署寄進状写

三五 永正十五年 十月 廿五日 平山忠康証状写

三六 永正十八年 三月 十五日 隅州武安名経田坪付写

三七 大永 七年 (三月 廿二日) 島津家老臣連署坪付写

三八 十二月 廿四日 盛春書状写

三九 大永 七年 十二月 二日 新納忠勝願文抄写

四〇 天文十一年 十二月 十五日 新納安千代丸願文写

文書目録

一八 元徳 三年 八月 卅日 大隅国守護代盛光書下写

一七 延慶 三年 十二月 廿三日 大隅国司庁宣写

一六 徳治 二年 十一月 卅日 藤原恒幸讓状写

一五 嘉元 三年 九月 八日 大隅国司庁宣写

一四 永仁 六年 十月 一日 主神司祐恒讓状写

一三 弘安 五年 三月 十六日 主神司祐恒讓状写

一二 文永 九年 九月 廿六日 六波羅御教書写

一一 延慶 二年 二月 十九日 守護方下知状案文写

一〇 文永 九年 二月 十三日 大隅国守護代施行状写

九 文永 八年 十二月 十九日 大隅国守護代施行状写

八 文永 八年 九月 廿日 藤原恒久讓状写

七 正嘉 二年 二月 一日 大隅守護代藤原兼頼下文写

六 建長 四年 八月 十三日 散位某書下写

五 建長 四年 四月 十四日 大隅国留守所下文写

四 建長 三年 二月 廿五日 六波羅御教書写

三 建長 三年 二月 調所恒久申状写

二 天福 二年 八月 大隅国司庁宣写
大隅国留守所施行状写

一〇四 貞亨 二年 六月 五日 某寛書写
 一〇五 宝永 二年 四月 廿八日 代々小番帳写
 一〇六 五月 廿九日 廻状写

一八 十二月 廿日 民部少輔頭国書状写
 一九 四月 廿三日 義忠書状写

大慈寺文書

一 観応 二年 八月 十九日 畠山直顯寄進状写
 二 観応 二年 十一月 十九日 足利惠源直寄進状写
 三 文和 五年 二月 廿八日 畠山直顯書下写
 四 延文 二年 二月 廿九日 畠山直顯寄進状写
 五 延文 二年 四月 廿七日 畠山直顯書下写
 六 延文 二年 閏七月 廿日 畠山直顯寄進状写
 七 延文 二年 八月 廿七日 畠山直顯寄進状写
 八 延文 三年 八月 廿一日 畠山直顯書下写
 九 延文 三年 十月 八日 畠山直顯寄進状写
 一〇 正平十三年 十二月 二日 菊池武光禁制写
 一一 正平十三年 十二月 宇土高俊禁制写
 一二 延文 五年 二月 六日 定覚書状写
 一三 延文 五年 五月 晦日 沙弥光惠書状写
 ※(一二) 延文 五年 五月 晦日 沙弥光惠書状写
 一四 延文 八年 二月 廿四日 島津氏久寄進状写
 一五 応永卅二年 三月 十四日 島津貴久^忠寄進状写
 一六 永享 八年 正月 十八日 島津忠国寄進状写
 一七 文明 二年 九月 四日 島津立久書下写

〔御文書写留帳〕
 二〇 文安 元年 八月 六日 沙弥某奉書写
 二一 延文 四年 十二月 十五日 足利義詮御判御教書写
 二二 文安 元年 八月 六日 沙弥某証状写
 二三 康曆 二年 五月 廿四日 某制札写
 二四 康安 二年 八月 某禁制写
 ※(二) 観応 二年 十一月 十九日 足利惠源直寄進状写
 二五 応安 六年 八月 七日 今川了俊^世禁制写
 二六 応安 六年 八月 七日 今川了俊^世書下写
 二七 永和 四年 三月 十八日 今川了俊^世書下写
 ※(一四) 延文 八年 二月 廿四日 島津氏久寄進状写
 ※(一六) 永享 八年 正月 十八日 島津忠国寄進状写
 ※(一七) 文明 二年 九月 四日 島津立久書下写
 二八 応永十三年 六月 五日 島津元久寄進状写
 二九 正月 十六日 島津氏久書状写
 三〇 永和 三年 十一月 七日 島津氏久寄進状写
 ※(一五) 応永卅二年 三月 十四日 島津貴久^忠寄進状写
 三一 文明 二年 九月 四日 村田経安外二名連署施行状写
 三二 応永十九年 四月 廿八日 新納久臣寄進状写
 三三 応永 廿年 七月 新納久臣寄進状写

三四	天正十七年	八月廿一日	島津龍伯 <small>義久書下写</small>	四六	延文	五年	二月三日	三式書狀写	
三五	天正十七年	十一月十五日	島津義弘書下写	※(五)	延文	二年	四月廿七日	島山直顯書下写	
三六	(天正十八年九)	八月十六日	島津義弘書狀写	四七	觀応	三年	四月廿二日	島山直顯補任狀写	
※(一八)		十二月廿日	民部少輔顯国書狀写	※(九)	延文	三年	十月八日	島山直顯寄進狀写	
三七	永和	四年	三月	四八			五月十八日	島山直顯書狀写	
※(一)	觀応	二年	八月十九日	四九	正平	十四年	正月十一日	伴基榮寄進狀写	
三八	觀応	二年	八月十九日	五〇	正平	十二年	八月十三日	伴兼里 <small>肝付兼氏</small> 寄進狀写	
※(一〇)	正平	十三年	十二月二日	五一	天正	五年	十二月五日	島津義久補任狀写	
※(一一)	正平	十三年	十二月	五二	天正	十八年	二月六日	後陽成天皇繪旨写	
三九	正平	十三年	十二月	五三	天正	十八年	二月三日	禪彭補任狀写	
四〇	文和	元年	十一月廿八日	五四	慶長	八年	十一月廿五日	某奉書写	
※(一六)	延文	二年	閏七月廿日	五五	慶長	八年	十一月三日	宗仍補任狀写	
※(一二)	延文	五年	二月六日	五六	寛永	元年	七月十二日	島津家久補任狀写	
※(一七)	延文	二年	八月廿七日	五七	承応	三年	十二月朔日	島津光久補任狀写	
※(一四)	延文	二年	二月廿九日	種子島文書					
※(一三)	文和	五年	二月廿八日						
四一	文和	五年	二月廿八日	一	永正	八年	十二月廿九日	島津忠治証狀写	
※(一八)	延文	三年	八月廿一日	二	天正	八年	十月五日	島津義久証狀写	
※(一九)	延文	三年	十月八日	三	応永	二年	三月八日	沙弥将栄讓狀写	
四二	正平	三年	八月十六日	四			六月十五日	琉球三司官書狀写	
四三	正平	五年	十二月九日	五			三月五日	近衛植家書狀写	
四四	正平	四年	三月十日	六			六月廿七日	近衛植家書狀写	
四五	正平	三年	八月廿八日	七	慶長	十六年	四月十九日	島津惟新 <small>義弘</small> 某方伝授狀写	

千竈文書

八 慶長 八年 六月 五日 島津惟新義弘葉方伝授状写 一 嘉元 四年 四月十四日 千竈時家讓状

九 慶長 八年 六月 六日 島津惟新義弘葉方伝授状写 二 嘉元 四年 四月十四日 千竈時家讓状

一〇 十二月 四日 島津久通外二名連署書状写 (六月)三日 伊勢貞昌書状写 三 嘉元 四年 四月十四日 千竈時家讓状

一一 正月 五日 島津久通・新納久詮連署書 四 正平十一年 七月 千竈本阿申状

一二 状写 五 七月廿五日 春秀書状

一三 七月廿一日 島津家久書状写 六 天授 元年 十二月 二日 伊集院久氏名字状

一四 八月 二日 日増請取状写 七 永徳 元年 十一月十九日 島津伊久宛行状

一五 長享 三年 正月十一日 日述請取状写 八 康応 二年 六月十八日 伊道・増勝売券

一六 長享 三年 正月十一日 日述請取状写 九 明徳 五年 正月十一日 三郎左衛門証文

一七 長享 三年 正月十一日 日述請取状写 一〇 永享 七年 五月廿二日 島津好久宛行状

一八 文亀 四年 春時正 種子島忠時請取状写 一一 文安 元年 十一月 廿日 千竈久家外二名連署寄進状

一九 三月 五日 近衛植家書状写 一二 某坪付

二〇 九月 廿日 高木正次書状写 一三 某坪付(斷簡)

二一 十一月廿三日 伊勢貞昌書状写 一四 某坪付(斷簡)

二二 十一月十九日 島津義弘伝授状写 一五 慶長十三年 正月廿六日 鹿兒島支配所知行名寄帳

二三 七月 廿日 北郷久加軍役書出写 一六 慶長十九年 八月 二日 三原重種外三名連署知行目

二四 種子島忠時起請文前書写 一七 慶長十九年 八月 二日 宮原景勝知行名寄帳

二五 寬永十一年 十二月 吉日 種子島忠時起請文前書写 一八 慶長十九年 八月 二日 宮原景勝知行名寄帳

二六 五月十五日 阿部忠秋・阿部重次連署書 一八 正徳 元年 六月 吉日 千竈家包名字状

二七 寬永 九年 八月 五日 種子島忠時軍役書出写 一九 明和 六年 八月 吉日 清水盛富書状

二〇 状写 二〇 某物成覚

寺尾文書

二一	嘉曆元年	十二月九日	久秀状	一五	延文四年	八月十日	入来院楠本大園のさいほう
二二	嘉曆二年	後九月廿八日	鎮西御教書	一六	身曳状案		
二三	嘉曆四年	五月	渋谷惟重遺領注進状案	一七	延文五年	二月九日	渋谷妙勝名重讓状
二四	建武五年	後七月二日	島山直顯施行状	一八	延文五年	二月九日	渋谷妙勝名重讓状
	康永三年	八月廿八日	尼けうほん讓状案	一九	延文五年	(八月四日)	渋谷妙勝名重讓状
				二〇	延文五年	八月四日	渋谷妙勝名重讓状案
				二一	延文五年	八月九日	渋谷妙勝名重讓状
				二二	延文五年	八月九日	渋谷妙勝名重讓状案
				二三	永和三年	七月十六日	渋谷妙勝名重讓状
				二四	康曆二年	二月九日	渋谷妙勝名重讓状
				二五	康曆二年	二月九日	渋谷妙勝名重讓状
				二六	康曆二年	二月九日	大和守重家証状案
				二七	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状
				二八	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状案
				二九	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状
				三〇	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状案
				三一	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状
				三二	応永二年	八月三日	渋谷道賢讓状案
				三三	應永二年	八月三日	渋谷道賢讓状案

三四 応永廿三年 九月 五日 渋谷諸重讓狀

三五 永享 九年 二月廿八日 渋谷重長・重頼連署証狀

三六 永正 二年 十二月 吉日 八幡公事日取注文

三七 永正十五年 六月 三日 鶴川日記

三八 三九 用途未進注文案
入来院塔原北方段別用途結

四〇 解狀案

四一 某本物返在家売券案

四二 十二月十二日 島山直顯軍勢催促狀

四三 田地坪付注文

四四 田地坪付注文

四五 渋谷重頼書狀

四六 七月廿六日 入来院重治書狀
寺尾氏系図

寺師文書

一 天正 廿年 十一月十二日 島津義久袖加判町田久倍領

二 天正 廿年 十一月十九日 知目錄

三 慶長十五年 四月廿六日 島津義久袖加判阿多盛淳外

四 慶長十五年 十月 三日 三名連署領知目錄

五 寬永十八年 十月廿三日 新納忠元知行目錄
伊集院忠貞書狀
島津久慶外四名連署書狀

六 万治 二年 七月 九日 大口支配所知行名寄目錄

七 万治 二年 七月 九日 大口支配所知行名寄目錄

八 万治 二年 七月 九日 大口支配所知行名寄目錄

九 万治 二年 七月 九日 大口支配所知行名寄目錄

一〇 寬文 六年 二月十三日 寺師吉兵衛口上書

一一 寬文 七年 正月廿二日 寺師吉兵衛口上書

一二 寬文 九年 九月十八日 寺師吉兵衛口上書

一三 一四 寬文 九年 十二月廿八日 岩崎全兵衛・木場七郎兵衛
連署口上覺

一五 文久 三年 正月 寺師吉兵衛覺斷簡

一六 慶長 八年 十二月十五日 新納久仰副書
伊集院抱節・山田理安連署

一七 宝永 二年 七月 三日 知行名寄帳
寺師宗等覺

一八 十二月十六日 伊地知季通覺書

一九 写古目錄

友野文書

一 明治十八年 四月 友野家譜序

二 慶長 廿年 三月廿七日 友野甲斐守入道元真申狀写

三 天正 廿年 十一月十五日 島津義久袖判領知目錄写

四 文祿 五年 八月廿三日 伊集院幸侃返地目錄写

五 慶長 六年 六月 三日 島津忠長外三名連署返地目

延時文書

一	文治三年	十月廿五日	伴三子讓状	一七	正応六年	六月六日	大藏種忠着到状
二	寛喜三年	二月十九日	平忠友讓状	一八	正安元年	十二月十七日	鎮西御教書
三	寛元四年	十月廿九日	関東御教書案	一九	正安四年	八月四日	在国司道雄代道弘和与状
四	寛元四年	十二月十一日	関東御教書	二〇	正安四年	八月廿八日	守護代本性覆勘状
五	宝治三年	二月十四日	をくまの太子讓状	二一	嘉元三年	二月十五日	ますとみのそめう置文
六	建長五年	十一月廿六日	をくまのみちひさ讓状	二二	延慶三年	九月四日	沙弥道雄書下
七	弘長二年	八月十一日	島津忠時書下	二三	正和三年	五月	延時成仏代忠種陳状
八	弘長四年	正月十三日	島津道仏時覆勘状	二四	正和三年	八月四日	鎮西御教書案
九	文永元年	十月十日	沙弥見仏讓状案	二五	正和四年	十月廿日	平忠兼一門連署証状
一〇	文永八年	五月廿日	沙弥見仏讓状	二六	元弘二年	五月十六日	信忠沽券
一一	文永九年	四月三日	平忠恒・同忠俊連署讓状	二七	元亨四年	十月廿一日	延時忠種着到状
一二	文永十年	二月廿日	島津久時書状案	二八	嘉暦元年	十二月五日	平忠治和与状
一三	文永十年	十一月十三日	れんしやう讓状	二九	嘉暦三年	十二月五日	道巖請取状
一四	文永十一年	六月三日	六波羅御教書	三〇	元徳二年	九月	新田宮雜掌道海重申状
一五	弘安五年	九月	正八幡宮使尊長安堵状	三一	元徳二年	十月廿六日	渋谷覚禅施行状
一六	弘安八年	八月十日	おくらのさいあみたふつ	三二	正慶二年	二月五日	沙弥寛念讓状
				三三	建武三年	六月	延時法仏軍忠状
				三四	建武三年	六月	延時法仏軍忠状
				三五	建武四年	三月六日	延時信忠軍忠状
				三六	建武四年	八月	延時法仏軍忠状
				三七	建武四年	十一月廿一日	平忠村讓状
							延時法仏軍忠状

※(三三)

三八 曆応 四年 二月 新田宮執印友雄申状

三九 曆応 四年 三月廿四日 高重茂奉書案

四〇 至徳 四年 五月 四日 宮内大輔今川三雄安堵状

北郷文書

〔北郷文書 乾〕

一 文和 四年 十二月廿八日 足利尊氏御教書写

二 討死人交名注文写

三 延文 四年 四月 五日 島津道鑑貞久讓状写

四 四月十五日 赤松滿政書状写

五 大永 八年 六月 廿日 島津勝久宛行状写

六 天文十七年 六月十一日 島津貴久起請文写

七 天文十八年 十二月廿九日 肝付兼盛起請文写

八 天文廿一年 十二月 四日 島津貴久外五名連署起請文写

九 天文十八年 十二月 七日 祁答院良重起請文写

一〇 天文十九年 二月 廿日 入来院重嗣起請文写

一一 永祿 五年 六月廿一日 伊集院孤舟忠朗外五名連署起請文写

一二 永祿 五年 八月 吉日 相良頼房起請文写

一三 (永祿 七年) 三月十三日 近衛前久書状写

一四 永祿 七年 十一月十九日 島津義久起請文写

一五 永祿 十一年 六月十五日 島津義久起請文写

一六 (永祿 十一年) 十月 二日 島津義久書状写

一七 永祿十二年款 九月 七日 相良頼房書状写

一八 天正 二年 九月 十日 島津義久起請文写

一九 天正 二年 九月十一日 島津忠平義弘書状写

八田文書

〔八田家文書 一〕

一 正応 元年 七月十六日 関東御教書案

二 正応 二年 二月 三日 島津忠宗警固催促状案

三 弘安 六年 十二月廿一日 関東御教書案

四 弘安 七年 正月廿三日 島津忠宗書下案

五 弘安 九年閏十二月廿八日 式目追加案

六 弘安 十年 三月十一日 式目追加案

七 建治 三年 九月十九日 関東御教書案

八 弘安 七年 七月 八日 某袖判下文案

〔八田家文書 二〕

九 建保 三年 十月 四日 関東御教書案

一〇 十一月廿一日 島津忠久書状案

一一 建長 六年 四月 八日 島津忠時請取状案

一二 弘長 二年 (七月 十日) 関東御教書案

一三 弘長 二年 (八月十一日) 島津忠時書下案

二〇 天正 二年 九月 十日 川上意釣忠外三名連署起請

文享

二一 (天正 五年) 四月 七日 近衛前久書狀写

二二 天正 六年 七月 廿日 島津義久起請文写

二三 (天正 六年) 十月 十五日 島津義久書狀写

二四 (天正七年頃カ) 六月 十八日 飛鳥井雅繼書狀写

二五 天正 七年 十二月 廿三日 島津義久宛行狀写

二六 (天正十一年) 二月 廿日 近衛前久書狀写

二七 天正十五年 五月 十六日 島津義久書狀写

二八 (天正十五年) 五月 廿六日 豊臣秀吉朱印狀写

二九 (天正十五年) 六月 十五日 豊臣秀長書狀写

三〇 (天正十五年) 七月 五日 豊臣秀長書狀写

三一 (天正十六年) 十月 廿一日 豊臣秀吉朱印狀写

三二 (天正十六年) 二月 十一日 豊臣秀吉朱印狀写

三三 天正十六年 二月 三日 島津義弘起請文写

三四 (天正十七年) 二月 十一日 島津義久書狀写

三五 (天正十七年) 十二月 十二日 島津龍伯義久書狀写

三六 (天正十七年) 十一月 六日 豊臣秀吉朱印狀写

三七 (天正十七年) 十一月 六日 豊臣秀吉朱印狀写

三八 (天正十八年) 七月 十九日 島津竜伯義久書狀写

三九 (文禄二年頃カ) 四月 朔日 豊臣秀吉朱印狀写

四〇 (文禄年間) 四月 十三日 豊臣秀次朱印狀写

四一 (文禄年間) 八月 十六日 近衛竜山前書狀写

四二 八月 廿日 島居小路経孝書狀写

四三 八月 廿日 青蓮院尊朝法親王書狀写

四四 天正 六年 八月 三日 島津義久起請文写

四五 天正 六年 十一月 十三日 島津義久起請文写

四六 天正十六年 十二月 十二日 島津龍伯義久起請文写

四七 (天正十八年) 正月 十四日 豊臣秀吉朱印狀写

四八 (天正十八年) 十一月 八日 豊臣秀吉朱印狀写

四九 (天正十八年) 十二月 十八日 豊臣秀吉朱印狀写

五〇 文禄 四年 七月 五日 島津竜伯義・同義弘連署証狀写

五一 (文禄 四年) 九月 十五日 安宅秀安書狀写

五二 (慶長 三年) 二月 四日 島津龍伯義久書狀写

五三 (慶長 三年) 四月 廿八日 島津龍伯義久書狀写

五四 慶長 四年 九月 十三日 島津忠恒家久書狀写

五五 慶長 五年 十一月 廿三日 島津忠恒家久宛行狀写

五六 慶長 五年 十月 十九日 長倉兵国書狀写

五七 (慶長 五年) 十二月 四日 島津忠恒家久書狀写

五八 慶長十一年 十一月 晦日 島津家久感狀写

五九 (慶長十五年) 七月 五日 島津家久書狀写

六〇 (慶長十三年) 六月 二日 島津家久書狀写

六一 (元和 元年) 五月 十五日 島津惟新義書狀写

六二 元和 二年 七月 三日 酒井忠利外三名連署達書写

六三 (元和 二年) 十二月 廿一日 土井利勝書狀写

六四	(元和 三年九)	五月 四日	酒井忠利書狀	八六	四月 三日	近衛前久書狀写
六五	(元和 三年九)	五月 四日	土井利勝書狀写	八七	十二月十七日	島津義久書狀写
六六	(元和 三年九)	五月 四日	朝倉宣正書狀写	八八	八月十四日	飛鳥井雅教書狀写
六七		八月 八日	島津家久書狀写	八九	六月廿八日	飛鳥井雅教書狀写
六八		八月廿六日	島津光久書狀写	九〇	十二月十七日	島津義久書狀写
六九		四月十二日	島津家久書狀写	九一	十二月十三日	近衛信尹書狀写
七〇		九月十五日	島津家久書狀写	九二	正月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀写
七一		八月 三日	島津光久書狀写	九三	正月十一日	島津義久書狀写
七二		十一月十一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写	九四	正月十一日	島津義久書狀写
〔北郷文書 坤〕						
七三	応永十七年	六月	進上物注文写	九六	十一月廿六日	島津竜伯 <small>義久</small> 書狀写
七四		八月 八日	相良頼房 <small>義陽</small> 書狀写	九七	十二月十三日	近衛信尹書狀写
七五		九月廿二日	相良為廣書狀写	九八	正月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀写
七六	天文十八年	十二月 九日	北郷忠相起請文写	九九	正月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀写
七七		二月廿八日	尊朝法親王書狀写	一〇〇	正月十二日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写
七八		四月廿七日	近衛植家書狀写	一〇一	正月十一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写
七九		二月十九日	近衛植家書狀写	一〇二	十二月廿八日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀写
八〇		四月廿七日	近衛尚通書狀写	一〇三	十二月廿九日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写
八一		二月廿八日	飛鳥井雅教書狀写	一〇四	二月廿一日	島津氏老臣連署書狀写
八二		四月廿七日	近衛植家書狀写	一〇五	正月十一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写
八三		十一月 二日	飛鳥井某書狀写	一〇六	五月十七日	細川忠興書狀写
八四		四月廿七日	近衛尚通書狀写	一〇七	正月十二日	島津忠恒 <small>家久</small> 書狀写
八五		十二月十五日	島津貴久書狀写	一〇八	三月廿三日	島津家久書狀写

一〇九	正月十一日	島津家久書状写	一三二	十六日	島津家久書状写
一一〇	正月十二日	島津惟新 <small>義弘</small> 書状写	一三三	六月八日	島津家久書状写
一一一	正月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書状写	〔北郷文書 全〕		
一一二	正月十一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書状写	一三四	三月 吉日	北郷時久置文写
一一三	正月十一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書状写	一三五	三月 二日	南之郷中蘭門坪付写
一一四	四月廿一日	島津忠恒 <small>家久</small> 書状写	一三六	二月十九日	北郷時久知行宛行目録写
一一五	正月十一日	島津家久書状写	一三七	六月八日	北郷文右衛門尉・林六郎兵衛尉連署銀子請取状写
一一六	五月七日	島津家久書状写	一三八	元和 七年	林六郎兵衛米借用状写
一一七	三月十七日	島津家久書状写	一三九	(元和 二年)	十二月廿一日 酒井忠世書状写
一一八	正月十日	島津光久書状写	※(六三)	(元和 二年)	十二月廿一日 土井利勝書状写
一一九	八月五日	島津家久判物写	※(六四)	(元和 三年)	五月 四日 酒井忠利書状写
一二〇	十二月九日	島津光久書状写	※(六五)	(元和 三年)	五月 四日 土井利勝書状写
一二一	六月十七日	島津綱久書状写	※(六六)	(元和 三年)	五月 四日 朝倉宣正書状写
一二二	九月八日	島津光久書状写	※(六七)	元和 二年	七月 三日 酒井忠利外三名連署達書写
一二三	十一月廿九日	藩達書写	一四〇	弘治 二年	九月 吉日 諸寺家定法写
一二四	八月六日	島津家久書状写	一四一	(元和 一三年)	林六郎兵衛上洛御供日帳抄写
一二五	九月廿九日	島津家久書状写	一四二	文禄 四年	正月 八日 北郷一雲 <small>時久</small> 判物写
一二六	八月廿二日	島津家久書状写	一四三	文禄 四年	正月 八日 北郷一雲 <small>時久</small> 判物写
一二七		島津家久書状写	一四四		閏三月廿五日 伊勢貞昌書状写
一二八	正月廿一日	島津家久書状写	一四五		七月廿八日 伊勢貞昌書状写
一二九	正月十八日	島津家久書状写	一四六		九月十一日 伊勢貞昌書状写
一三〇	十二月廿八日	島津家久書状写			
一三一	八月五日	島津家久書状写			

一四七 七月 六日 伊勢貞昌書狀写
一四八 八月 十二日 町田久幸・伊勢貞昌連署書
狀写

一四九 島津氏略系図写

〔北郷文書附録 一〕

※(一) 文和 四年 十二月廿八日 足利尊氏御教書写

※(二) 討死人名注文写

一五〇 七月 廿六日 相良為清晴書狀写

一五一 (天文年間) 六月 廿日 島津貴久書狀写

一五二 (天文年間) 四月 十九日 伊東義祐書狀写

一五三 (天文年間) 七月 廿五日 伊東義祐書狀写

一五四 建武 三年 三月 十一日 本田久兼軍忠狀写

一五五 七月 伊東祐脩書狀写

一五六 (大永 六年) 九月 四日 島津勝久書狀写

一五七 正月 廿五日 相良頼房書狀写

一五八 四月 三日 近衛前久書狀写

一五九 高麗渡海人数書写

一六〇 六月 廿二日 北郷一雲時久書狀写

一六一 八月 六日 石田三成書狀写

一六二 六月 廿五日 島津家久書狀写

一六三 九月 十五日 北郷忠能書狀写

一六四 慶長 五年 三月 吉祥日 北郷忠能願文写

一六五 (慶長十九年) 十二月 十六日 伊勢貞昌書狀写

一六六 慶長 五年 三月 吉日 北郷忠能願文写

一六七 寛永十八年 五月 五日 某覚書写

一六八 (慶長十九年) 十二月 十四日 本田正純書狀写

一六九 寛永十二年 七月 十八日 島津久元・伊勢貞昌連署書
書写

一七〇 七月 十三日 島津家久書狀写

一七一 七月 朔日 鎌田左京亮送狀写

一七二 七月 六日 菱刈半右衛門尉届書写

一七三 五月 九日 島津久慶書狀写

一七四 (寛永十三年) 五月 十五日 島津家久条書写

一七五 十二月 十八日 某覚書写

一七六 (寛永十四年) 九月 十九日 島津久元達書写

一七七 六月 十日 某覚書写

一七八 寛永十八年 四月 朔日 伊勢貞昌覚書写

一七九 寛永 九年 六月 十一日 島津家久袖判条書写

一八〇 寛永十六年 三月 廿一日 喜入忠統覚書写

一八一 寛永十八年 二月 廿四日 島津光久条書写

一八二 正保 三年 十二月 十七日 川上久国外二名連署達書写

一八三 寛永十一年 十一月 廿六日 島津家久条書写

一八四 (寛永十一年) 七月 六日 島津家久書狀写

一八五 (寛永十八年) 四月 十九日 島津光久書狀写

一八六 (寛永十八年) 四月 十九日 島津光久書狀写

一八七 (寛永十四年) 十二月 三日 松平定行書狀写

文書目録

一八八(寛永十四年)	六月十五日	酒井忠吉書状写	二〇七	寛文十一年	二月廿四日	島津家老中衆口上寛写
一八九(寛永十四年)	十二月廿三日	島津久元・川上久因連署書状写	二〇八		十一月廿九日	某達書写
一九〇	三月 二日	島津久通外四名連署書状写	二〇九		十一月廿九日	市来次郎左衛門書状写
一九一	九月廿四日	鎌田藏人達書写	二一〇		正月 八日	北郷久嘉書状写
一九二	正月十八日	伊勢貞昭口上寛写	二一一		十月 朔日	北郷久嘉願書写
一九三(寛文三年)	正月 九日	島津光久申渡書写	二一二		十二月 五日	島津久當達書写
一九四(寛文三年)	正月 五日	島津光久申渡書写	二一三		十二月 六日	北郷久嘉書状写
一九五(寛文三年)	正月 八日	北郷千世松祖母請書写	二一四	永祿 四年	十月 吉日	島津日新忠教戒条々写
一九六(寛文三年)	正月 九日	島津光久申渡書写	二一五	慶長 元年	六月 吉辰	常德寺大年東堂崇延外二名連署証文写
一九七(寛文三年)	正月十三日	北郷久常申状写	二一六	慶長 六年	八月 七日	島津義久・義弘・忠恒連署掟書写
一九八(寛文三年)	正月十六日	島津光久申渡書写	二一七	慶長 廿年	七月	武家諸法度写
一九九(寛文三年)	正月十八日	島津光久申渡書写	二一八	寛永十二年	六月廿一日	武家諸法度写
二〇〇(寛文三年)	正月十八日	北郷久常口上書写	二一九			乘馬衆へ被仰出条々写
〔北郷文書附録 二〕						
二〇一(寛文九年)	四月 九日	島津光久袖判条書写	二二〇	寛永十二年	七月 四日	陸御供衆法度之条々写
二〇二(寛文九年)	四月 九日	島津久通・島津忠広連署条書写	二二一	寛永十二年	十一月 朔日	島津久慶外三名連署達書写
二〇三(寛文九年)	四月 九日	島津久通・島津忠広連署条書写	二二二	寛永十二年	十一月 朔日	島津久慶外三名連署達書写
二〇四(寛文年間)	正月 五日	島津久英書状写	二二三	寛永十六年	七月 朔日	島津光久条書写
二〇五(寛文十一年)	二月 九日	島津光久仰出書写	二二四	寛永十七年	正月廿四日	島津光久達書写
二〇六	二月十二日	島津光久仰出書写	二二五	寛永十七年	正月廿八日	島津光久達書写
			二二六	寛永 廿年	十一月十五日	島津光久達書写
			二二七	寛永廿二年	正月 三日	評定所達書写

二二八 正保 二年 三月十二日 島津久慶外二名連署達書写 二四八 某書状写

二二九 慶安 三年 二月十七日 島津久頼外二名連署達書写 二四九 島津久慶外五名連署書状写

二三〇 与頭可致覚悟条々写 二五〇 八月 三日 某達書写

二三一 承応 二年 九月 三日 与衆へ可被申渡条々写 二五一 八月廿五日 五代少左衛門達書写

二三二 明暦 二年 二月十二日 宗体奉行所達写 二五二 五月 三日 某覚写

二三三 明暦 三年 二月十七日 藩郡所達書写 二五三 正保 四年 三月廿三日 幕府評定所達書写

二三四 寛文 二年 十月廿八日 島津久通外六名連署達書写 二五四 (正保 二年九) 幕府達書写

二三五 寛文 二年 正月十七日 島津久通外五名連署達書写 二五五 三月 二日 某達書写

二三六 寛文 三年 正月廿一日 島津久通外六名連署達書写 二五六 八月十一日 伊地知助右衛門・田中五右衛門連署達書写

二三七 寛文 九年 十二月 三日 藩御物座達書写 二五七 九月 八日 某届書写

二三八 寛文十一年 正月廿五日 評定所達書写 二五八 六月廿五日 田中五右衛門外二名連署覚写

二三九 寛文十一年 六月廿四日 島津久元外二名連署達書写 二五九 六月廿九日 有馬五右衛門届書写

二四〇 寛文十二年 三月廿一日 島津忠広・町田忠代連署達書写 二六〇 六月 晦日 島津久龍書状写

二四一 寛文十三年 七月廿四日 島津久竹外四名連署条書并 二六一 慶安 三年 四月 三日 平田盛右衛門伺書写

二四二 延宝 五年 七月十六日 島津久竹外四名連署達書写 二六二 慶安 三年 四月廿一日 北郷次右衛門・土持権之助連書答書写

二四三 某袖判条書写 二六三 三月十四日 藩達書写

二四四 評定所達書写 二六四 十一月十七日 島津筑後口上覚写

二四五 藩達書写 二六五 十一月廿九日 市来次郎左衛門申渡書写

二四六 藩達書写 二六六 十一月廿九日 島津筑後書状写

二四七 藩達書写 二六七 正月十八日 某達書写

〔北郷文書附録 三〕

斑目文書

二六八	二月 六日	島津筑後達書写	四	徳治 二年	十月	蓮性陳狀案
二六九	七月十三日	右馬頭書狀写	五			關東引付衆結番交名注文案
二七〇	十一月廿六日	某達書写	六	正和 二年	七月 廿日	沙弥行誓請文案
二七一	九月 吉日	諸寺家定法写	七	元亨 四年	十月廿一日	斑目政泰着到狀
二七二	五月十九日	某条書写	八	元徳 三年	十月十九日	斑目政泰着到狀
二七三	八月 朔日	新納久了達書写	九	建武 二年	八月 一日	斑目重実讓狀
二七四	正月 三日	評定所達書写	一〇	正平廿二年	四月 三日	沙弥祖銛讓狀
二七五	十月 廿日	島津久輝外二名連署達書写	一一	応永 二年	十月十五日	斑目重朝安堵狀
二七六	十一月 五日	島津久慶外三名連署達書写	一二	応永 五年	十一月 六日	斑目重茂安堵狀
二七七	六月廿一日	某袖判条書写	一三	応永十三年	四月 十日	斑目延廣讓狀
二七八	八月廿九日	島津久竹外四名連署達書写	一四			時吉・柏原兩名内所領注文
二七九		某起請文前書写	一五	応永十九年	十一月十五日	河内守延重名字書出
二八〇	三月 十日	島津久通外二名連署達書写	一六	永祿 元年	十二月 吉日	斑目広通寄進狀案
二八一	三月十九日	島津久通外三名連署達書写	※(一四)			時吉・柏原兩名内所領注文
二八二	四月十四日	某達書写				案
二八三	五月十一日	北郷忠顯智達書写	一七			某願文
二八四	四月廿四日	島津久頼外二名連署書狀写	一八			渋谷氏系図
二八五	十二月廿五日	鎌田政直達書写	一九			那答院渋谷氏・斑目氏系図
			二〇			橘姓斑目氏系図
			※(二〇)			橘姓斑目氏系図
一	七月廿四日	出羽国斑目地頭職補任狀案	二一			那答院渋谷氏・斑目氏系図
二	八月十一日	斑目行蓮重松讓狀案				
三	九月 五日	斑目聖蓮泰基讓狀				

三角文書

一 文保 元年 九月十六日 鎮西下知狀

二 元応 三年 五月 九日 沙弥西雲讓狀案

三 正中 三年 九月 八日 沙弥西雲讓狀

四 貞和 二年 四月十七日 平経忠讓狀

五 延文 六年 二月十二日 道政・山田泰道連署沽券

六 貞治 七年 四月十七日 島津師久預狀

七 明德 二年 二月十七日 森忠次讓狀

八 応永卅五年 八月廿二日 本田常直外四名連署契狀

九 長祿 四年 十月 吉日 成富忠光・忠成連署証狀

一〇 享祿 五年 九月 吉日 森忠辰名乘書

一一 某坪付

一二 天文十一年 三月 七日 覚宥伝授狀

一三 四月 三日 森重有書狀

七 安政 六年 十月 新納久仰奥書

八 安政 六年 十二月 伊地知季通副書

山口文書

一 嘉元 三年 七月 渋谷重心陳狀案

二 嘉元 四年 正月 渋谷重心代某陳狀案

三 曆応 五年 三月十九日 藏人東宮学士藤原兼綱奉口宣案

四 元弘 三年 九月廿五日 山口靜心惟着到狀

五 貞和 七年 五月廿五日 足利直冬感狀

六 建武 五年 七月十七日 高城重棟書下

七 觀応 二年 四月廿一日 山口重音讓狀

八 明応 九年 十月十九日 山口重経讓狀

九 文亀 元年 十二月廿二日 山口重経讓狀

一〇 十月 廿日 入来院重頼書狀

一一 山口氏系図

村田文書

一 慶長十四年 十月 七日 新納忠元坪付

二 慶長十九年 六月廿七日 比志島国貞外二名連署知行目録

三 元和 六年 三月廿九日 知行名寄目録

四 寛永 五年 十二月十六日 知行名寄目録

五 寛永 七年 三月 二日 大口支配所不足割付目録

六 延宝 六年 正月十一日 大口支配所知行目録

山門文書

一 正平 五年 四月廿五日 征西將軍宮令旨

二 貞和 六年 九月廿五日 足利直冬書下

三 正平 六年 十一月廿七日 征西將軍宮令旨

四 建保 五年 三月 五日 平秀忠讓狀

五 文安 四年 十月 吉日 道性所領注文

六	康永 四年	八月 三日	道惠讓狀
七	康永 四年	八月 三日	家貞証狀
八	嘉元 三年	五月十六日	しやうしん宛行狀案
九	延応 元年	十一月 九日	沙弥行念讓狀案
一〇	文保 二年	十一月 二日	鎮西下知狀案
一一	曆応 二年	五月 十日	妙義讓狀
一二			某讓狀案
一三	正平 元年	三月廿八日	平家高讓狀
一四	貞和 六年	四月廿九日	孫二郎証狀
一五	明德 五年	四月 九日	伊予守某書下
一六	文和 四年	二月廿九日	家重・家高讓狀
一七	延文 元年	十月 九日	島津道鑑 ^貞 書下
一八	延文 二年	五月十九日	一色直氏宛行狀
一九			秀貞讓狀案
二〇			秀貞讓狀案
二一	徳治 二年	七月廿七日	山門院地頭兼惣郡司代盛秋 和与狀
二二	応永十五年	正月十一日	沙弥性慶讓狀
二三	文安 六年		持家讓狀
二四	文安 六年	二月 九日	平家教讓狀
二五			山門氏系図
二六			大隅・薩摩国古城主来由記

留守文書

一	天文二十年	八月廿六日	石清水八幡宮別当家奉書
二	天文二十年	九月 六日	石清水八幡宮別当家奉書
三	天正 四年	九月 十日	石清水八幡宮別当家奉書
四	慶長十七年	十一月廿八日	町田久幸外三名連署証狀
五	天文十七年	五月十七日	伊集院忠朗坪付
六	慶長 四年	五月十七日	島津龍伯 ^久 寄進狀
七	慶長 四年	九月十四日	島津忠恒 ^家 寄進狀
八	慶長十九年	七月 四日	比志島国貞外二名連署知行 目録
九		十一月十八日	島津義弘書狀

